川池西古窯

-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2017

大 府 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 二 友 組

川池西古窯

-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2017

大 府 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 二 友 組

1.調査区遠景 北東から

2.調査区全景 俯瞰

巻頭図版2

1.SY01前庭部完掘 北から

2.SY01前庭部断面 南東から

1.SY01焚口完掘 東から

2.SY01焚口断ち割り断面 東から

3.SY01前庭部焼台出土状況 南東から

4.SK01・02完掘 東から

5.SK05断面・遺物出土状況 北から

巻頭図版4

1.SY02・03完掘 南西から

2.SY02完掘 北東から

3.SY03完掘 北東から

1.SY02（Cライン）断面 北から

2.SY02（Aライン東半）断ち割り断面 北から

3.SY02分炎柱出土状況 南から

4.SY02分炎柱断面 南から

5.SY02（Aライン西半）断ち割り断面 東から

6.SP01（ロクロピット）粘土出土状況 南西から

巻頭図版6

1.SY03断面 西から

2.SY03（Aライン）断ち割り断面 南から

3.SY03分炎柱断面 南西から

4.灰原4遺物出土状況 南東から

5.出土遺物

例言

１．本書は、愛知県大府市桃山町地内に所在する、川池西古窯の発掘調査報告書である。

２．調査は、集合住宅建設に伴う事前調査として、三輪碩子の委託を受けた株式会社二友組が行い、経費は三輪碩子の負担による。調査面積は 333 ㎡である。

３．調査は、平成 29 年２月１日～平成 29 年４月 21 日にかけて行った。

４．調査は、大府市教育委員会監督の下、以下の体制で行った。

監督員：田中城久（大府市歴史民俗資料館埋蔵文化財専門員）

施工管理技士：岡嶋宏明・後藤英樹

調査員：杉山敬亮

調査補助員：髙木祐志・高橋理恵・湯川善一

測量技術員：白木宏幸・舟橋哲郎

調査作業員：鵜飼京子・寺沢なつ江・仲川信子・中西雅夫・山田 顕

整理補助員：田北 碧　　（五十音順・敬称略）

５．本書の執筆者は、下記の通り。本書の編集は、高橋が行った。

杉山：第１章第２節、第３章第１節、第５章第３節

高橋：第２章、第３章第３節、第５章第１・２節

湯川：第３章第２節

田中：第１章第１節

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）：第４章

６．遺物の写真撮影は、杉山が行った。

７．本書掲載の図版作成・遺物実測・遺物トレースは、高橋が行った。

８．本書で使用した座標は、世界測地系に準拠した公共座標成果（Ⅶ系）、方位は公共座標方位に基づき、標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用した。

９．土色および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 2014『新版標準土色帖』36 版　日本色研事業株式会社を参考とし、粒径は Wentworth の粒径区分法を用いた。

10．出土遺物の注記は、略称である「KWIN’16」　４桁の取上げ番号　遺構名　層位名とした。

11．出土遺物ならびに図面・写真・台帳類は大府市歴史民俗資料館が保管している。

12．発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々の御指導御協力を賜った。記して感謝いたします。

赤塚次郎・安津由香里・大和ハウス工業株式会社・大府市文化保護委員・岡本直久・藤澤良祐・宮澤浩司（五十音順・敬称略）

凡例

１．本書に掲載する遺構・遺物図は、以下の縮尺を基本とした。

遺構図：窯体・土坑１/40、ピット１/20、全体図１/150・１/300・１/500、遺物出土状況図１/20

遺物図：１/３

２．遺構・遺物図にみえる記号等は次のとおり。

炭化物範囲　焼土範囲　――ケズリとナデの境界

３．本書では、次に示した地図を調整・使用している。

国土地理院発行　1：25,000 地形図　「鳴海」（平成 10 年）、「刈谷」（平成 21 年）

国土地理院発行　1：50,000 地形図　「名古屋南」（平成 13 年）、「半田」（平成 19 年）

「豊田」（平成 11 年）

地理調査所発行　1：200,000 地勢図「名古屋」「豊橋」「岐阜」「飯田」（昭和 29 年）

地質調査所発行　1：50,000 地質図「名古屋南」「半田」（昭和 61 年）

４．遺物の年代観および器種分類については、以下の参考文献を基本とした。

斉藤孝正 1988　「中世猿投窯の研究－編年に関する一考察－」『研究論集ＣＩ史学 34』
名古屋大学文学部

中野晴久 2012　「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業３ 中世・近世 常滑系　愛知県史編さん委員会

藤澤良祐 2007　「総論」『愛知県史』別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系　愛知県史編さん委員会

５．参考文献は以下のとおり。本書の記述は、特に断らない限りこれらの文献を引用・参照している。

池本正明ほか 2013　『別岨古窯群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 187 集
財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

大杉規之ほか 2015　『鴨池東古窯－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
ナカシャクリエイテブ株式会社

大府市 1991　『大府市誌 資料編 考古』愛知県大府市

大府市 1996　『海陸庵古窯址群・神明古窯址群 大府半月地区土地区画整理地内埋蔵文化財発掘報告書』大府市文化財調査報告書第２集 大府市教育委員会

大府市 2000　『ガンジ山Ａ古窯跡群 大府市桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第４集 大府市教育委員会

大府市 2005　『深廻間Ａ古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第５集 大府市教育委員会

大府市 2006　『深廻間Ｂ古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第７集 大府市教育委員会

大府市 2007　『砂原古窯跡 大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第８集 大府市教育委員会

大府市 2008　『深廻間Ｃ古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第９集 大府市教育委員会

大府市 2009 『瀬戸Ｂ古窯跡群・奥谷古窯跡 大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ』大府市文化財調査報告書第 10 集 大府市教育委員会

大府市 2010 『羽根山古窯跡群 大府羽根山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第６集 大府市教育委員会

大府市 2011 『立会池西Ａ古窯跡群・立会池Ｂ古窯跡群 大府共和西土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第 13 集 大府市教育委員会

大府市 2014 『瀬戸Ｃ古窯跡・久分古窯群 大府市共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第 11 集 大府市教育委員会

大府市 2016 『市内遺跡調査報告書 平成７～ 22 年度の試掘調査・立会調査報告』大府市文化財調査報告書 第 12 集 大府市教育委員会

川合剛ほか 1992 『ＮＮ 302 号窯・ＮＮ 304 号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

柴垣勇夫 1969 『吉田第一号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会

柴垣勇夫 1975 『吉田第二号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会

中野良法ほか 1999 『森岡第１号窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 85 集 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

表１　編年対応表

推定暦年代	和暦	時代	山茶碗 瀬戸窯（藤澤編年）	山茶碗 猿投窯（斎藤編年）	山茶碗 常滑窯（中野編年他）	古瀬戸（藤澤編年）	主要事項	参考事項
1000	寛弘五	平安時代	初期山茶碗 第１型式				宮内町の窯で灰釉陶器を生産する（野々宮古窯）。	
1050	永承五	平安時代	初期山茶碗 第２型式					
1100	康和二	平安時代	初期山茶碗 第３型式	第Ⅶ期 第１型式 古段階	第１段階			
				第Ⅶ期 第１型式 新段階	第１段階 １ａ型式		高根山（北崎町）で山茶碗を生産する（高根山古窯）。	
1150	久安七	平安時代	初期山茶碗 第４型式	第Ⅶ期 第２型式 古段階	第１段階 １ｂ型式		吉田町の窯で鳥羽離宮東殿の瓦を生産する（吉田第一号窯・第二号窯）。	1156（保元元）　保元の乱。 1160（平治元）　平治の乱。
				第Ⅶ期 第２型式 新段階	第１段階 ２型式			
			第５型式	第Ⅶ期 第３型式 古段階	第１段階 ３型式	前期様式 草創期		
1200	正治二	鎌倉時代		第Ⅶ期 第３型式 新段階	第１段階 ４型式	前期様式 Ⅰａ期 Ⅰｂ期	大府の丘陵に山茶碗窯が多く築かれる（川池西・ハンヤ・立根・江端古窯など）。	1185（寿永四）　鎌倉幕府成立。
		鎌倉時代	第６型式	第Ⅷ期 第１型式	第２段階 ５型式	前期様式 Ⅱａ期 Ⅱｂ期 Ⅱｃ期	「藤井宮御酒瓶子」つくられる。	1221（承久三）　承久の乱。
1250	宝治四	鎌倉時代	第７型式	第Ⅷ期 第２型式	第２段階 ６ａ型式	前期様式 Ⅲ期	半月町で、知多窯最終型式の山茶碗が築かれる（律粉東古窯）。	
		鎌倉時代	第８型式	第Ⅷ期 第３型式	第２段階 ６ｂ型式	前期様式 Ⅳ期		1274（文永十一）文永の役。 1281（弘安四）　弘安の役。
1300	正安二	鎌倉時代			第２段階 ７型式	中期様式 Ⅰ期 Ⅱ期 Ⅲ期 Ⅳ期		1333（元弘三）　鎌倉幕府滅亡。 1338（暦応元）　足利尊氏、征夷大将軍となる。
1350		南北朝	第９型式		第３段階 ８型式	後期様式 Ⅰ期 Ⅱ期		
1400	応永四	室町	第10型式		第３段階 ９型式	後期様式 Ⅲ期		
1450		室町	第11型式		第３段階 10型式	後期様式 Ⅳ期古 Ⅳ期新		1467（応仁元）　応仁の乱発生。

参考文献

大府市誌編さん刊行委員会 1991『大府市誌　資料編　近代現代』附年表　愛知県大府市

斉藤孝正 1988　「中世猿投窯の研究－編年に関する一考察－」『研究論集ＣＩ史学 34』名古屋大学文学部

中野晴久 2012　「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業３ 中世・近世 常滑系　愛知県史編さん委員会

藤澤良祐 2007　「総論」『愛知県史』別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系　愛知県史編さん委員会

目次

巻頭図版
例言
凡例

第１章　調査に至る経緯と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１節　発掘調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２節　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第３章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第２節　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

第３節　遺構と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第４章　川池西古窯出土炭化材の樹種同定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

第５章　総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

第１節　遺物分類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

第２節　編年的位置付け ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

第３節　遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
遺構観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
図版

挿図目次

図１　調査前地形・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
図２　遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
図３　大府市表層地質図・・・・・・・・・・・・・・5
図４　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図５　地区割り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図６　部位名称・窯体内グリッド・計測位置
・・・・・・・12
図７　基本土層模式図・・・・・・・・・・・・・・13
図８　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図９　初回操業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図 10　最終操業　・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 11　ＳＹ 01 焚口・前庭部（１）　・・・・・・18
図 12　ＳＹ 01 焚口・前庭部（２）　・・・・・・19
図 13　ＳＫ 01・02・03・・・・・・・・・・・・・ 20
図 14　ＳＫ 05（１）・・・・・・・・・・・・・・・21
図 15　ＳＫ 05（２）・・・・・・・・・・・・・・・22
図 16　ＳＹ 02（１）・・・・・・・・・・・・・・・24
図 17　ＳＹ 02（２）・・・・・・・・・・・・・・・25
図 18　ＳＹ 02（３）・・・・・・・・・・・・・・・26
図 19　ＳＹ 02（４）・・・・・・・・・・・・27・28
図 20　ＳＫ 04・ＳＰ 01・・・・・・・・・・・・・29
図 21　ＳＹ 03（１）・・・・・・・・・・・・・・・30
図 22　ＳＹ 03（２）・・・・・・・・・・・・・・・32
図 23　ＳＹ 03（３）・・・・・・・・・・・・33・34
図 24　ＳＫ 06・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図 25　灰原（１）　・・・・・・・・・・・・・・・36
図 26　灰原（２）　・・・・・・・・・・・・・・・37
図 27　灰原・築窯排土範囲・・・・・・・・・・38
図 28　灰原出土遺物（１）　・・・・・・・・・・39
図 29　灰原出土遺物（２）　・・・・・・・・・・40
図 30　灰原出土遺物（３）　・・・・・・・・・・41
図 31　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・41
図 32　川池西古窯出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真・・・・・・・・・45
図 33　分類（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
図 34　分類（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
図 35　分類別比率・・・・・・・・・・・・・・・・49
図 36　径高指数グラフ（１）・・・・・・・・・ 50
図 37　径高指数グラフ（２）・・・・・・・・・ 51
図 38　遺構別径高指数グラフ（１）・・・・・ 52
図 39　遺構別径高指数グラフ（２）・・・・・ 53
図 40　遺構別径高指数グラフ（３）・・・・・ 54
図 41　遺構別器形分類・・・・・・・・・・・・・55
図 42　編年対応図・・・・・・・・・・・・・・・・57
図 43　遺構別古段階・新段階比率・・・・・・58
図 44　ロクロピット模式図・・・・・・・・・・58
図 45　時期別遺構変遷・・・・・・・・・・・・・59

表目次

表１　編年対応表
表２　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・8
表３　土層観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
表４　川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果（１）
・・・・・・42
表５　川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果（２）
・・・・・・43
表６　遺構別遺物集計表・・・・・・・・・・・ 46
表７　分類別平均法量と形状（碗・小皿）・・ 47
表８　分類別平均法量と形状（片口鉢）・・・ 48
表９　工房と窯体類例・・・・・・・・・・・・・60
表 10　遺物観察表（１）・・・・・・・・・・・ 62
表 11　遺物観察表（２）・・・・・・・・・・・ 63
表 12　遺物観察表（３）・・・・・・・・・・・ 64
表 13　遺構観察表・・・・・・・・・・・・・・・64

図版目次

巻頭図版１
１．調査区遠景　北東から
２．調査区全景　俯瞰

巻頭図版２
１．ＳＹ 01 前庭部完掘　北から
２．ＳＹ 01 前庭部断面　南東から

巻頭図版３
１．ＳＹ 01 焚口完掘　東から
２．ＳＹ 01 焚口断ち割り断面　東から
３．ＳＹ 01 前庭部焼台出土状況　南東から
４．ＳＫ 01・02 完掘　東から
５．ＳＫ 05 断面・遺物出土状況　北から

巻頭図版４
１．ＳＹ 02・03 完掘　南西から
２．ＳＹ 02 完掘　北東から
３．ＳＹ 03 完掘　北東から

巻頭図版５
１．ＳＹ 02（C ライン）断面 北から
２．ＳＹ 02（A ライン東半）断ち割り断面 北から
３．ＳＹ 02 分炎柱出土状況 南から
４．ＳＹ 02 分炎柱断面　南から
５．ＳＹ 02（A ライン西半）断ち割り断面 東から
６．ＳＰ 01（ロクロピット）粘土出土状況
　南西から

巻頭図版６
１．ＳＹ 03 断面　西から
２．ＳＹ 03（A ライン）断ち割り断面 南から
３．ＳＹ 03 分炎柱断面　南西から
４．灰原４遺物出土状況　南東から
５．出土遺物

図版１ 調査前・検出・調査区壁面
１．調査前 南西から
２．調査前灰原露出状況（F ４）東から
３．調査前ＳＹ 03 露出状況（F ７・８）北東から
４．調査区北半検出状況 南西から
５．調査区北壁 南東から
６．調査区西壁北半 南東から
７．調査区西壁南半 南東から
８．調査区南壁 北西から

図版２ 遺構
１．調査区北半完掘 南西から
２．調査区南半完掘 西から

図版３ 遺構
１．ＳＹ 01 前庭部完掘 東から
２．ＳＹ 01 前庭部断面 南東から
３．ＳＹ 01 焚口完掘 東から
４．ＳＫ 01 完掘 北東から
５．ＳＫ 01 断面 北東から

図版４ 遺構
１．ＳＫ 02 完掘 北東から
２．ＳＫ 02 断面 東から
３．ＳＫ 03 断面 東から
４．ＳＫ 05 断面 北東から
５．ＳＫ 05 遺物出土状況 北東から

図版５ 遺構
１．ＳＹ 02（左）・ＳＹ 03（右）完掘 南西から
２．ＳＹ 02 完掘 南西から
３．ＳＹ 02（窯体グリッドⅠ）天井検出 北から
４．ＳＹ 02（窯体グリッドⅡ）天井検出 北東から

図版６ 遺構
１．ＳＹ 02 分炎柱周辺遺物出土状況 東から
２．ＳＹ 02（A ライン東半・E ライン）断面 南から
３．ＳＹ 02（A ライン西半）断面 北東から
４．ＳＹ 02 分炎柱出土状況 南から
５．ＳＹ 02 掘削痕検出 北西から

図版７ 遺構
１．ＳＫ 04・ＳＰ 01 完掘 南東から
２．ＳＫ 04 遺物出土状況 北西から

図版８ 遺構
１．ＳＰ 01 完掘 南西から
２．ＳＰ 01 断面 南から
３．ＳＰ 01 段下げ状況 南西から
４．ＳＰ 01 粘土出土状況 南西から
５．ＳＰ 01 断ち割り断面 南から

図版９ 遺構
１．ＳＹ 03 完掘 南西から
２．ＳＹ 03（A ライン西半・B ライン東半）断面
　北東から
３．ＳＹ 03（B ライン西半）断面 南から
４．ＳＹ 03（C ライン西半・D ライン）断面 北から
５．ＳＹ 03（窯体グリッドⅢ・Ⅴ）壁検出 北から
６．ＳＹ 03（窯体グリッドⅡ・Ⅳ）壁検出 東から

図版 10 遺構
１．ＳＹ 03 分炎柱出土状況 南西から
２．ＳＹ 03 断ち割り断面 東から
３．ＳＹ 03（C ライン東半）断ち割り断面 北から
４．ＳＫ 06 完掘 北から
５．ＳＫ 06 断面 北から

図版 11 遺構
１．灰原（C・D ライン）断面 南東から
２．灰原（A ライン北半）断面 北東から
３．灰原（A ライン南半）断面 東から
４．灰原（B ライン西半）断面 南西から
５．灰原（B ライン東半）断面 南東から

図版 12 遺構
１．灰原（C ライン北半）断面 北東から
２．灰原（C ライン南半）断面 北東から
３．灰原（D ライン東半）断面 南から
４．灰原４遺物出土状況 南東から
５．灰原４遺物出土状況 西から
６．灰原４遺物出土状況 南東から
７．コンクリート基礎試掘断面 北東から

図版 13 遺物 ＳＹ 01 前庭部、ＳＫ 01・02・05

図版 14 遺物 ＳＫ 05

図版 15 遺物 ＳＫ 05、ＳＹ 02

図版 16 遺物 ＳＫ 04、ＳＹ 03、ＳＫ 06、
灰原１・２

図版 17 遺物 灰原２～４

図版 18 遺物 灰原４

図版 19 遺物 灰原４・５、遺構外

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

川池西古窯は、愛知県大府市桃山町四丁目に所在し、川池を臨む丘陵に位置している。現在は住宅地になっているが、かつては大正から昭和初期にかけて３万本の桃の木が植えられ、春の開花時期になると名古屋・半田あたりからの花見客で賑わった。しかし桃畑は連作障害から生産が落ち、昭和９年に土地区画整理を実施し、昭和 10 年に分譲住宅の区画として売りに出された。その時の土地区画整理に伴う整地によって窯体の一部が削平されたと考えられる。その後、平成 21 年８月５日・13 日に調査地の隣接地で範囲確認調査を実施し、山茶碗窯の灰原を確認している。

平成 28 年に、約 1,000 ㎡を対象に集合住宅建設が計画され、４月５日に埋蔵文化財の有無に関する照会文書が提出された。４月 13 日付で試掘の必要性があると回答をし、試掘（確認）調査の依頼書と試掘調査承諾書の提出があった。４月 20 日に試掘調査を実施し、長さ 16m、幅 0.6m のトレンチを設定して掘削した。その時点では遺構・遺物は確認されなかったが、南側の建設範囲は樹木撤去がされていなかったため、後は工事立会で対応することになった。平成 28 年 10 月 19 日、21 日、22 日に工事立会を実施し、22 日に山茶碗窯の窯体と灰原を確認した。この結果を受け、平成 28 年 11 月 10 日に事業者と施工業者の大和ハウス工業株式会社と片岡事務所および市教委の四者で協議をした。集合住宅建設の計画変更はできないため、記録保存のために発掘調査を実施する旨を確認した。また、事業者・施工業者から早期の建設要望があり、県の「記録保存のための発掘調査における民間調査の導入について」に則り、事業者から委託を受けた民間調査会社が調査主体として文化財保護法 92 条に基づく調査体制となり、市教委は助言・指導する立場として携ることとなった。

平成 28 年 11 月 25 日から 29 日にかけて発掘範囲確認調査を実施し（図１、Ｔ１～Ｔ５）、集合住宅建設部分の 333 ㎡を調査対象とした。事業者はこの調査を株式会社二友組に委託し、翌年の１月 10 日付で文化財保護法 93 条の発掘届が提出された。１月 19 日付で事業者三輪碩子と株式会社二友組が発掘調査に関する委託契約を締結し、市が指導・助言する旨の協定書を三者で締結した。1 月 24 日付で株式会社二友組が調査主体として文化財保護法第 92 条に基づく調査のための発掘届の提出があり、92 条・93 条の書類を県に進達した。

本発掘調査は平成 29 年２月１日から４月 21 日まで実施した。出土遺物の整理と報告書執筆は、平成 29 年３月１日から 11 月 31 日で行い、平成 29 年 12 月 25 日に報告書が刊行された。

第２節　調査の経過

調査は、平成 29 年１月 17 日から測量、フェンス仮囲い等の準備作業を行い、２月 13 日から建設機械による階段解体、コンクリートガラの撤去を始め、15 日から表土掘削を始めた。調査区外の排土置き場の確保が困難だったため、調査区を南北で２分割し、調査を進めることとした。調査区の北側を先行して行ったが、調査区北西端にコンクリート基礎が埋設されていることが確認された。この部分は、大府市教育委員会との協議の上、機械によるトレンチ掘削を行い、断面の記録作業のみで調査を終えた。21 日か

ら人力による遺構検出を開始し、調査区北西端を除くほぼ全面に灰原が広がることが確認された。24 日からグリッド軸に沿って５m間隔でセクションベルトを設定し、灰原の掘削を開始した。層位確認のため調査区西壁面際のトレンチ掘削を行なった際、被熱により赤化し硬化した層を確認した。調査区範囲外に広がるＳＹ 01 の焚口と判断した。この周辺には平坦面も確認でき、作業場と推定したＳＫ 04、セクションベルト掘削時にはロクロピット（ＳＰ 01）が検出された。３月１日から発掘作業と並行して、遺物洗浄など一次整理作業を開始した。３月 10 日に遺構掘削が完了し、11 日に全景撮影を行い、調査区の北側

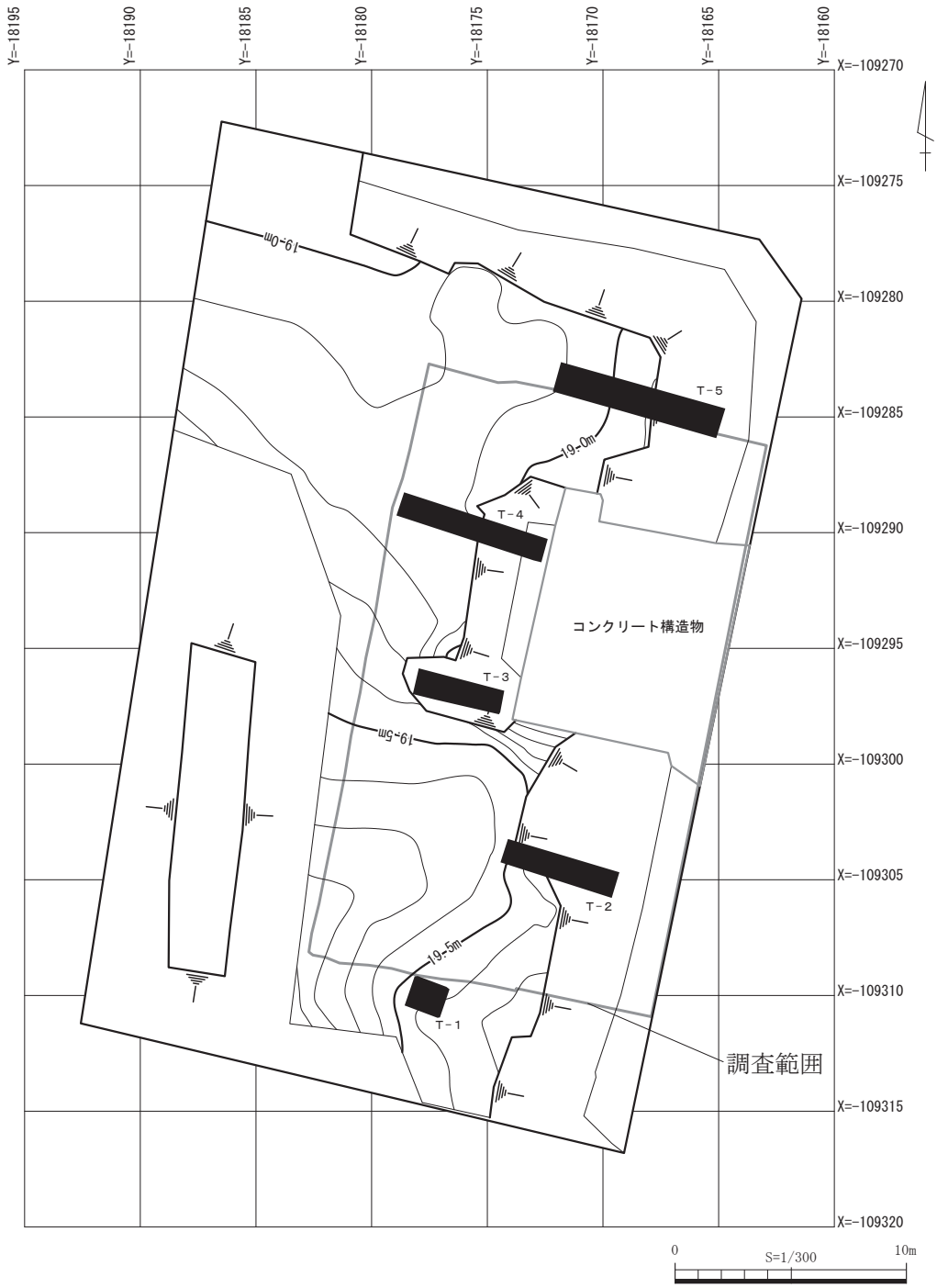


図１　調査前地形

の調査が完了した。10 日、ロクロピットについて愛知学院大学の藤澤良祐氏に調査指導を依頼し、ロクロピットであり、猿投窯における貴重な発見例である、との回答を得た。

３月 14 日から調査区の南側の表土掘削を開始し、17 日から遺構検出を行った。当初の設計では、中世山茶碗古窯１基、灰原１基の調査予定であったが、調査を進めていく過程で、中世山茶碗古窯が更に２基検出されたため、平成 29 年３月 29 日、大府市教育委員会は、三輪氏、二友組との間で、平成 29 年１月 29 日付の「協定書」の調査期間を平成 29 年４月 30 日に変更した。４月 14 日、ラジコンヘリによる空中写真撮影、21 日、補足調査が完了し、現地調査が全て完了した。

整理作業は、発掘作業と並行して３月１日から４月 28 日まで遺物洗浄などの一次整理作業を行った。終了後、５月１日から６月 23 日まで遺物の分類、遺物実測など二次整理作業を進め、12 月 25 日に『川池西古窯－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』としてまとめた。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

今回の調査地である川池西古窯は、大府市役所から北東へ約 0.7 ㎞の大府市桃山町四丁目に所在する。旧国郡では、尾張国知多郡大符村に属する。

大府市は、知多半島北端の基部に位置し、北は名古屋市緑区･豊明市、西は東海市、南は知多郡東浦町、東を尾張と三河の境界とされる境川を挟んで刈谷市と隣接する。

市域の地形は、丘陵地と沖積低地から成る。知多半島北部は、尾張丘陵、大府丘陵、知多丘陵の三つの丘陵地に分けられ、そのうちの尾張丘陵南端と大府丘陵が大府市域に属する。市域では、ほぼ中央に鞍流瀬川が流れている。鞍流瀬川は境川水系の河川で、名古屋市緑区にある大池を源に南流し、石ヶ瀬川、境川の順で合流して、三河湾に流入する。これらの河川が丘陵地の境となり、東側を尾張丘陵、西側を大府丘陵と二分している。また、これら河川により、沖積低地が形成されている。本遺跡は、尾張丘陵の南端、南西側斜面に立地する。

本遺跡の立地する尾張丘陵は、新生代第三紀鮮新世以降

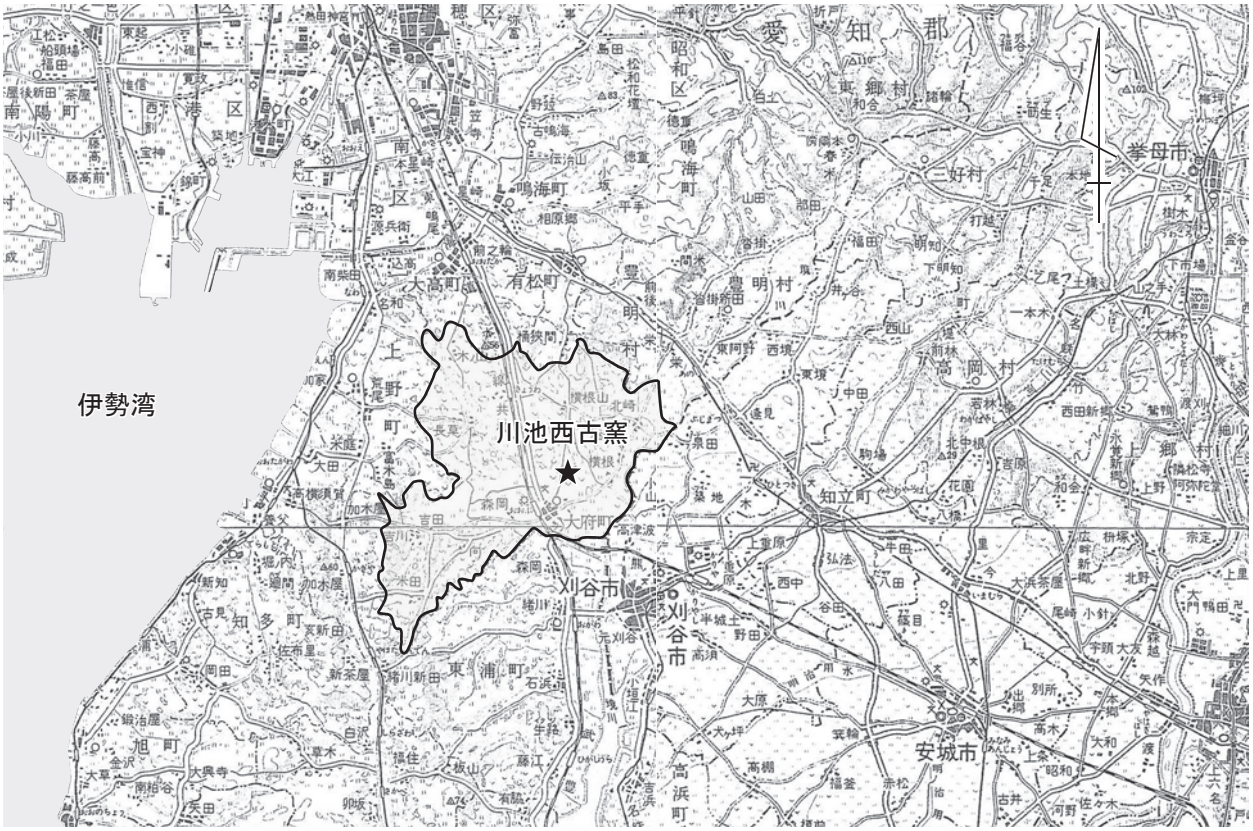


図２ 遺跡の位置

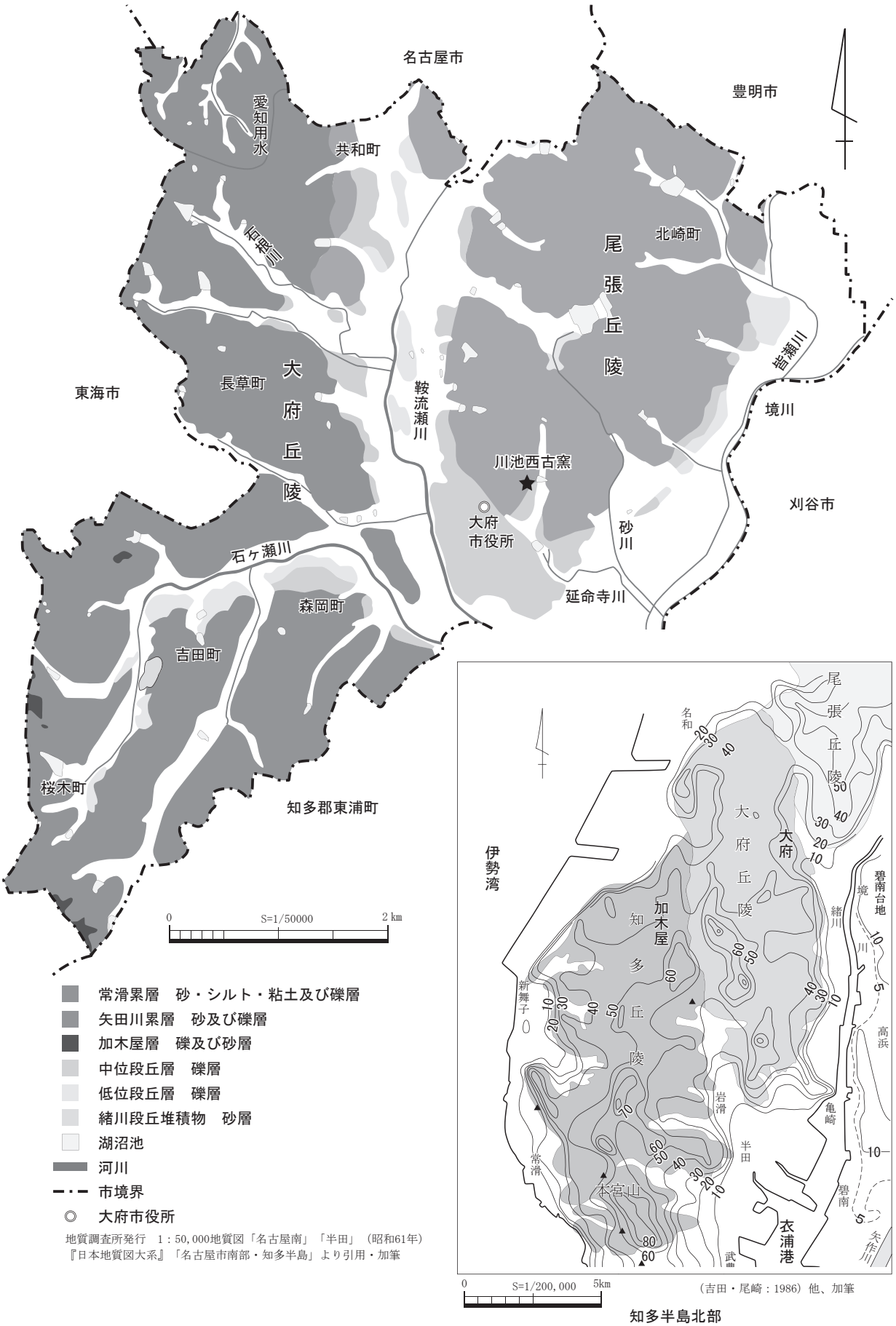

名古屋市
豊明市
愛知用水
共和町
石野川
尾張丘陵
北崎町
皆瀬川
東海市
長草町
大府丘陵
鞍流瀬川
境川
川池西古窯
大府市役所
刈谷市
砂川
石ヶ瀬川
延命寺川
森岡町
吉田町
桜木町
知多郡東浦町
0
S=1/50000
2 km
常滑累層　砂・シルト・粘土及び礫層
矢田川累層　砂及び礫層
加木屋層　礫及び砂層
中位段丘層　礫層
低位段丘層　礫層
緒川段丘堆積物　砂層
湖沼池
河川
市境界
大府市役所
地質調査所発行　1：50,000地質図「名古屋南」「半田」（昭和61年）
『日本地質図大系』「名古屋市南部・知多半島」より引用・加筆
尾張丘陵
名和
大府丘陵
大府
伊勢湾
知多丘陵
加木屋
新舞子
緒川
碧南台地
境川
高浜
岩滑
亀崎
半田
常滑
本宮山
碧南
衣浦港
矢作川
武豊
0
S=1/200,000
5km
（吉田・尾崎：1986）他、加筆
知多半島北部

図３　大府市表層地質図

に形成された丘陵で、地質は瀬戸層群と呼ばれる。上部層の矢田川累系層（砂礫・砂・シルト主体）と、下部層の瀬戸陶土層（粘土主体）に分けられ、本遺跡は矢田川累系層に含まれる。

本遺跡周辺では、丘陵地より粘土の採掘が可能であることから、古代から中世の窯業生産地として利用されてきた。これを証明するように、市域では多くの窯跡が分布している。

第２節　歴史的環境

川池西古窯（75）を中心に周辺を概観すると、数多くの遺跡が分布している。それらの時期は、後期旧石器時代から近世までと幅広い。ここでは、周辺および主要な遺跡を説明する（表２）。

旧石器時代　共栄町に、後期旧石器時代とされる共栄遺跡（２）がある。本調査は行われていないが、採集遺物により石器の散布地であることが判明している。遺物は、ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代　縄文時代後半の石鏃が採集されている共栄遺跡や桟敷貝塚（６）がある。桟敷貝塚は、共栄遺跡と同様本調査は行われていないが、採集遺物より縄文晩期の遺跡であることが判明している。遺物は、条痕文を外面全体に横位に施した深鉢や無文の壺、石鏃・貝類が採集されている。

弥生時代　弥生時代の遺跡には、子安神社遺跡（１）、惣作遺跡（５）がある。子安神社遺跡は、子安神社境内と周辺に広がる後期の遺跡である。主な出土遺物には、欠山式の高杯や台付甕、土師器・山茶碗等が出土している。惣作遺跡は、トレンチによる部分的な調査で、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・製塩土器・中世陶器等出土し、中でも製塩土器が最も多く出土している。これら２つの遺跡は、弥生から中世までの複合遺跡と考えられている。

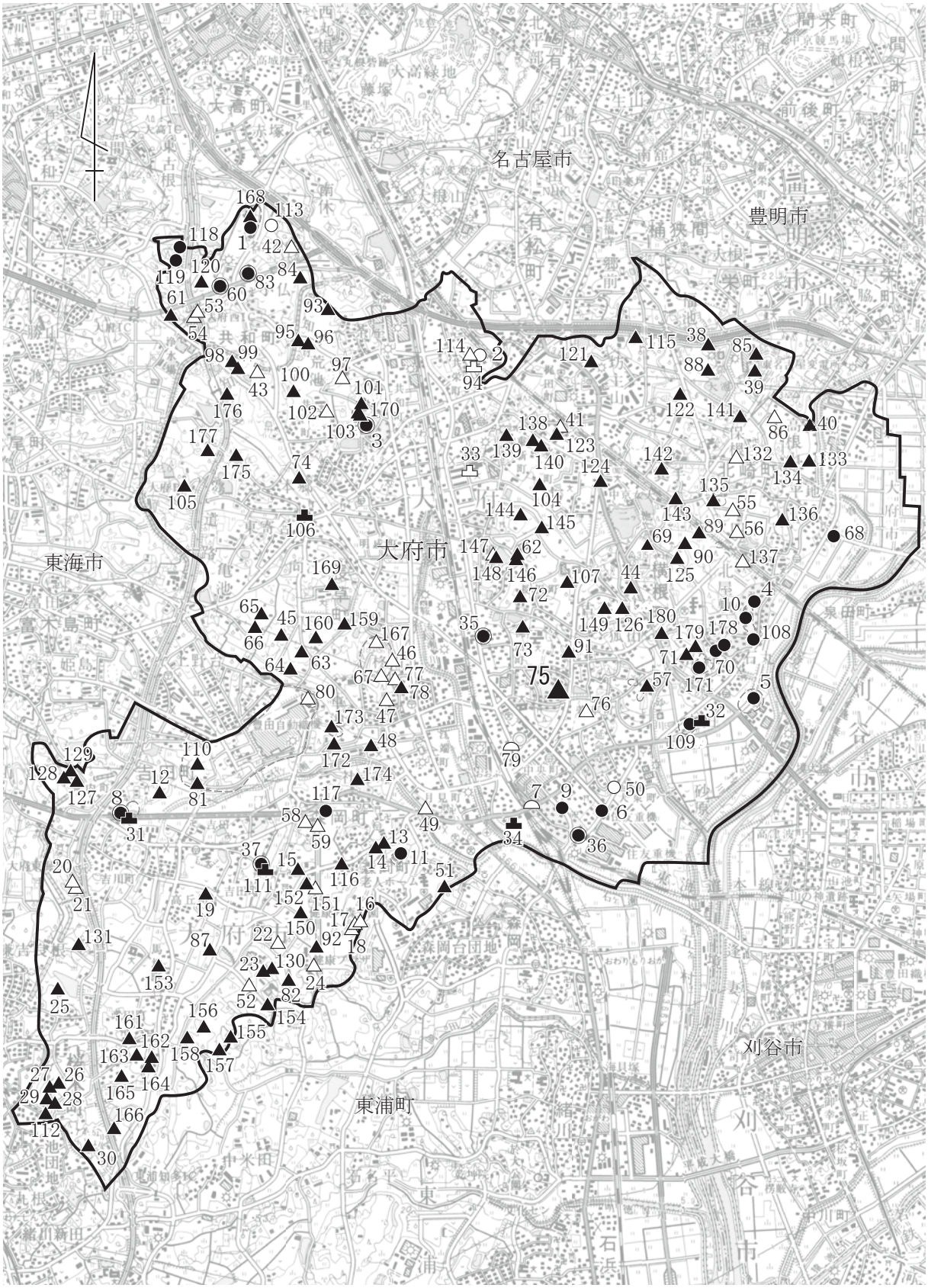
古墳時代　本調査は行われていないが源吾遺跡（11）があり、遺物は建物建設の際に土師器高杯が採集されている。高山古墳（７）は古墳後期から奈良時代末とされている。中央町には、建物建設によって滅失してしまったが、雨兼池西古墳（79）がある。

平安時代　惣作遺跡は前述したとおり、弥生から中世の複合遺跡と認識されている。ただし、大府市教育委員会が行った第１・２次調査では、出土した遺物の大半は、9・10 世紀の製塩土器が占めていることから、衣ヶ浦沿岸一帯で塩の生産が行われたことが明らかになった。

市域では、丘陵地と窯業の原料となる粘土が採掘できるという好条件から、窯が築造されるようになる。

野々宮古窯（12）は、11 世紀初頭頃に築窯されたと考えられている灰釉陶器窯で、碗・皿・段皿・壺などが出土している。灰釉陶器は、平安時代に猿投山西南麓の低丘陵地を中心として、尾張東部や三河西部で生産された施釉陶器である。猿投山西南麓に群在することから猿投山西南麓古窯址群、略して猿投窯とよばれている。野々宮古窯のほか、北崎大池北古窯（88）、高根山Ｂ・Ｃ古窯群（133・134）、西定保根Ｂ古窯群（141）、子安古窯（168）がある。現時点で確認された灰釉陶器窯は、宮内町に位置する野々宮古窯が市域中最南端に位置する。

12 世紀に入ると、丘陵地一帯で多くの山茶碗の窯が築窯される。12 世紀前半の窯には吉田第１・２号窯（20・21）があり、遺物は、碗・小皿・瓦が出土している。瓦は、三巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦・鬼瓦等が焼かれ、鳥羽離宮へ供給されていたことが明らかになっている。12 世紀末から 13 世紀中頃に築窯された瀬戸Ｂ古窯跡群（101）からは、碗・皿・片口鉢・壺・壺系の取手や陶硯が出土している。同時期の窯には、山茶碗の碗・小皿・片口鉢が出土した瀬戸Ｃ古窯群（170）、碗・小碗・小皿・片口鉢・片口碗・壺・



● 集落遺跡、貝塚、散布地など
▲ 古窯、製鉄・製塩など生産関係遺跡
中・近世の城館跡、その他の防御施設
古墳、横穴墓など
卍 寺院跡
◉ その他の遺跡
※網掛けは消滅遺跡

0　S=1/25,000　1km

（国土地理院発行の地形図に加筆）

表 2 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名称	時代	主な出土遺物
1	子安神社遺跡	弥生～中世	
2	共栄遺跡	旧石器・縄文	
3	東光寺経塚	江戸	
4	賢聖院貝塚	中世	
5	惣作遺跡	弥生～鎌倉	
6	桟敷貝塚	縄文晩期	
7	高山古墳	古墳後期	
8	正官墳	中世	
9	南島貝塚	不明	
10	石丸貝塚	中世	
11	源吾遺跡	古墳	
12	野々宮古窯	古代	灰釉陶器
13	森岡第１号窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿・ 片口鉢Ⅰ・三筋壺・壺
14	森岡第２号窯	中世	
15	北向古窯	中世	
16	旧中部病院第１号窯	中世	
17	旧中部病院第２号窯	不明	
18	旧中部病院第３号窯	不明	
19	ハンヤ古窯	中世	山茶碗・小皿
20	吉田第１号窯	中世	山茶碗・小碗・広口瓶・瓦
21	吉田第２号窯	中世	山茶碗・小碗・広口瓶・瓦
22	律粉古窯	中世	山茶碗・小皿
23	籠染第１号窯	中世	
24	籠染第２号窯	不明	
25	大日古窯	不明	
26	外輪第１号窯	不明	
27	外輪第２号窯	不明	
28	外輪第３号窯	不明	
29	外輪第４号窯	不明	
30	骨田末古窯	中世	
31	吉川城跡	中世	
32	横根城跡	中世	
33	追分城跡	中世	
34	石ヶ瀬古戦場跡	中世	
35	大清水井戸跡	中世	
36	おしも井戸跡	不明	
37	芦沢井戸跡	中世	
38	福池古窯	中世	
39	大根古窯	中世	
40	高根山古窯群	中世	
41	梶田古窯	中世	
42	別岨古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿
43	権兵衛池古窯	中世	山茶碗・小碗
44	名高山古窯群	中世	山茶碗・小碗
45	立根Ａ古窯群	中世	山茶碗・小碗
46	深廻間Ａ古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿
47	柊山Ａ古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿
48	石ヶ瀬古窯	中世	山茶碗・小皿
49	江端古窯	中世	
50	延命寺貝塚	不明	
51	割木Ａ古窯群	中世	
52	東端古窯	中世	
53	才田Ａ古窯	中世	
54	才田Ｂ古窯	中世	
55	山手Ａ古窯	不明	
56	山手Ｂ古窯	不明	
57	羽根山古窯群	中世	山茶碗・小皿・片口鉢Ⅰ・壺
58	神明古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿・ 片口鉢・広口瓶
59	海陸庵古窯群	中世	山茶碗・小皿・片口鉢Ⅰ
60	円通寺古墓	近世	
61	上入道古窯	中世	山茶碗・小皿
62	長根山Ａ古窯群	中世	山茶碗・小皿
63	立根Ｂ古窯群	中世	
64	立根Ｃ古窯群	中世	
65	立根Ｄ古窯群	中世	山茶碗・小碗
66	立根Ｅ古窯	中世	
67	深廻間Ｂ古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿
68	西浜田遺跡	不明	瓶
69	二ツ池東古窯	中世	山茶碗・小皿
70	藤井宮御酒瓶子 出土地	中世	
71	平子古窯	中世	
72	鴨池北古窯群	中世	
73	鴨池東古窯	中世	山茶碗・小皿・片口碗・ 片口鉢Ⅰ
74	下北山古窯群	中世	山茶碗・小皿
75	**川池西古窯**	**中世**	**山茶碗・小皿・片口鉢**
76	石亀土古窯	不明	
77	柊山Ｂ古窯	不明	
78	柊山Ｃ古窯	中世	
79	雨兼池西古墳	古墳	
80	山口古窯群	不明	
81	大高山古窯	不明	瓦
82	籠染第3号窯	中世	
83	円通寺経塚	江戸中期	
84	大廻間古窯	中世	
85	みどり公園古窯	中世	
86	高根山西古窯	中世	
87	口無池西古窯	中世	
88	北崎大池北古窯	古代～中世	山茶碗・小碗(灰釉陶器を含む)
89	箕手Ａ古窯	中世	
90	箕手Ｂ古窯	中世	

遺跡番号	遺跡名称	時代	主な出土遺物
91	ガンジ山Ａ古窯群	中世	山茶碗・小皿
92	律粉東古窯	中世	
93	上徳古窯群	中世	山茶碗・小碗
94	丸根城跡	不明	
95	大深田古窯	中世	
96	荒池古窯群	中世	
97	砂原古窯	中世	山茶碗・小碗・小皿
98	木根Ａ古窯群	中世	山茶碗・小碗
99	木根Ｂ古窯群	中世	山茶碗・小碗
100	久分古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿・ 片口碗・片口鉢Ⅰ
101	瀬戸Ｂ古窯群	中世	山茶碗・小碗・小皿・ 片口碗・短頸壺・陶硯
102	奥谷古窯	中世	山茶碗・小皿
103	瀬戸Ａ古窯	中世	
104	北山古窯	中世	
105	石原古窯群	中世	
106	長草城跡	不明	
107	長根山Ｂ古窯	中世	
108	普門寺遺跡	中世	
109	寺田遺跡	中世	
110	大高山西古窯群	中世	山茶碗・小碗
111	景清屋敷跡	不明	
112	外輪南古窯	中世	山茶碗・小碗
113	炭焼遺跡	弥生～中世	
114	上り戸古窯	中世	
115	井田古窯群	中世	山茶碗・小皿
116	池之分古窯	不明	
117	山中遺跡	古代～中世	須恵器・山茶碗
118	児子廻間Ａ遺跡	古代～中世	土師器・須恵器・山茶碗
119	児子廻間Ｂ遺跡	古代～中世	
120	下入道古窯	中世	
121	坊主山Ａ古窯群	中世	
122	井田Ｂ古窯	中世	
123	梶田Ｂ古窯群	中世	
124	石亀戸古窯群	中世	
125	箕手Ｃ古窯群	中世	
126	古井戸Ａ古窯	中世	
127	長峰北Ａ古窯	中世	
128	長峰北Ｂ古窯	中世	
129	長峰北Ｃ古窯群	中世	
130	籠染西古窯	古代	
131	井戸場古窯群	中世	
132	西定保根Ａ古窯群	中世	甕
133	高根山Ｂ古窯群	古代～中世	山茶碗・小碗（灰釉陶器を含む）
134	高根山Ｃ古窯群	古代～中世	山茶碗・小碗（灰釉陶器を含む）
135	山手Ｃ古窯群	中世	
136	上り坂古窯	中世	
137	山之神社北古窯	中世	
138	八代山Ａ古窯	中世	
139	八代山Ｂ古窯	中世	
140	八代山Ｃ古窯	中世	
141	西定保根Ｂ古窯群	古代～中世	山茶碗・小碗(灰釉陶器を含む)
142	箕手Ｄ古窯	中世	
143	箕手Ｅ古窯群	中世	
144	上東山Ａ古窯	中世	
145	上東山Ｂ古窯	中世	
146	立合池東古窯群	中世	
147	立合池西Ａ古窯群	中世	山茶碗・小皿
148	立合池西Ｂ古窯群	中世	山茶碗・小皿
149	古井戸Ｂ古窯	中世	
150	脇ノ畑Ａ古窯	中世	
151	脇ノ畑Ｂ古窯	中世	
152	脇ノ畑Ｃ古窯	中世	
153	馬池東古窯	中世	瓦
154	東端Ｂ古窯	中世	
155	毛分田Ａ古窯	中世	
156	毛分田Ｂ古窯	中世	
157	家下古窯	中世	
158	上家下古窯	中世	
159	車池Ａ古窯	中世	
160	車池Ｂ古窯	中世	
161	森東古窯	中世	
162	前田Ａ古窯	中世	
163	前田Ｂ古窯	中世	
164	前田Ｃ古窯	中世	
165	森前古窯	中世	
166	骨田池南古窯	中世	
167	深廻間Ｃ古窯群	中世	山茶碗・小皿・瓦
168	子安古窯	古代～中世	山茶碗・小碗(灰釉陶器を含む)
169	上田ノ松古窯	中世	
170	瀬戸Ｃ古窯群	中世	
171	中村遺跡	古代～中世	
172	ウドＡ古窯	古代	
173	ウドＢ古窯	古代	
174	森岡平子古窯	中世	
175	笹山古窯	中世	
176	木根Ｃ古窯	中世	
177	西忍場古窯	中世	
178	名高遺跡	古代～中世	
179	平子Ｂ古窯	中世	
180	牛池東古窯	中世	

子持ち器台、土師質土器の伊勢型鍋が出土している久分古窯群（100）がある。森岡第１号窯群（13）は、市域南の丘陵地に立地する 12 世紀中頃の山茶碗窯である。遺物の大半が碗・皿で占められ、希少ではあるが広口壺・三筋壺・片口鉢が出土し、中には碗の内面底部や広口壺肩部に、工具による線刻が施されたものも出土している。12 世紀中から 13 世紀前半の窯には、別岨古窯群（42）、深廻間Ｂ古窯群（67）等がある。遺物は、碗・小皿が出土し、「天」・「×」とヘラ記号が施されたものも含まれていた。12 世紀後半から 13 世紀初頭では、砂原古窯（97）、立合池西Ａ・Ｂ古窯跡群（147・148）等がある。12 世紀末から 13 世紀初頭には、鴨池東古窯（73）、ガンジＡ古窯群（91）、神明古窯群（58）がある。羽根山古窯群（57）は、12 世紀後半から 13 世紀半ばの窯で、窯体５基、溝１条、ピット、灰原が確認されている。12 世紀後半から 13 世紀前半では、今回調査をした川池西古窯と深廻間Ｃ古窯群（167）があり、碗・小皿・片口鉢が出土している。13 世紀初頭には、ハンヤ古窯（19）、13 世紀半ばには、海陸庵古窯群（59）や律粉東古窯（92）、13 世紀の窯は立根Ａ古窯群（45）がある。窯跡以外の遺跡は、散布地だが中村遺跡（171）、名高遺跡（178）がある。

室町時代から戦国時代　15 世紀に入ると山茶碗窯は廃絶し、11 世紀から 14 世紀にかけて続いた窯業生産は途絶えてしまう。現地点では、市域における 14 世紀以降の窯業遺跡は確認されていない。

その他の遺跡には、13 世紀末に築城され 15 世紀末に廃城となった吉川城址（31）、16 世紀中頃に築城されたと考えられる追分城址（33）、横根城跡（32）がある。また多くのシジミが出土した、戦国時代末期の遺跡とされる賢聖院貝塚（４）がある。

近世以降　円通寺経塚（83）や江戸中期とされる東光寺経塚（３）がある。東光寺経塚では、法華経を書いた一字一石経が約 38,000 個と瀬戸美濃陶器が出土している。その他、江戸後期とされる円通寺古墓(60)がある。

参考文献

愛知県史編さん委員会 2010　「愛知の大地」『愛知県史』別編 自然　愛知県

愛知県史編さん委員会 2012　『愛知県史』別編 窯業３ 中世・近世 常滑系　愛知県

池本正明ほか 2013　『別岨古窯群』愛知県埋蔵文化センター調査報告書第 187 集
財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化センター

猪木幸男 1991　『日本地質図大系　中部地方』朝倉書店

大杉規之ほか 2015　『鴨池東古窯－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
ナカシャクリエイテブ株式会社

大府市誌編さん刊行委員会 1988　『大府市誌　資料編自然』大府市

大府市誌編さん刊行委員会 1991　『大府市誌　資料編考古』大府市

大府市 1996　『海陸庵古窯址群・神明古窯址群　大府半月地区土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第２集 大府市教育委員会

大府市 1997　『円通寺経塚 第二東海自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財立会調査報告』
大府市文化財調査報告書第３集　大府市教育委員会

大府市 2000 『ガンジ山Ａ古窯跡群　大府市桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第４集　大府市教育委員会
大府市 2005 『深廻間Ａ古窯跡群　大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第５集　大府市教育委員会
大府市 2006 『深廻間Ｂ古窯跡群　大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第７集　大府市教育委員会
大府市 2007 『砂原古窯跡　大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財発掘調査報告書第８集　大府市教育委員会
大府市 2008 『深廻間Ｃ古窯跡群　大府深廻間特定土地区画整理埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第９集　大府市教育委員会
大府市 2009 『瀬戸Ｂ古窯跡群・奥谷古窯跡　大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ』大府市文化財調査報告書第 10 集 大府市教育委員会
大府市 2010 『羽根山古窯跡群　大府羽根山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第６集　大府市教育委員会
大府市 2011 『立会池西Ａ古窯跡群・立会池Ｂ古窯跡群　大府共和西土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第 13 集　大府市教育委員会
大府市 2014 『瀬戸Ｃ古窯跡・久分古窯群　大府市共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第 11 集　大府市教育委員会
加藤岩蔵 1972 『惣作遺跡』大府市教育委員会
加藤岩蔵ほか 1975 『野々宮古窯発掘報告書』大府市教育委員会
加藤岩蔵ほか 1984 『子安神社遺跡発掘調査報告書』大府市教育委員会
柴垣勇夫 1969 『吉田第一号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会
柴垣勇夫 1975 『吉田第二号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会
庄子士郎編 1978 『愛知県 地学のガイド』コロナ社
下中邦彦 1981 『愛知県の地名』平凡社
中野良法ほか 1999 『森岡第１号窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 85 集
財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
日本福祉大学知多半島総合研究所 1995 『知多半島の歴史と現在№６』校倉書房

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

今回の調査は、大府市発掘調査業務委託共通仕様書、および大府市教育委員会との事前打ち合わせに基づき、下記の方法で行った。

グリッド　国土座標第Ⅶ系に基づき、調査区北東のＸ =−109,270・Ｙ =−18,160 を座標軸の基点とし、南北をＸ軸、東西をＹ軸として各軸の５ｍ毎にラインを引いた。Ｘ軸には北からアラビア数字１から10、Ｙ軸には西からアルファベットＡからＧを振り、北西交点名をこれらのラインによってできた５×５ｍグリッドの名前とした。

調査区　集合住宅建設工事に伴う発掘調査であり、390 ㎡の建物建設範囲から既設のコンクリート擁壁57 ㎡を抜き、333 ㎡の「コ」の字型の発掘調査範囲とした。

掘削　包含層の直上まで表土掘削として、重機で掘削を行った。遺構検出･遺構仕上げ掘削は人力で行った。また、灰原掘削時には、グリッドラインに沿ってセクションベルトを設定し、土層断面を確認しながら掘削を進めた。

遺物取り上げ　遺構・層位・グリッド・日付等を単位に取り上げた。重要遺物は、１点を単位に出土地点の座標値と標高を測量して取り上げた（dot 遺物）。一括取り上げ遺物は 0001 から始まる４桁の連番、dot 遺物を 1001 から始まる４桁の連番で表記した。

遺構名　着手順に「ＳＹ 01」や「ＳＫ 01」のように 01 から始まる遺構種別ごとの連番を付けた。本書で使用した遺構記号は以下のとおり。

ＳＹ：窯体、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴（柱痕跡や抜取り痕跡等、柱を立てるための穴と推定できるもの。ロクロピットは検出時柱穴と見分けが困難なため、便宜上ＳＰを使用した。）

測量　遺構の図化にはトータルステーションを用いた。土層断面と遺物出土状況は、デジタルカメラとトータルステーションを用いオルソ画像を作成し、これを基に図化を行った。

写真　遺構写真と遺物写真は、杉山・湯川が撮影した。遺構写真は、報告書に使用す

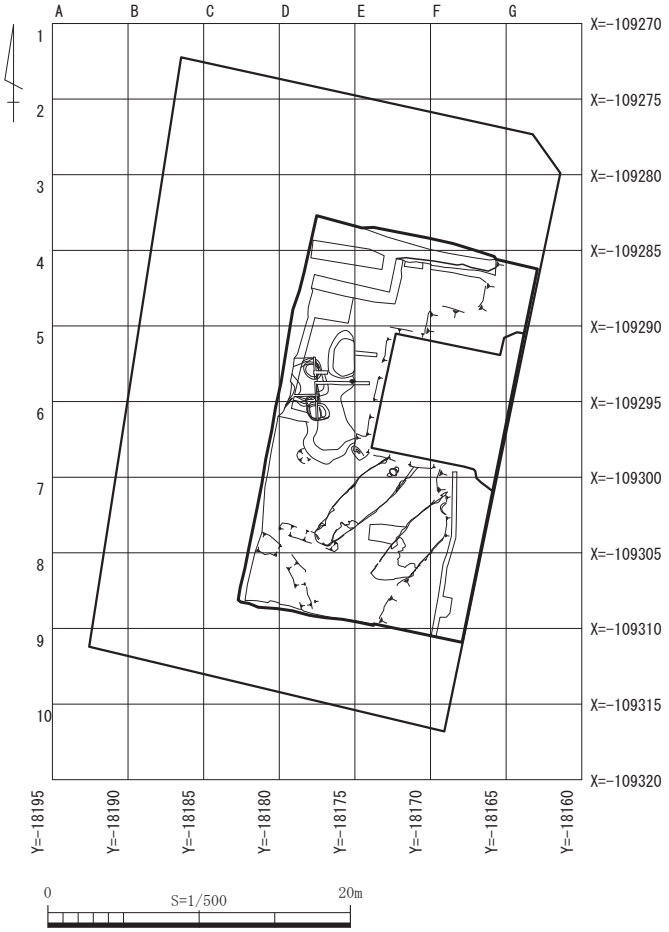


図５　地区割り

るカットはブローニー版、報告書に使用しないカットは35mmサイズのフィルムカメラを用いて撮影した。どちらもカラーリバーサル、モノクロフィルムで撮影を行った。補助として、2230万画素の35㎜フルサイズデジタルカメラも使用している。遺物写真も同じデジタルカメラを用いて撮影した。

注記　洗浄後の遺物への注記は、一部にジェットマーカーを用い、重要な遺物やジェットマーカーを使いにくい遺物は、面相筆を用いた。注記内容は、「KWIN’16 取り上げ番号 遺構名」とした。

トレース　遺物実測図は、デジタルトレースを行ってから編集した。

土層注記　土層の土粒子および土器の胎土粒子については、Wentworth法の粒径区分を用いた。色調と含有物については、『新版標準土色帖』に準拠した。

遺物の抽出　基本的に遺構の機能あるいは、廃絶時期を表す遺物を抽出し掲載している。ただし、遺構が機能していた時期を表さない遺物を掲載する場合がある。

収納　報告書掲載遺物は掲載順に、dot遺物はdot番号順、非掲載遺物は取上げ番号順に並べ、ビニール袋にラベルを入れ、コンテナに収納している。

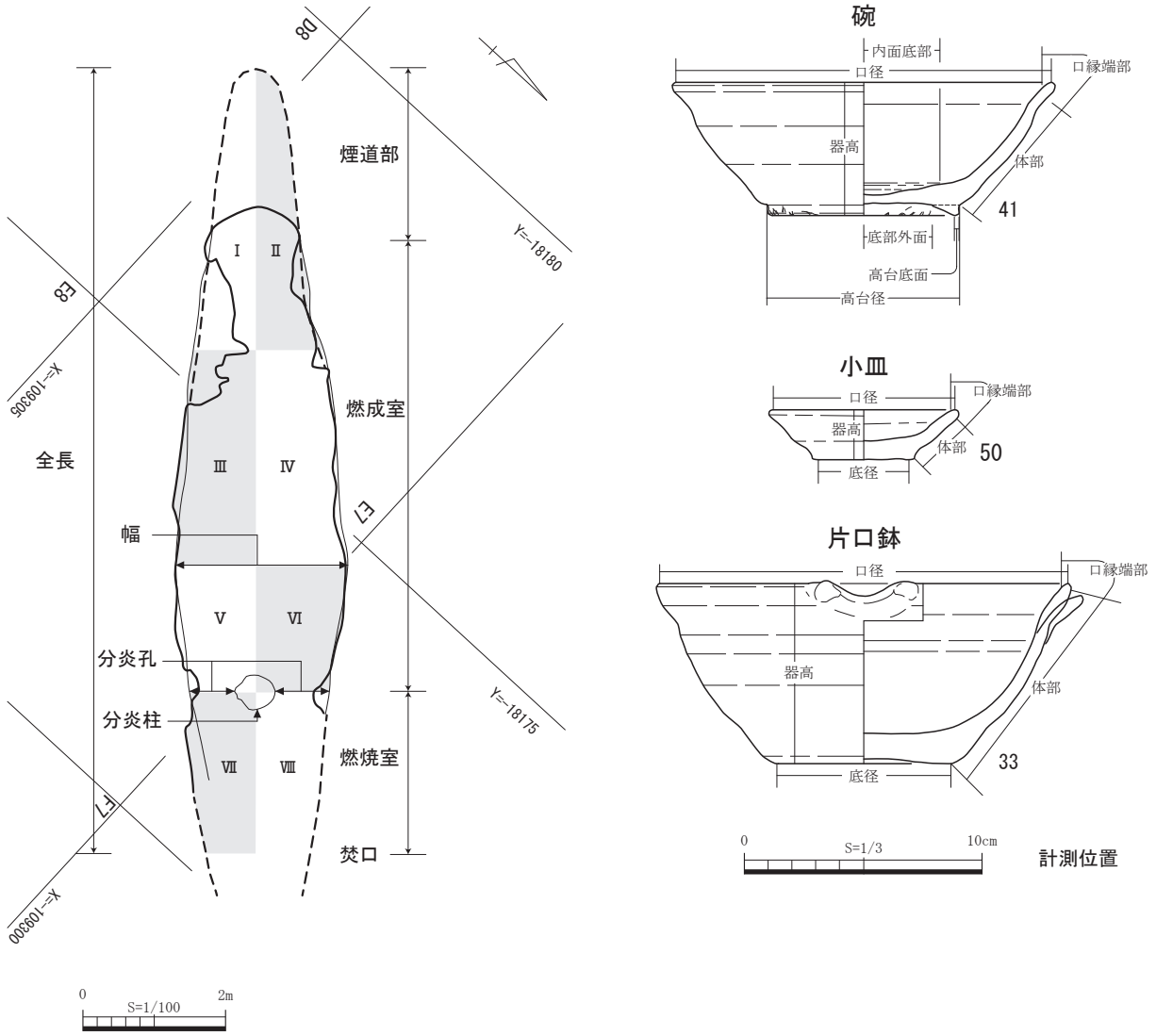


図６　部位名称・窯体内グリッド・計測位置

第２節　基本層序　図７～８、図版１

地理的環境でも述べたとおり、本遺跡は丘陵部の斜面地に立地する。このため、造成を行い宅地化などの土地利用される場合が多く、本遺跡周辺も、近代以降の造成により、旧地形の多くが改変を受けている。今回の調査区内も同様に、近代以降の改変が激しい。ただし、その改変を受けながらも、近代以前の層位を複数確認することができた。これらは、粒径や堆積原因が異なり、調査を進める上で重要な手掛かりとなっている。これらの中から広く堆積するものを以下のように大別し、基本層序とした。

表土・盛土層（図８　A-A´ １層、B-B´ ２層、C-C´ １層）　現代の盛土層及び表土層である。調査区全域で確認した。斜面地であるため山側を削り、谷側を埋めて平坦部を造成したため、山側に薄く、谷側に厚く堆積している。下面は、流入土・灰原・基盤層と接していた。融着資料を含む山茶碗・焼台・炭化物・焼土・窯体と、近代以降の遺物を含む。

流入土層（図８　A-A´ ２～６層、B-B´ ３～７層）　窯操業後の自然堆積である。北半部、ＳＹ01 前庭部付近にのみ堆積していた。上面は表土・盛土層に接し、下面は灰原と基盤層に接していた。堆積物は基盤層由来であり、周辺で確認した基盤層とは層位が上下逆転している。また、層位の境界は級化構造を呈しており、自然堆積の特徴を示す。灰原とは間層を挿まず、灰原が土壌化した状況も確認できなかったことから、窯操業終了直後の堆積と判断した。以上から、燃料材の伐採により、保水力の失われた上位の山肌から流入したものと推定した。

灰原・築窯排土層（図８　A-A´ ７～９層）　窯操業時の堆積である。ＳＹ01 焚口より斜面下側にのみ堆積していた。上面は流入土と表土・盛土層に接し、下面は基盤層と接している。ＳＹ02・03 に関連するこれらの層位は、後世の改変により今回の調査範囲内では確認できなかった。

築窯排土層は、焚口より斜面下部に堆積している（図９）。基盤層由来のブロック土（図 13　２層）で構成され、その上面は前庭部とした平坦面であることから、築窯排土と判断した。遺物は出土していない。

灰原は、前庭部より斜面下部に堆積している。融着資料を含む山茶碗・焼台・炭化物・焼土・窯壁を多く含む。炭化物と山茶碗の含有量を目安に５層に大別した（第３章第３節３項）。

基盤層（図８　A-A´ 13・14 層、B-B´ 22 ～ 24 層、C-C´ ２・３層）　基盤となる地山は、河口部付近の河川堆積である。上から砂礫・粘土・砂の順で堆積し、層理は北東に低く傾斜している。砂層にはラミナが認められた。

ＳＹ02･03 はいずれも､床面の大部分が砂層､壁と天井が粘土層を掘削して構築されている。窯の構造上、堅牢さを求められる壁と天井は粘土層、保温と再掘削のしやすさが求められる床面は砂層となっているのは、偶然ではないだろう。特に砂層において、壁と天井を構築することは困難であることから、当時の窯工人は、窯としての機能を考慮し、基盤層を見極めた上で構築地点を選定した可能性が高い。

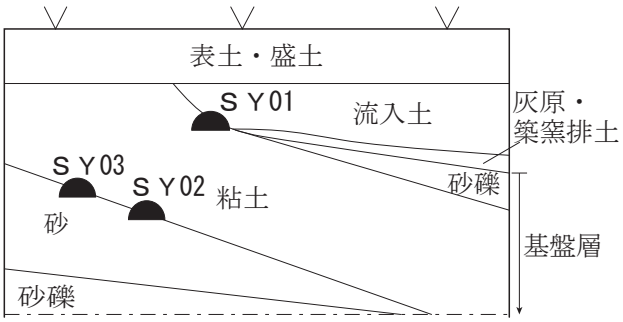
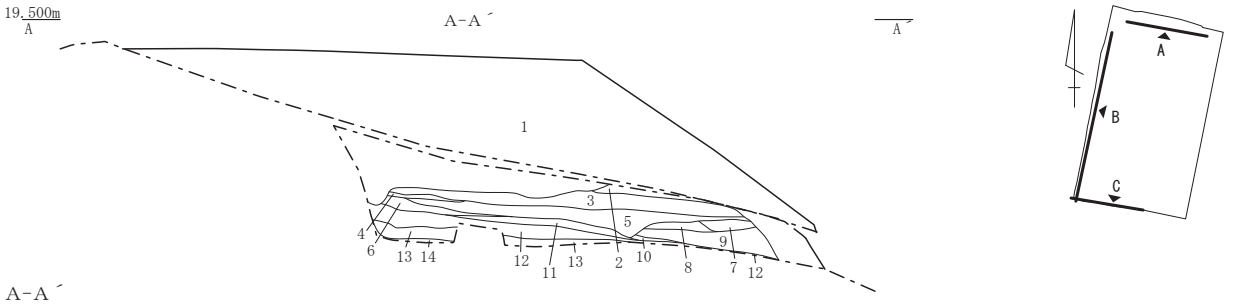
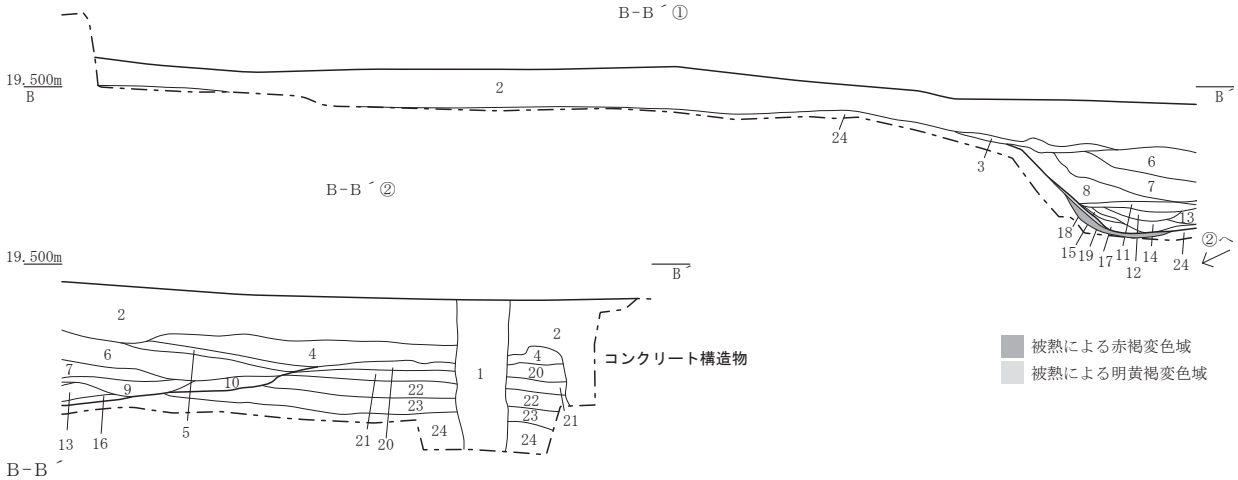


図7　基本土層模式図



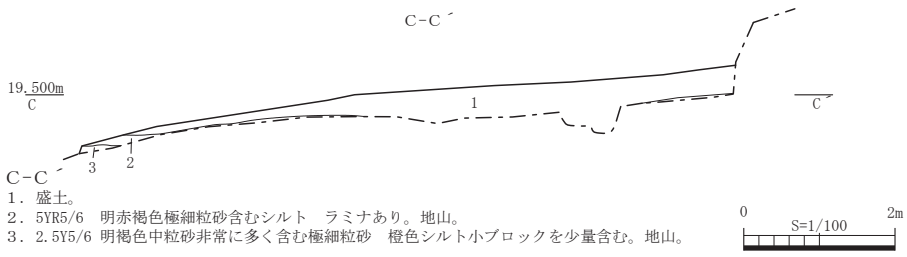
A−A´
1．盛土。
2．7.5YR5/6　明褐色粗粒砂～細粒砂少量含む細粒砂　中礫を含み、細礫を少量含む。しまり弱。流入土。
3．7.5YR5/6　明褐色粗粒砂～細粒砂少量含む細粒砂　細礫を多く含み、中礫・腐植を少量含む。しまりやや強。流入土。
4．7.5YR5/6　明褐色細粒砂含む粗粒砂～細粒砂　細礫を多く含む。やや弱。流入土。
5．5YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂　細礫を多く、細礫・腐植を少量含む。しまりやや強。流入土。
6．7.5YR5/4　にぶい褐色中粒砂含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫を含み、中礫を少量含む。しまりやや強。流入土。
7．7.5YR4/4　褐色粗粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　明褐色細粒砂ブロック・細礫・中礫・炭化物・焼土・焼台片・遺物を少量含む。しまり弱。
8．7.5YR4/3　褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂　明褐色細粒砂ブロックを含み、細礫・中礫・炭化物・焼土・焼台片を少量含む。しまり弱。
9．7.5YR4/4　褐色中粒砂含む細粒砂　明褐色細粒砂ブロック・中礫・焼土塊・遺物・焼台片を含み、細礫・炭化物を少量含む。しまり弱。
10．7.5YR4/3　褐色中粒砂含む細粒砂　中礫を多く含み、遺物・細礫・焼土・焼台片を少量含む。しまり弱。
11．7.5YR5/4　にぶい褐色中粒砂少量含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫を含み、中礫・焼台片を少量含む。しまりやや強。
12．7.5YR5/6　明褐色細砂含む中礫層　しまりやや強。旧表土。
13．8.75YR5/6 褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　細礫含む。しまり強。地山。
14．7.5YR5/6　明褐色中粒砂少量含む細粒砂　細礫を含む。しまり強。地山。

灰原３：７
灰原４：８
灰原５：９



B−B´
1．試掘トレンチ。
2．盛土。
3．7.5YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂　細礫・中礫を含む。しまりやや強。流入土。
4．7.5YR5/6　明褐色中粒砂多く含む細粒砂～極細粒砂　細礫・中礫を含む。しまりやや強。流入土。
5．8.75YR5/6　明褐色中粒砂含む極細粒砂　細礫・中礫少量含む。しまりやや強。流入土。
6．7.5YR5/6～8 明褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　細礫を多く含む。流入土。
7．8.75YR5/6　明褐色中粒砂多く含む細粒砂～極細粒砂　細礫を含み、炭化物・焼土少量含む。しまりやや弱。流入土。
8．8.75YR5/6　黄褐色細粒砂含む中粒砂　細礫を含み、明褐色細粒砂ブロック・中礫・炭化物を少量含む。しまり強。
9．7.5YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂　細礫・中礫を含み、焼台片を少量含む。しまり弱。
10．7.5YR5/4～6 にぶブロックい褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　明褐色細粒砂ブロック・炭化物・焼土・焼台片を少量含む。しまりやや強。
11．7.5YR5/3～4 にぶい褐色中粒砂多く含む細粒砂　炭化物を非常に多く含み、細礫・焼台片を含む。しまり弱。
12．7.5YR5/6　明褐色　中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　焼台片を多く含み、明赤褐色極細粒砂大ブロック・細礫を含む。しまりやや弱。
13．7.5YR5/4～6 にぶい黄褐色中粒砂含む細粒砂　細礫・焼台片・遺物を含み、明褐色極細粒砂小ブロックを少量含む。しまり弱。
14．7.5YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂　明赤褐色極細粒砂大ブロック・炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。
15．7.5YR4/3　褐色中粒砂含む細粒砂　明赤褐色極細砂大ブロック・細礫を含む。炭化物を少量含む。しまりやや弱。
16．7.5YR5/4～6 にぶい褐色中粒砂多く含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫を含み、炭化物を少量含む。しまり弱。
17．5YR5/6　明褐色細粒砂少量含む極細粒砂　細礫を含み、明褐色細粒砂ブロックを少量含む。しまりやや弱。
18．10YR7/4～6 明黄褐色　24層が被熱より変色
19．2.5YR4/8　赤褐色　24層が被熱より変色
20．8.75YR5/6　黄褐色粗粒砂含む極細粒砂　細礫を含み、中礫を少量含む。しまりやや強。
21．7.5YR5/6　明褐色細砂含む中礫層　しまりやや強。旧表土。
22．7.5YR4/4　褐色中粒砂多く含む細粒砂～極細粒砂　細礫を多く含み、中礫を少量含む。しまり弱。地山。
23．7.5YR5/4　にぶい黄褐色　中粒砂少量含む極細粒砂　細礫を多く含み、中礫を少量含み。しまりやや弱。地山。
24．5YR5/6　明赤褐色細粒砂～極細粒砂含むシルト　細礫中礫を含む。しまり強。地山。

ＳＹ01：５～９・11～17



C−C´
1．盛土。
2．5YR5/6　明赤褐色極細粒砂含むシルト　ラミナあり。地山。
3．2.5Y5/6 明褐色中粒砂非常に多く含む極細粒砂　橙色シルト小ブロックを少量含む。地山。

図8　基本土層

第３節　遺構と出土遺物

１．概要

川池西古窯は、丘陵地の南側斜面の標高約 18.5 ｍに立地する。窯体の構造は、地山をトンネル状に掘りぬいて構築された、分炎柱を有する地下式の窖窯である。

今回の調査で、窯体３基（ＳＹ 01 前庭部・ＳＹ 02・03)、ロクロピット（ＳＰ 01)、土坑６（ＳＫ 01 ～ 06)、ＳＹ 01 の灰原を検出した。窯体については、いずれも後世の攪乱や調査範囲の制約上、部分的な検出にとどまるなど窯全体を調査したわけではない。

遺物は、碗・小皿、極少量の片口鉢、細片ではあるが常滑陶器が出土した。

２．遺構

ＳＹ 01　図 11・12　巻頭図版２、３－１～３　図版３－１～３、13

Ｄ５グリッドに位置する。調査区西壁際にトレンチを掘削した際、明黄褐色・赤褐色に変色し、硬化した地山を確認した（B - B´ 14・15 層)。この地山の変色と硬化は被熱による現象であり、また、斜面下側に隣接して前庭部となる平坦面を確認したことから焚口と判断した。焚口の北東側には、方形状の掘り込みがあり、その形状から焚口へ繋がる階段状の通路と想定した。焚口と相対しているであろう、北西から南東方向の一辺を基準とし、これに対して直交方向を窯体の想定中心軸とした。想定主軸方位は、Ｎ -38°－Ｅである。窯体の大部分が調査区外のため、規模・様相は不明である。

前庭部　前庭部は、焚口からより標高の高い部分を掘削して構築されている。平面は不定形で、範囲は東西 2.5 ｍ、南北 4.56 ｍを測る。検出面からの深さは 0.17 ｍで、底面標高は平均 17.5 ｍを測る。傾斜角は東に７°と緩やかに下がる。前庭部の南端は広くなっており、この部分をＳＫ 05 とした（後述)。また、焚口の下方には、前述した階段状の通路と想定した落ち込みがある。北西側は調査区外のため不明である。焚口の北東側ではＳＫ 01、南東側ではＳＫ 02・03 を検出した。前庭部の平担面において焼台の広がりを検出した（断面 A - A´ ２層、B - B´ ７～９層、C - C´ ２層、D - D´ ２層)。焼台の大半は破片で、完形は極少量出土したのみである。埋土中の最下層（断面 D - D´ ８・９層）は、遺物・炭化物・焼土を含まない地山ブロック土で構成されている。この層位は、その特徴と焚口直下に位置することから、築窯排土と判断した。前庭部の一部は、築窯廃土を利用して平坦な面を形成した可能性が高い。また、B-B´ ７層・D - D´ ６層では、炭化物を非常に多く含んだ堆積を確認した。A - A´ ・D - D´ ２層、B - B´ ７～９層、C - C´ ２層の焼台集積層と、B - B´ ７層・D - D´ ６層の炭化物を非常に多く含む層との間に堆積しているＢ - B´ 10・11 層、C - C´ ３層、D - D´ ３～５層は、明赤褐色・明赤褐色細粒砂主体で遺物を含まない地山再堆積層である。この堆積はその特徴と炭化物層に挟まれることから、窯の改築・修理に起因し排出された排土である可能性がある。したがって、この層を挟み、少なくとも最低２回の操業が想定できる。

遺物は、碗（１～３)、小皿（４・５)、焼台（6）が出土した。焼台には、焼成時に高台が癒着しないよう籾殻が敷かれた痕跡が明瞭に残っていた。

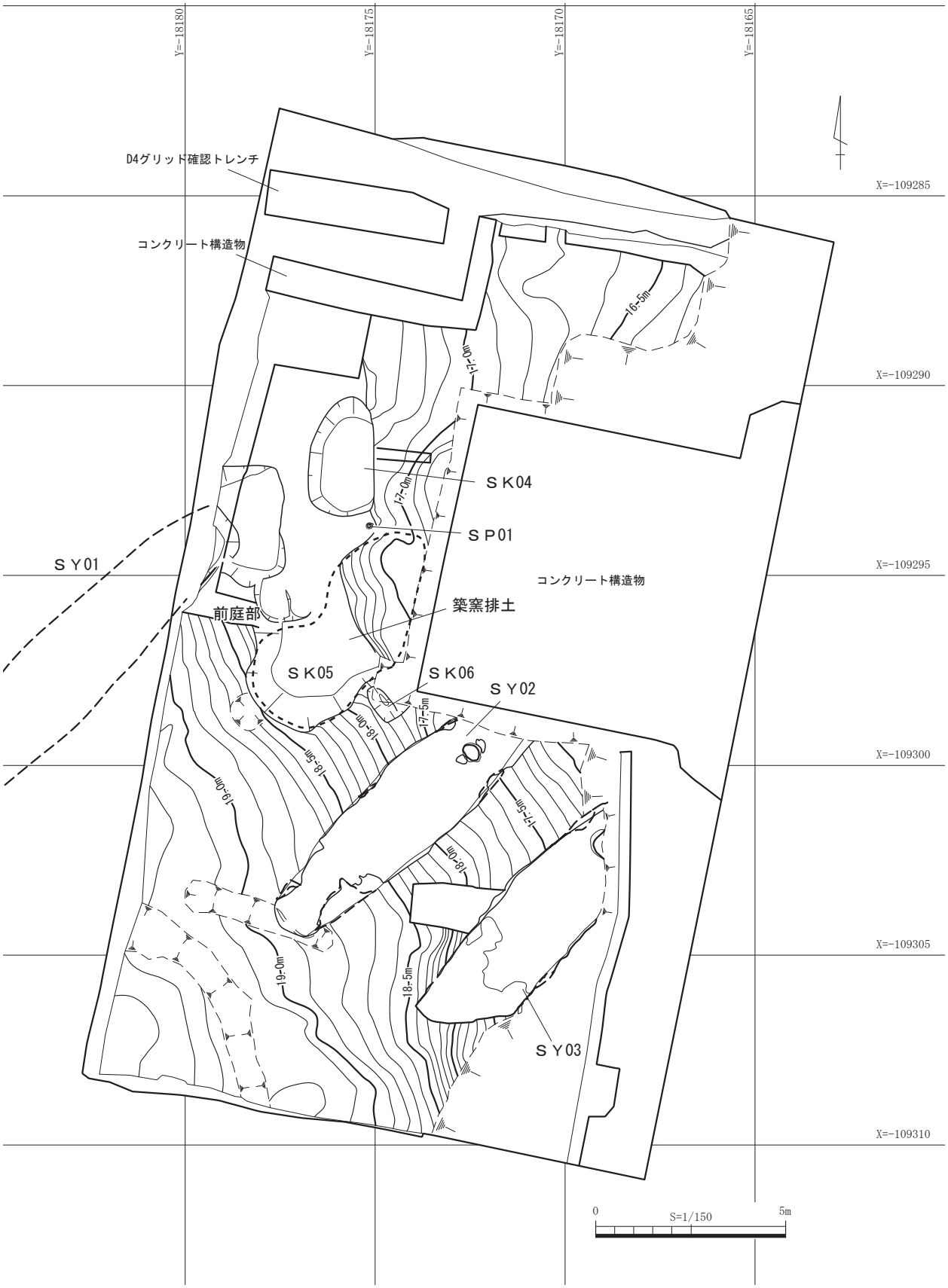

Y=-18180
Y=-18175
Y=-18170
Y=-18165
X=-109285
X=-109290
X=-109295
X=-109300
X=-109305
X=-109310
D4グリッド確認トレンチ
コンクリート構造物
16-5m
17-0m
17-5m
18-0m
18-5m
19-0m
ＳＫ04
ＳＰ01
ＳＹ01
コンクリート構造物
築窯排土
前庭部
ＳＫ05
ＳＫ06
ＳＹ02
ＳＹ03
0
S=1/150
5m

図９　初回操業

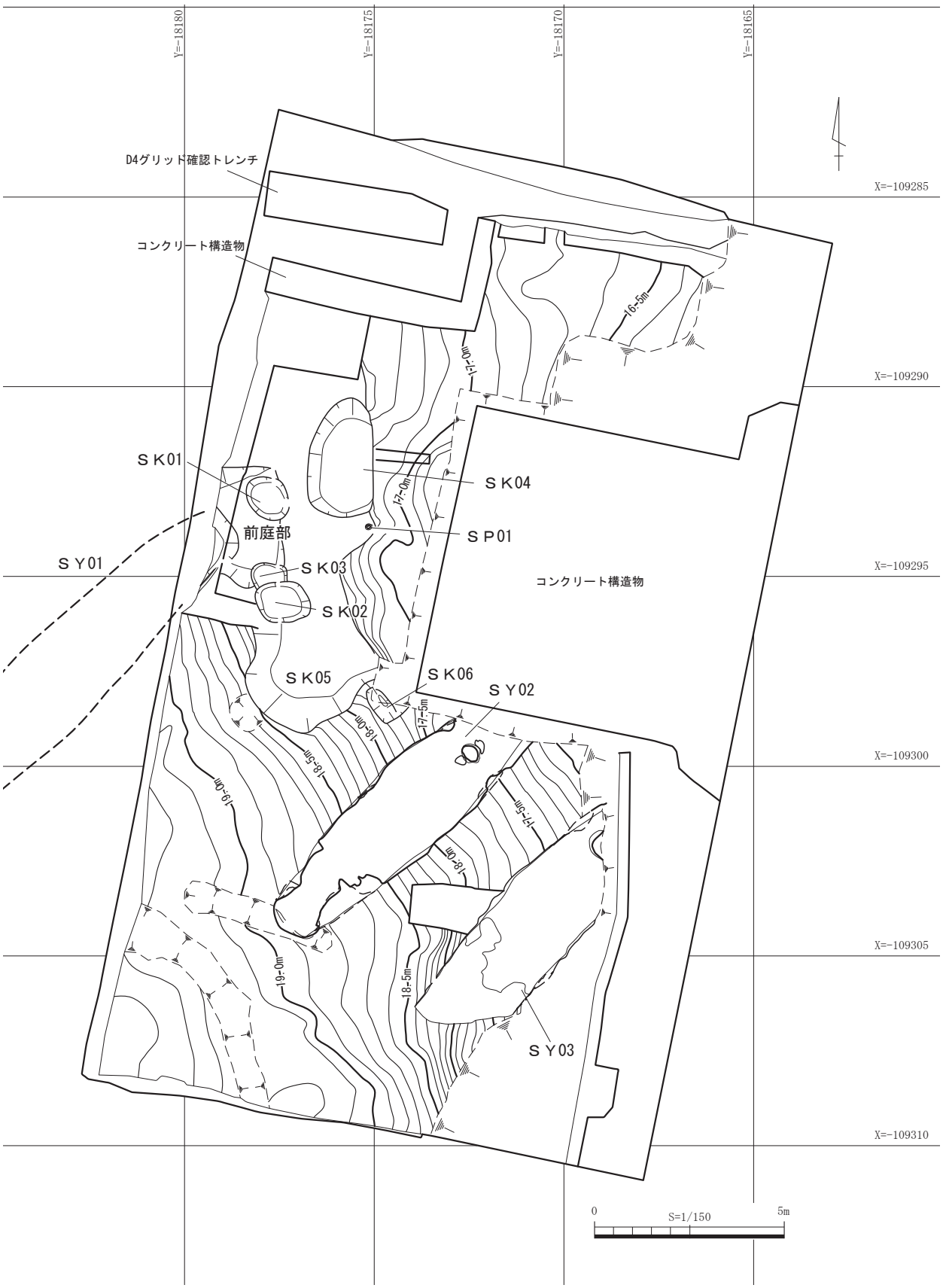

Y=-18180
Y=-18175
Y=-18170
Y=-18165
X=-109285
X=-109290
X=-109295
X=-109300
X=-109305
X=-109310
D4グリッド確認トレンチ
コンクリート構造物
コンクリート構造物
ＳＫ01
ＳＫ02
ＳＫ03
ＳＫ04
ＳＫ05
ＳＫ06
ＳＰ01
ＳＹ01
ＳＹ02
ＳＹ03
前庭部
16-5m
17-0m
17-5m
18-0m
18-5m
19-0m
0
S=1/150
5m

図 10 最終操業

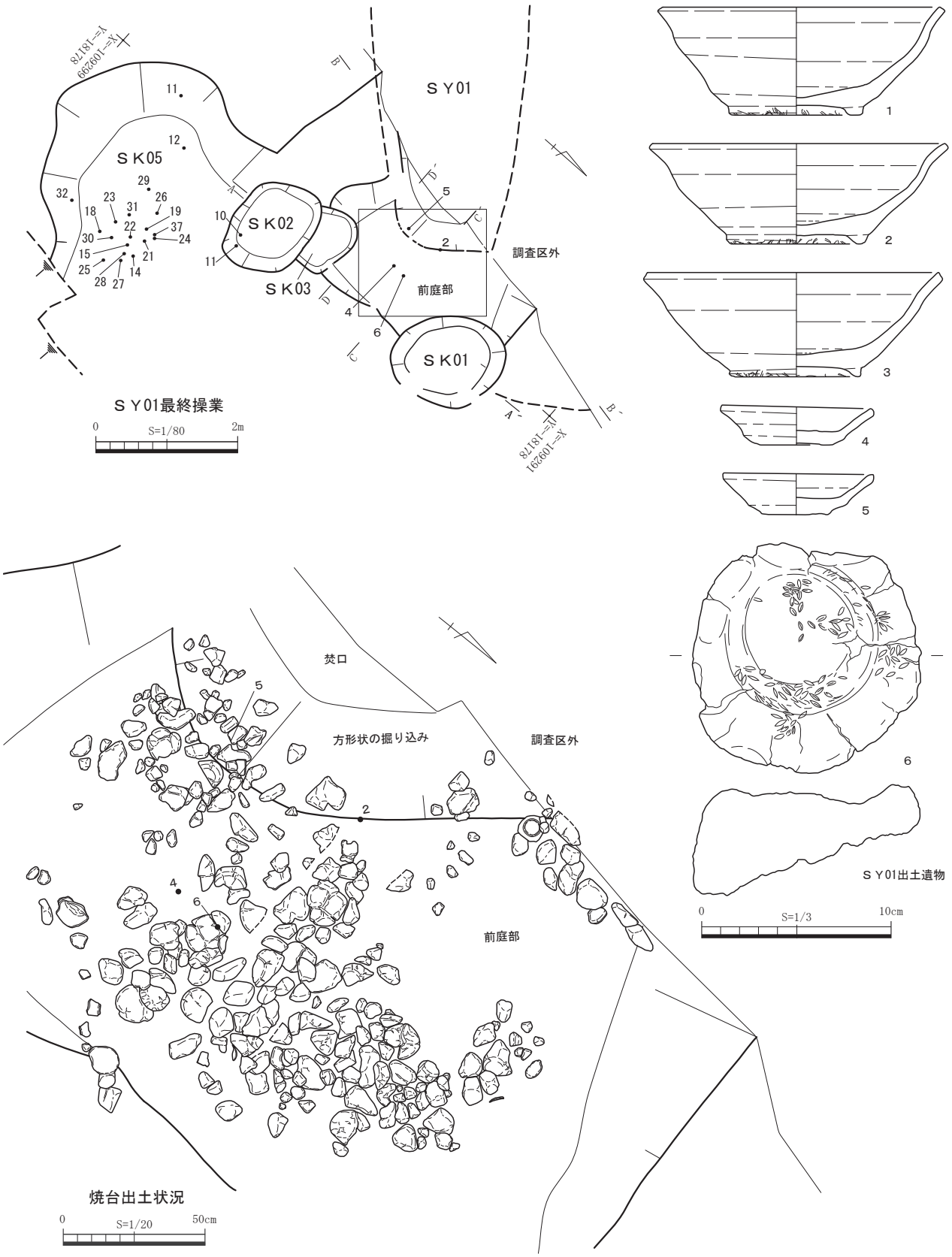
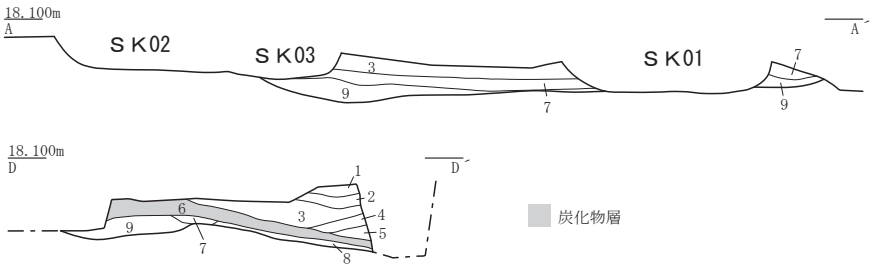
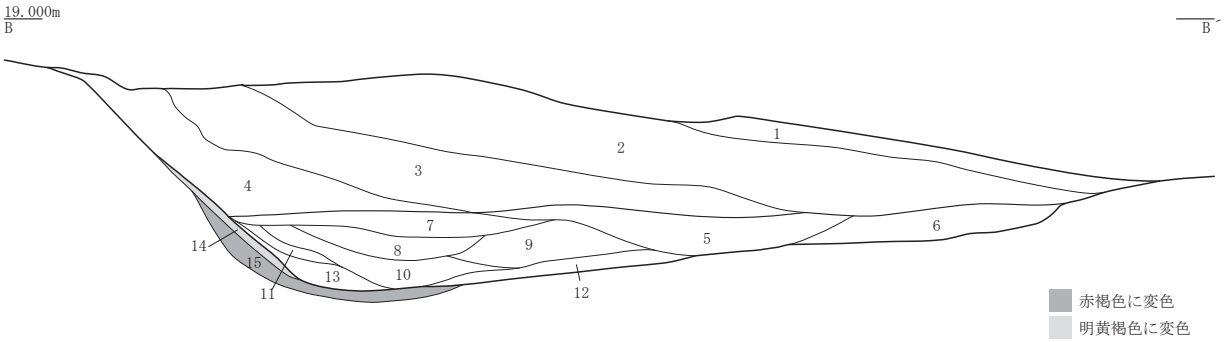


図 11　SY 01 焚口・前庭部（1）



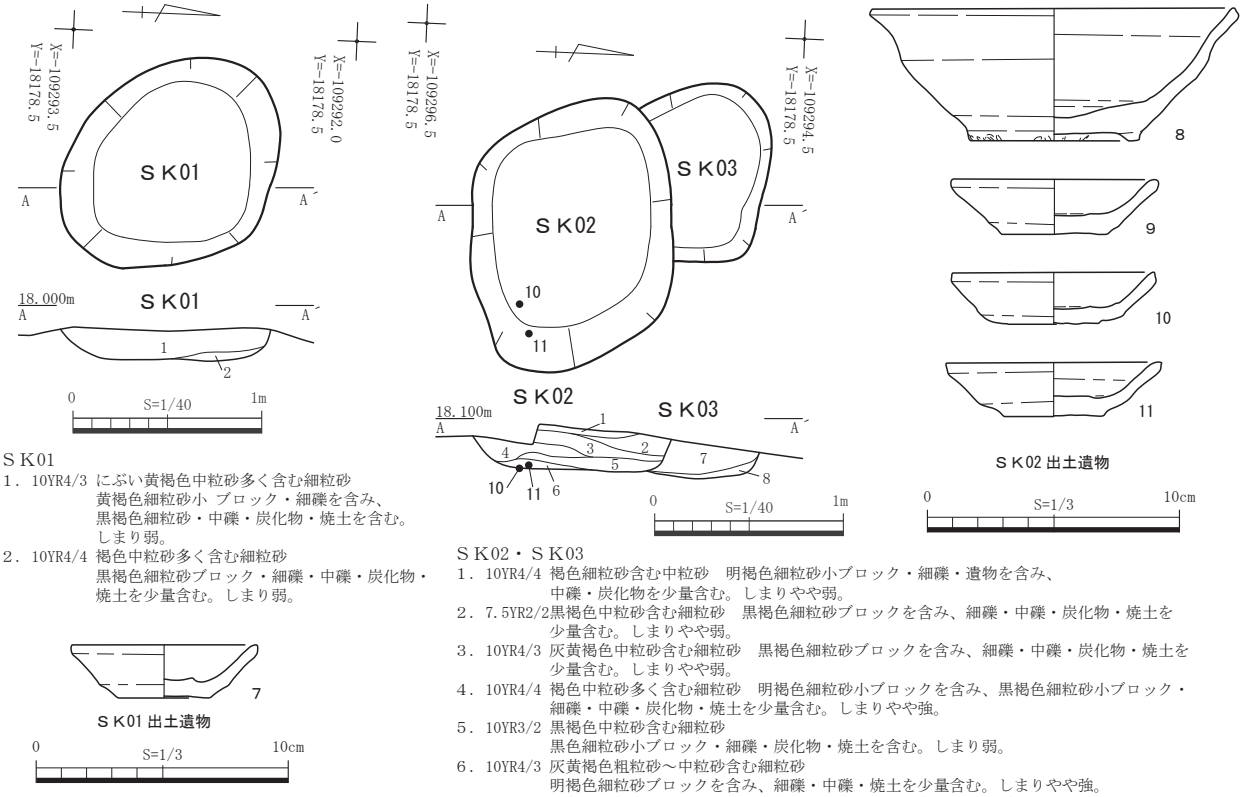
ＳＹ01 Ａ・Ｄ
1．7.5YR4/3　　にぶい黄褐色中粒砂多く含む細粒砂　細礫・炭化物を含み、明褐色細粒砂・焼土を少量含む。しまりやや弱。
2．7.5YR5/6　　明褐色細粒砂～極細粒砂含む中粒砂　焼台片を多く、にぶい褐色細粒砂小ブロック・細礫・炭化物を含み、焼土・遺物を少量含む。しまりやや強。
3．5YR5/6～8　明赤褐色極細粒砂少量含む細粒砂　細礫・焼土を含み、明褐色細粒砂ブロック・中礫・炭化物・焼台片を少量含む。やや弱。
4．7.5YR5～6/6 明褐色中粒砂含む細粒砂　細礫を含み、黄褐色細粒砂小ブロックを少量含む。しまりやや弱。
5．6.75YR5/8　明褐色極細粒砂少量含む細粒砂　明赤褐色細粒砂小ブロック・細礫・中礫・炭化物を少量含む。しまりやや弱。
6．7.5YR2/1　　黒色中粒砂含む細粒砂　炭化物を多く、黒褐色細粒砂小ブロック・焼土を含み、明褐色細粒砂小ブロック・細礫・焼台片を少量含む。しまり弱。
7．10YR4/4　　褐色中粒砂多く含む細粒砂　細礫を含み、明褐色細粒砂小ブロック・炭化物を少量含む。しまりやや弱。
8．7.5YR5/6　　明褐色中粒砂含む細粒砂　明赤褐色極細粒砂ブロックを含み、細礫を少量含む。しまり強。
9．8.75YR5/6　明褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫・中礫を少量含む。しまりやや弱。



ＳＹ01 Ｂ
1．8.75YR5/6　　明褐色中粒砂含む極細粒砂　細礫・中礫少量含む。しまりやや強。流入土。
2．7.5YR5/6～8 明褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　細礫を多く含む。流入土。
3．8.75YR5/6　　明褐色中粒砂多く含む細粒砂～極細粒砂　細礫を含み、炭化物・焼土少量含む。しまりやや弱。
4．8.75YR5/6　　黄褐色細粒砂含む中粒砂　細礫を含み、明褐色細粒砂ブロック・中礫・炭化物を少量含む。しまり強。
5．7.5YR5/6　　明褐色中粒砂含む細粒砂　細礫・中礫を含み、焼台片を少量含む。しまり弱。
6．7.5YR5/4～6 にぶい褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　明褐色細粒砂ブロック・炭化物・焼土・焼台片を少量含む。しまりやや強。
7．7.5YR5/3～4 にぶい褐色中粒砂多く含む細粒砂　炭化物を非常に多く含み、細礫・焼台片を含む。しまり弱。
8．7.5YR5/6　　明褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　焼台片を多く含み、明赤褐色極細粒砂大ブロック・細礫を含む。しまりやや弱。
9．7.5YR5/4～6 にぶい黄褐色中粒砂含む細粒砂　細礫・焼台片・遺物を含み、明褐色極細粒砂小ブロックを少量含む。しまり弱。
10．7.5YR5/6　　明褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂　明赤褐色極細粒砂大ブロック・炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。
11．7.5YR4/3　　褐色中粒砂含む細粒砂　明赤褐色極細砂大ブロック・細礫を含む。炭化物を少量含む。しまりやや弱。
12．7.5YR5/4～6 にぶい褐色中粒砂多く含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫を含み、炭化物を少量含む。しまり弱。
13．5YR5/6　　明褐色細粒砂少量含む極細粒砂　細礫を含み、明褐色細粒砂ブロックを少量含む。しまりやや弱。
14．10YR7/4～6 明黄褐色（地山が被熱により変色）
15．2.5YR4/8　　赤褐色（地山が被熱により変色）

ＳＹ01 Ｃ
1．7.5YR5/6　　明褐色中粒砂含む細粒砂　細礫・中礫を含み、焼台片を少量含む。しまり弱。
2．7.5YR5/6　　明褐色細粒砂～極細粒砂含む中粒砂　焼台片を多く、にぶい褐色細粒砂小ブロック・細礫・炭化物を含み、焼土・遺物を少量含む。しまりやや強。
3．5YR5/6～8　明赤褐色極細粒砂少量含む細粒砂　細礫・焼土を含み、明褐色細粒砂ブロック・中礫・炭化物・焼台片を少量含む。やや弱。
4．7.5YR2/1　　黒色中粒砂含む細粒砂　炭化物を多く、黒褐色細粒砂小ブロック・焼土を含み、明褐色細粒砂小ブロック・細礫・焼台片を少量含む。しまり弱。
5．10YR4/3　　にぶい黄褐色中粒砂非常に多く含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロックを含み、細礫・中礫・炭化物を少量含む。しまりやや弱。

図 12　SY 01 焚口・前庭部（2）



ＳＫ01
1．10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
黄褐色細粒砂小 ブロック・細礫を含み、
黒褐色細粒砂・中礫・炭化物・焼土を含む。
しまり弱。
2．10YR4/4 褐色中粒砂多く含む細粒砂
黒褐色細粒砂ブロック・細礫・中礫・炭化物・
焼土を少量含む。しまり弱。

ＳＫ02・ＳＫ03
1．10YR4/4 褐色細粒砂含む中粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫・遺物を含み、
中礫・炭化物を少量含む。しまりやや弱。
2．7.5YR2/2黒褐色中粒砂含む細粒砂　黒褐色細粒砂ブロックを含み、細礫・中礫・炭化物・焼土を
少量含む。しまりやや弱。
3．10YR4/3 灰黄褐色中粒砂含む細粒砂　黒褐色細粒砂ブロックを含み、細礫・中礫・炭化物・焼土を
少量含む。しまりやや弱。
4．10YR4/4 褐色中粒砂多く含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロックを含み、黒褐色細粒砂小ブロック・
細礫・中礫・炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。
5．10YR3/2 黒褐色中粒砂含む細粒砂
黒色細粒砂小ブロック・細礫・炭化物・焼土を含む。しまり弱。
6．10YR4/3 灰黄褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂
明褐色細粒砂ブロックを含み、細礫・中礫・焼土を少量含む。しまりやや強。
7．7.5YR2/1黒色中粒砂含む細粒砂　細礫・炭化物を含み、黒褐色中粒砂小ブロック・焼土・焼台片・
遺物を少量含む。しまりやや弱。
8．5YR2/1　黒色中粒砂含む細粒砂と7.5YR5/6明褐色中粒砂含む細粒砂の混土。　ＳＫ02：１～６
細礫・炭化物・焼土を少量含む。しまりやや弱。　ＳＫ03：７・８

図 13　SK 01・02・03

ＳＫ 01　図 12　巻頭図版３－４　図版３－４・５、13

Ｄ５グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 1.29 m、短径 1.05 mを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.17 mを測る。

本土坑は、ＳＹ 01 焚口の北東側で検出した。埋土は、１・２層とも細粒砂主体で、炭化物・焼土、黒褐色細粒砂ブロックを含むことから、人為的な堆積と判断した。本土坑は、ＳＹ 01 前庭部で窯の改築・修理に伴う排土と推定した層を切ることから、少なくとも２回目以降の操業時に掘削されたと推定した。

遺物は、碗・小皿（７）が出土した。

ＳＫ 02　図 12　巻頭図版３－４　図版３－４・５、13

Ｄ６グリッドに位置する。ＳＫ 03 を切る。平面は楕円形で、長径 1.51 m、短径 1.13 mを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.24 mを測る。

本土坑は、ＳＹ 01 焚口の南東側で検出した。埋土は、ブロック土・焼土・炭化物を含むことから人為的な堆積と考える（３～８層)。特に３層、８層には、遺物が多く含まれていた。本土坑は、ＳＹ 01 前庭部で窯の改築・修理に伴う排土と推定した層を切ることから、少なくとも２回目以降の操業時に掘削されたと推定した。

遺物は、碗（８）・小皿（９～ 11）が出土した。

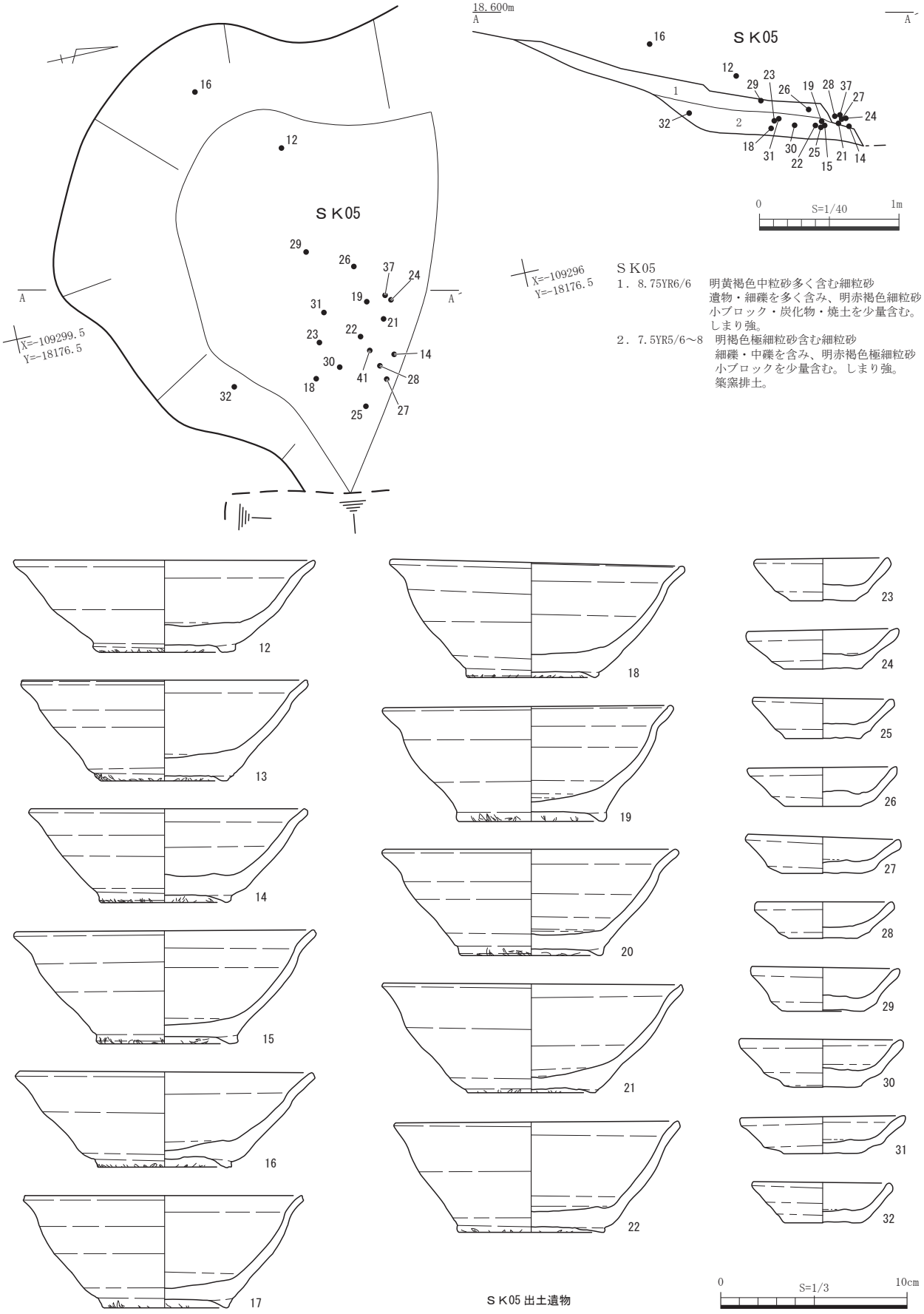

18.600m
A
A'
ＳＫ05
1
2
S=1/40
0
1m
X=-109299.5
Y=-18176.5
X=-109296
Y=-18176.5
ＳＫ05
１．8.75YR6/6　明黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
遺物・細礫を多く含み、明赤褐色細粒砂
小ブロック・炭化物・焼土を少量含む。
しまり強。
２．7.5YR5/6～8　明褐色極細粒砂含む細粒砂
細礫・中礫を含み、明赤褐色極細粒砂
小ブロックを少量含む。しまり強。
築窯排土。
ＳＫ05 出土遺物
S=1/3
0
10cm

図 14　SK 05（1）

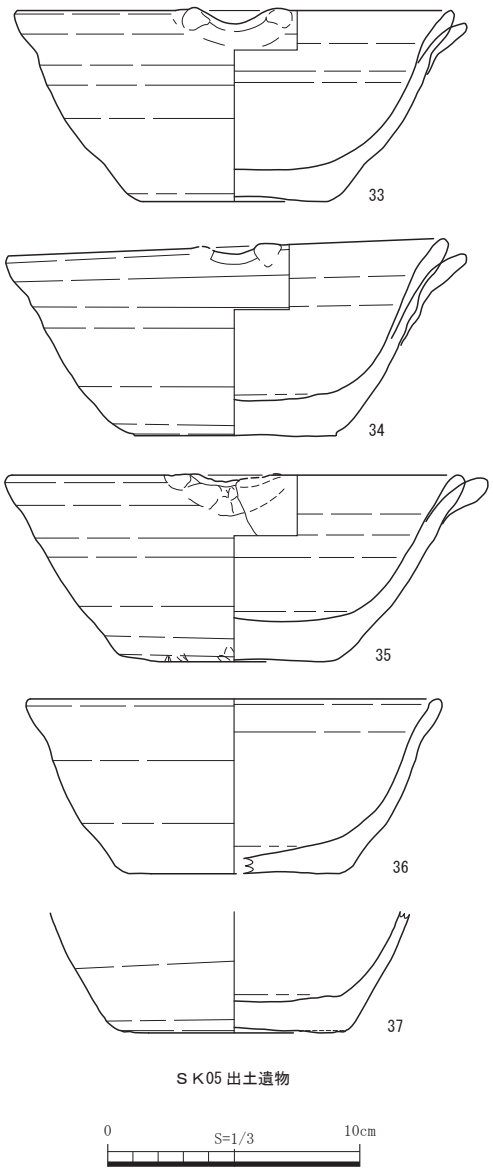


図 15　SK 05（2）

ＳＫ 03　図 12　図版４－３

Ｄ６グリッドに位置する。ＳＫ 02 に切られる。平面は、楕円形と推定し、長径 0.97 m、短径 0.73 m以上を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.17 mを測る。

本土坑は、ＳＹ 01 焚口の南東側で検出した。埋土は、7・８層とも細粒砂主体の黒色土層で、ブロック土・炭化物・焼土を含むことから、人為的な堆積と推定した。本土坑は、ＳＹ 01 前庭部で窯の改築・修理に伴う排土と推定した層を切ることから、少なくとも２回目以降の操業時に掘削されたと推定した。

遺物は、碗・小皿の細片が出土した。

ＳＫ 05　図 13・14　巻頭図版３－５　図版４－４・５、13、14、15

Ｄ・Ｅ５グリッドに位置する。ＳＹ 01 の焚口の南東側、流入土直下で検出した。平面は不定形で、長径 3.31 m、短径 2.62 m以上を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.29 mを測る。

埋土は、１層が明黄褐色細粒砂主体で、遺物が集中的に堆積し、２層は、明褐色で極細粒砂を含んだ細粒砂主体に、明赤褐色極細粒砂の地山ブロックを含む。２層は、地山と酷似していることから、窯体を構築した際の排土と推定した。また、1 層目の底面がほぼ水平に堆積していることから、築窯排土を使用して平坦面を形成し、作業場など窯に関連する施設にしていた可能性がある。形成された平坦面は、ＳＹ 01 前庭部と同じ高さで、平面的にも連なることから、同じ築窯排土を利用するＳＹ 01 前庭部の一部と判断した。

遺物は、碗（12 ～ 22）・小皿（23 ～ 32）・片口鉢（33 ～ 37）が出土した。片口鉢の底部内外面には、籾殻痕が明瞭に残っていた。

ＳＹ 02　図 15 ～ 18　巻頭図版４－１・２、５－１～５、図版５、６、15

Ｅ６・Ｅ７・Ｄ７グリッドに位置する。窯体は、焼成室・分炎柱・燃焼室の一部が遺存し、煙道部・焚口・前庭部は、造成により削平され消失していた。ただし焼成室の南東端に、窯の中心軸と直交する幅約 0.08 mの細長い平坦面を確認した。これは、窯体内の空気の流れを調整するダンパー関連施設の可能性がある。このことから、この平坦面が焼成室と煙道部との境と推定し、これより上方は煙道部の可能性がある。本窯は、主軸方位Ｎ -47°－Ｅで南西斜面に開口し、残存長は 7.6 m、最大幅は 2.4 mを測る。標高は、最上位で 18.7 m、最下位で 15.9 m、比高差は 2.8 mである。天井は、Ｃ - Ｃ´でわずかに遺存し、そのほ

とんどが崩落していた。また床面についてはほぼ全面消失しており、製品を窯から出す際のものと考える長さ 3.30 m、深さ 0.12 mの落ち込みは見つかったが、伏せ碗や窯体に伴う排水施設などは見つからなかった。燃焼室において窯築時の掘削痕跡を確認した。

遺物は、碗（38 ～ 46）、小皿（47 ～ 52）、焼台（53）が出土した。碗（46）の底面内部には、ヘラ記号「十」が認められた。

焼成室　残存長は、6.68 mで、平面は、中心軸に対して左右にほぼ対称である。焼成室と燃焼室の境で幅 1.91 m、そこから緩やかに広がり分炎柱から上方 1.5 m地点で、最大幅 2.4 mを測る。さらに上方へ向かうにつれて幅は徐々に狭まり、煙道部と焼成室の境で 1.24 mを測る。床面の傾斜角は、そのほとんどが流失ししているため、窯体底面の傾斜角を示す。分炎柱を起点に上方 2.0 m地点から、最大幅部分まで 20°で上昇する。分炎柱より 4.88 m地点で 32°と急上昇し、36°で煙道部境に到達する。両側壁には、窯体掘削時のものと考えられる、横方向の工具痕が認められた（図版５－３）。側壁の表面は、被熱により硬化し、ガラス化する部分も認められた。

埋土は、大部分が流入土と天井崩落土と薄い炭化物層で、２・６層のように遺物を含む堆積もある。ただし、２層は天井崩落土より後から堆積していることから、ＳＹ 02 操業時の遺物である可能性は低い。

燃焼室から焼成室下方にかけて、深さ 0.12 mの掘り込みを確認した。また、焼成室において底面から約 20 ㎝壁面で、焼成時の床面と考えられる痕跡を確認した（図 19、図版６－４・５）。焼成時、炎をしぼる必要がある分炎孔付近のため、製品を取り出す際には、この部分の床を掘削している可能性がある。

断ち割りの結果、被熱により赤褐色に変色した地山を確認したが、床面下の伏せ碗は見つからなかった。

分炎柱・分炎孔　分炎柱は、基底部で長径 0.56 m、短径 0.49 m、残存している上端で長径 0.49 m、短径 0.36 m以上を測る。平面は、楕円形で、残存高は、0.32 m以上を測る。断ち割りの結果、分炎柱は、地山を掘削しくり抜いた構造で、スサ入り粘土の貼り付け等の痕跡は確認できなかった。しかし、遺構外で、スサの痕跡が残った窯体の一部が見つかっており、部分的な改修の可能性はある。

分炎孔は、天井が崩落しているため、残存部分での計測で、南東側で最大幅 0.68 m、北西側で最大幅 0.73 mを測る。

燃焼室　分炎柱下端から、残存長 0.54 m　最大幅 1.74 mを測る。傾斜角 1°である。平面は、分炎柱から下方へ緩やかに狭まると推定する。燃焼室から焼成室下方にかけての掘り込みは、燃焼室から焼成室に向けて、底面が 23°で下降し 27°で上昇する。長さは 0.32 mを測る。床面は消失しており、側壁の一部が残存するのみである。分炎柱付近では、わずかな炭化物層を検出した。

埋土中、27 層がにぶい褐色の極細粒砂で遺物・焼台・炭化物の細片を含み、28 層については遺物が確認されているが、極少量であるため、27・28 層は、掘り方と考える。これらの埋土を除去後に、燃焼室において、掘削痕跡を検出した。この掘削痕跡は、床を割って製品を取り出すため、舟底ピット状に掘削した際の痕跡と考える。工具幅は約 0.12 mと推定した。

ＳＫ 04　図 19　図版７、16

D・E ５グリッドに位置し、ＳＹ 01 灰原直下で検出した。平面は不定形で、長径 3.16 m、短径 1.73 m以上を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.39 mを測る。底面標高は、北端 17.26 m、中

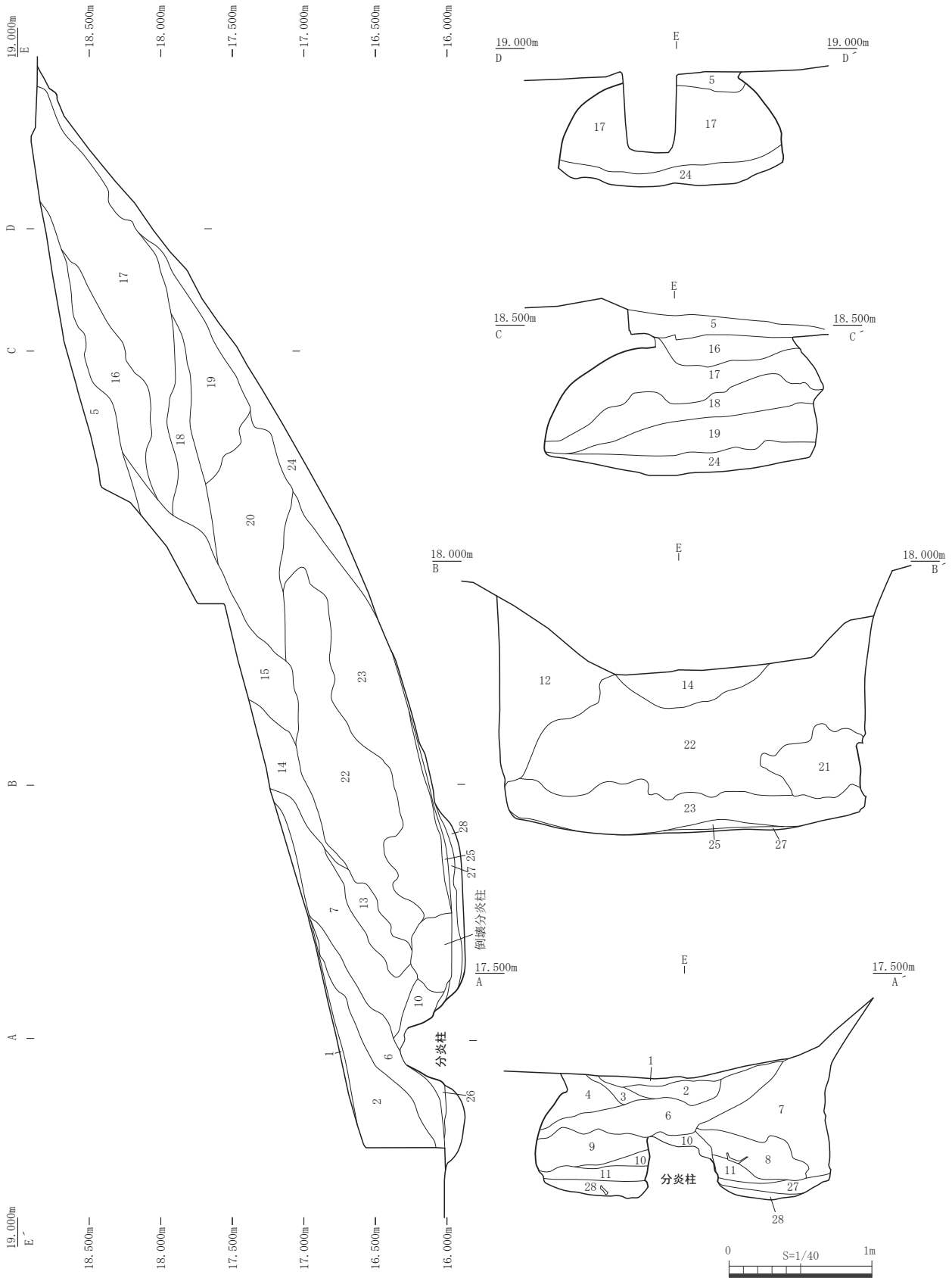
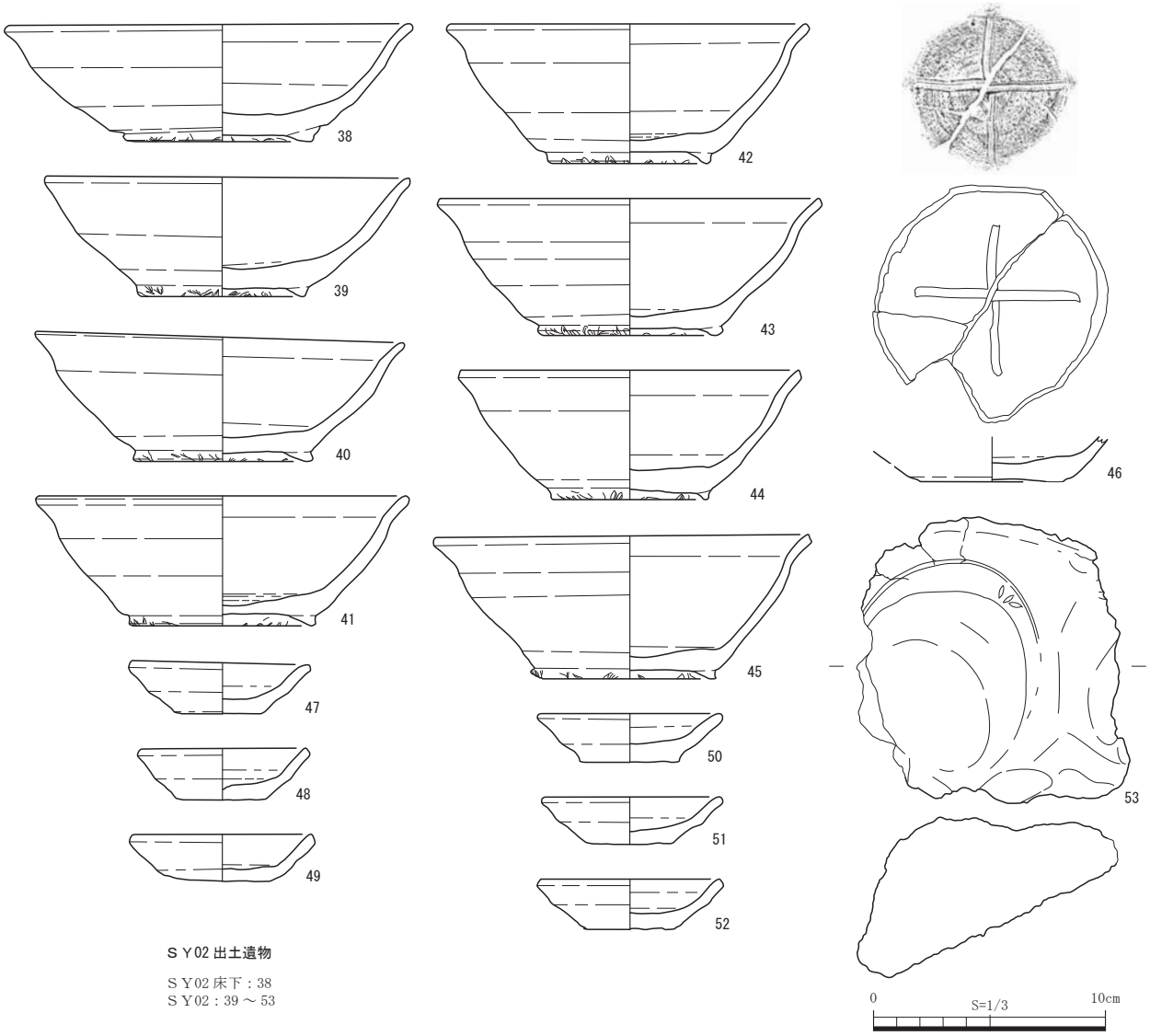

19.000m
E
−18.500m
−18.000m
−17.500m
−17.000m
−16.500m
−16.000m
D
C
B
A
E´
18.500m
18.000m
17.500m
17.000m
16.500m
16.000m
倒壊分炎柱
分炎柱
19.000m
D
D´
18.500m
C
C´
18.000m
B
B´
17.500m
A
A´
S=1/40
0
1m

図 16　SY 02（1）

ＳＹ02 Ａ～Ｅ

１．5YR5/8　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　にぶい黄褐色細粒砂小ブロック・炭化物・焼土を少量含む。しまり弱。
２．7.5YR5/6　明褐色極細粒砂少量含む細粒砂
　遺物を多く含み、明赤褐色細粒砂小ブロック・細礫・炭化物・焼土を少量含む
　しまり弱。
３．5YR5/6～8　明赤褐色極細粒砂含む細粒砂
　明赤褐色細粒砂ブロックを含み、細礫を少量含む。しまりやや強。
４．5YR5/6～8　明赤褐色極細粒砂含む細粒砂
　明赤褐色細粒砂ブロックを含み、焼台片を少量含む。しまりやや強。
５．7.5YR4/6　褐色細粒砂多く含む粗粒砂～中粒砂
　細礫を多く、黄褐色細粒砂ブロック・遺物を含み、炭化物を少量含む。
　しまり弱。
６．10YR5/6　黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
　細礫・焼台片を少量含む。しまり弱。
７．5YR5/8　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　黄褐色中砂ブロックを多く含み、明褐色細粒砂を少量含む。
８．5YR5/6～8　明赤褐色細粒砂含む極細粒砂
　窯天井片を含み、橙色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
９．5YR5/8　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　窯天井片・明褐色細粒砂を少量含む。
10．10YR5/4　にぶい黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
　にぶい黄橙色・明褐色細粒砂小ブロック・炭化物・焼土を少量含む。
11．10YR5/6　黄褐色中粒砂多く含む細粒砂と5YR5/8明赤褐色シルト少量含む
　細粒砂の混土層　遺物を含む。
12．7.5YR5/6　明褐色シルト少量含む細粒砂
　(明赤褐色極細粒砂大ブロックを多く含み、細礫・炭化物を少量含む) と
　5YR5/8シルト含む細粒砂（白色細粒砂ブロック・黄褐色細粒砂ブロック含む）
　の混土。しまりやや弱。
13．2.5YR4/8　赤褐色極細粒砂含む細粒砂。天井崩落土。
14．5YR5/8　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　細礫を含み、明褐色細粒砂・遺物片を少量含む。
15．5YR5/6　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　明褐色細粒砂小ブロック・中礫・炭化物・焼土を少量含む。
16．8.75YR5/6明褐色中粒砂少量含む細粒砂
　炭化物を多く含み、明褐色細粒砂小ブロック・焼土を含む。
17．5YR5/6　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　焼土・焼台片を含み、細礫・炭化物を少量含む。しまりやや強。
18．5YR4/6　赤褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂
　橙色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
19．6.75YR5/8　明褐色中粒砂～細粒砂含む極細粒砂
　明黄褐色細粒砂ブロック・細礫・炭化物・焼土少量含む。天井崩落土
20．7.5YR　明赤褐色シルト少量含む細粒砂
　白色細粒砂・黄褐色細粒砂・明褐色細粒砂ブロックを含む。しまり強。
21．5YR4/6　赤褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂
　窯天井片を多く含み、橙色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
22．5YR5/6　明赤褐色シルト少量含む極細粒砂
　明褐色細粒砂小ブロック・窯天井片を少量含む。
23．5YR4/6　赤褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂
　窯天井片を多く含み、橙色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
24．7.5YR4/3　にぶい赤褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂
　炭化物を少量含む。
25．7.5YR5/3　にぶい褐色極細粒砂含む細粒砂
　明褐色細粒砂小ブロック・炭化物・焼土を少量含む。
26．7.5YR3～4/3　にぶい褐色中粒砂含む細粒砂
　炭化物を多く含み、褐色極細粒砂小ブロック・焼土を少量含む。しまりやや弱。
27．7.5YR5/3　にぶい褐色極細粒砂含む細粒砂
　明褐色細粒砂小ブロック・焼土・焼台片を含み、細礫を少量含む。
28．10YR5/4　にぶい黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
　暗灰黄色極細粒砂小ブロックを少量含む。



ＳＹ02 出土遺物

ＳＹ02 床下：38
ＳＹ02：39 ～ 53

図 17　SY 02（2）

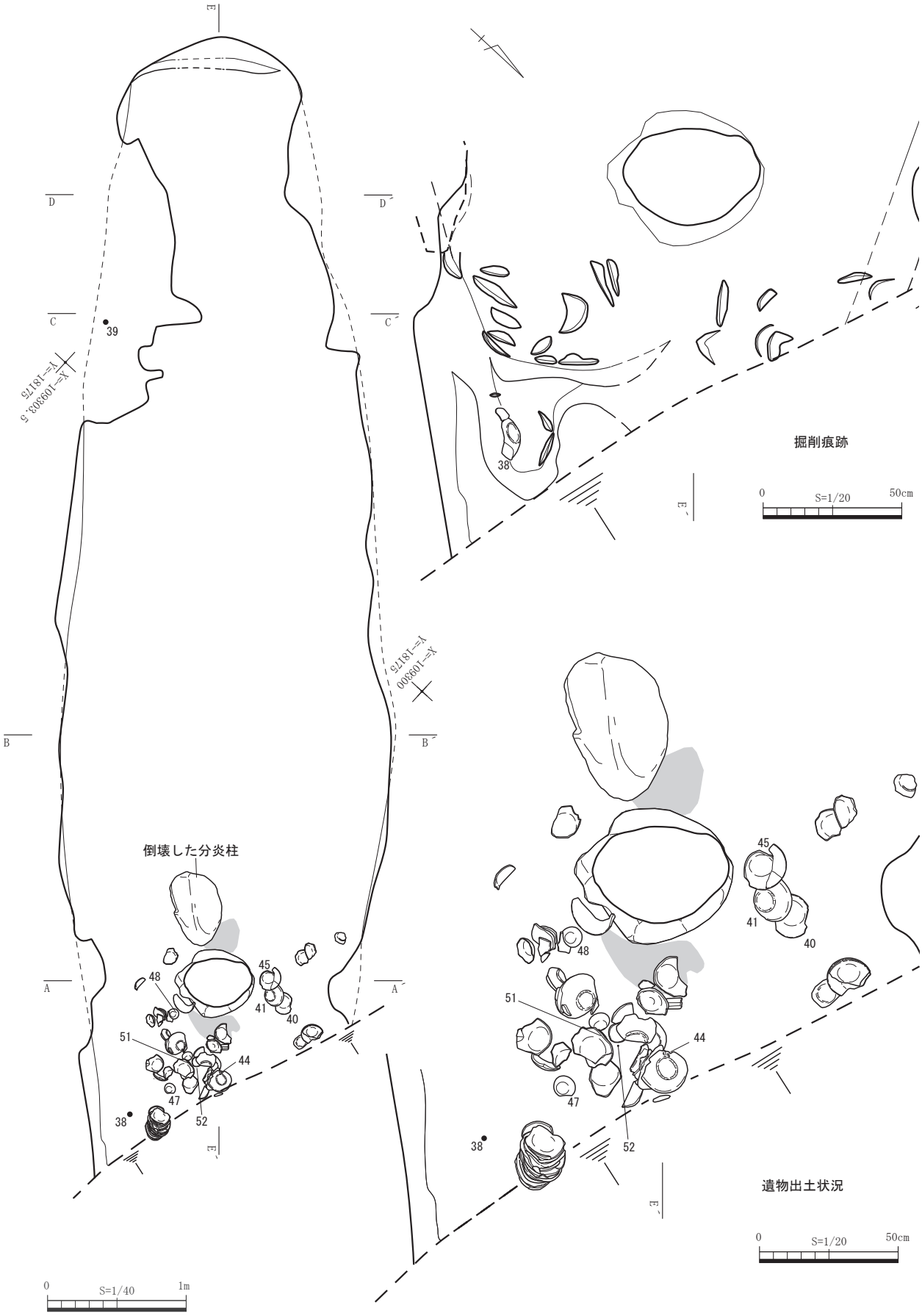

倒壊した分炎柱
掘削痕跡
遺物出土状況
S=1/40
S=1/20
0
1m
50cm
X=109308.5
Y=-18175
X=109300
Y=-18175
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
38
39
40
41
44
45
47
48
51
52

図 18　SY 02（3）

19.000m
E
18.500m
18.000m
17.500m
17.000m
16.500m
16.000m
37
39
48
51
52
47
38
A
B
C
D
E
X=109308.5
Y=18175
X=109300
Y=18175
焼成時床
45
40
41
44

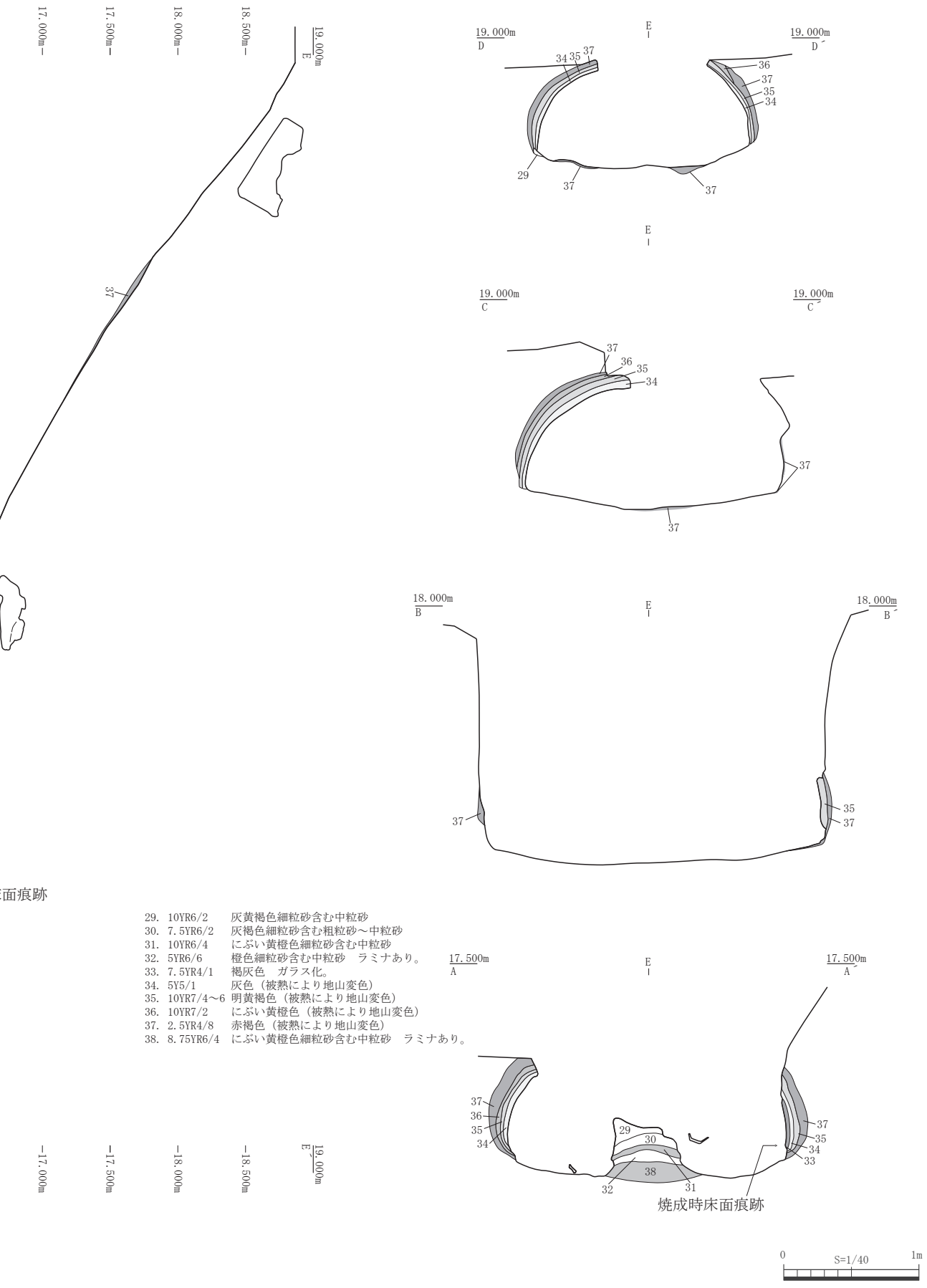

17.000m
17.500m
18.000m
18.500m
19.000m
E
37
19.000m
D
E
19.000m
D´
34 35 37
36
37
35
34
29
37
37
E
19.000m
C
19.000m
C´
37
36
35
34
37
37
18.000m
B
E
18.000m
B´
37
35
37
床面痕跡
29. 10YR6/2　灰黄褐色細粒砂含む中粒砂
30. 7.5YR6/2　灰褐色細粒砂含む粗粒砂～中粒砂
31. 10YR6/4　にぶい黄橙色細粒砂含む中粒砂
32. 5YR6/6　橙色細粒砂含む中粒砂　ラミナあり。
33. 7.5YR4/1　褐灰色　ガラス化。
34. 5Y5/1　灰色（被熱により地山変色）
35. 10YR7/4～6 明黄褐色（被熱により地山変色）
36. 10YR7/2　にぶい黄橙色（被熱により地山変色）
37. 2.5YR4/8　赤褐色（被熱により地山変色）
38. 8.75YR6/4　にぶい黄橙色細粒砂含む中粒砂　ラミナあり。
17.500m
A
E
17.500m
A´
37
36
35
34
29
30
38
32
31
37
35
34
33
焼成時床面痕跡
−17.000m
−17.500m
−18.000m
−18.500m
19.000m
E´
0
S=1/40
1m

図 19　SY 02（4）

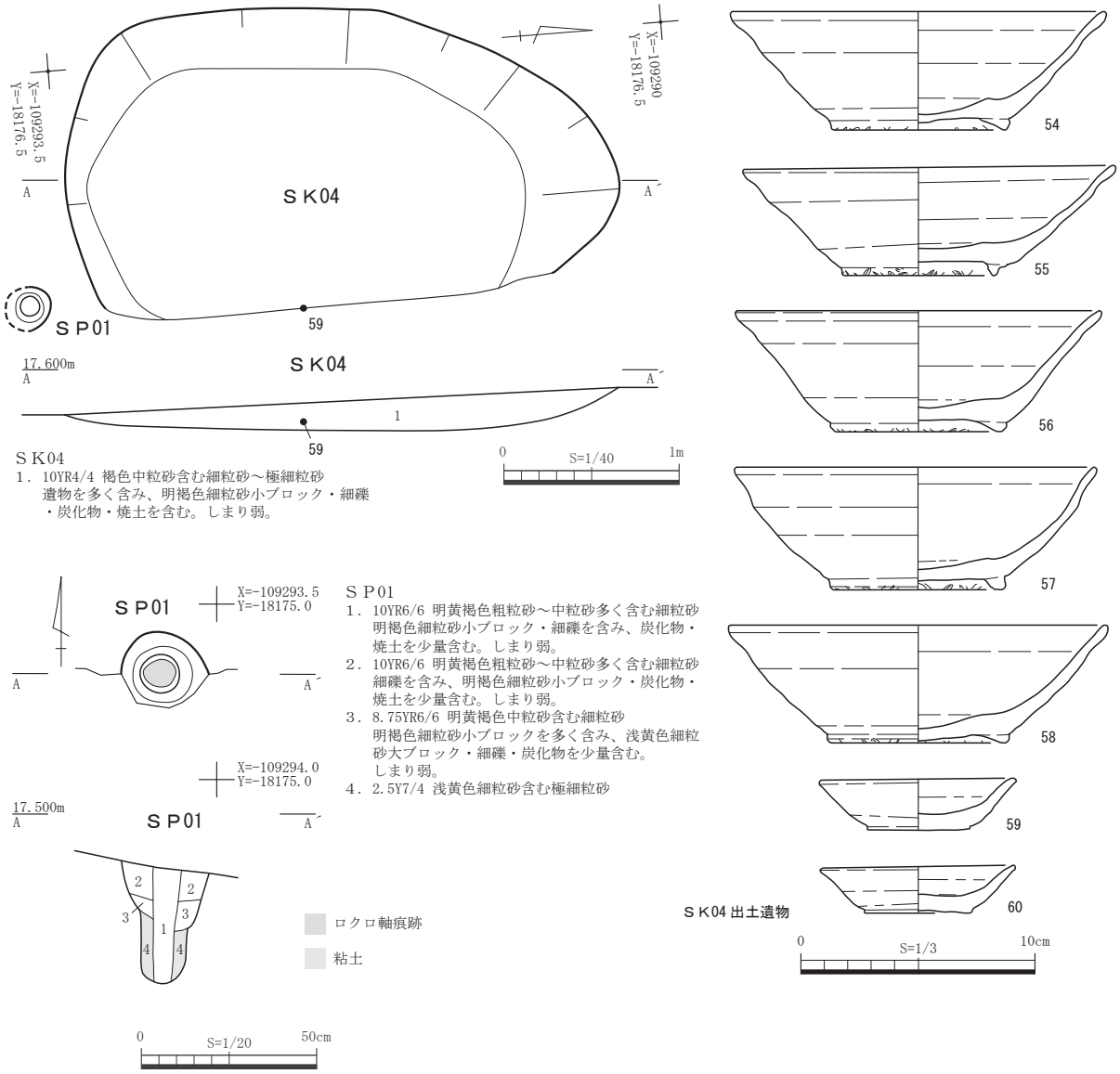


図 20　SK 04・SP 01

央 17.24 m、南端 17.24 mと平坦である。

本土坑は、ＳＹ 01 中心軸を、焚口から 3.05 m地点の斜面を掘削し、平坦面を形成している。また、南側 0.23 mと極めて近い距離でロクロピット（ＳＰ 01）を検出したことから、作業場などの窯業生産に関わる施設の可能性がある。本土坑は、ＳＹ 01 の直下に位置するため、ＳＹ 01 の作業場と判断するのは難しく、より近いＳＹ 02 に関連する土坑と推定した。

遺物は、碗（54 ～ 58）、小皿（59・60）が出土している。いずれも不良品であり、大量に廃棄された状態で出土したことから、作業場としての機能が失われた後の堆積と判断した。前述の位置関係から、ＳＹ 01 由来の遺物である可能性が高い。

ＳＰ 01　図 19　巻頭図版５－６　図版７－１、８

Ｄ５グリッドに位置し、ＳＹ 01 灰原直下で検出した。平面は円形で、長径 0.25 m、短径 0.21 m、軸部は、径 0.11 mを測る。断面は段を有するＵ字形で、検出面からの深さは最深で 0.35 mを測る。埋土は、明黄

褐色の細粒砂を含む中粒砂が主体で、焼土・炭化物を含む（１～３層）。４層は、ロクロ心棒（軸）の周りを充填したと考えられる風化した粘土が堆積していた。ＳＰ 01 は、ＳＫ 04 から 0.23 ｍと非常に近い距離に位置していることから、ＳＫ 04 を作業場とする工房の施設と推定した。ＳＫ 04 と同様に、ＳＹ 01 灰原に覆われているため、ＳＹ 01 関連のロクロピットの可能性は低い。ＳＹ 02 と距離が近いことから、ＳＹ 02 で焼成する製品を製作するためのロクロピットと推定した。

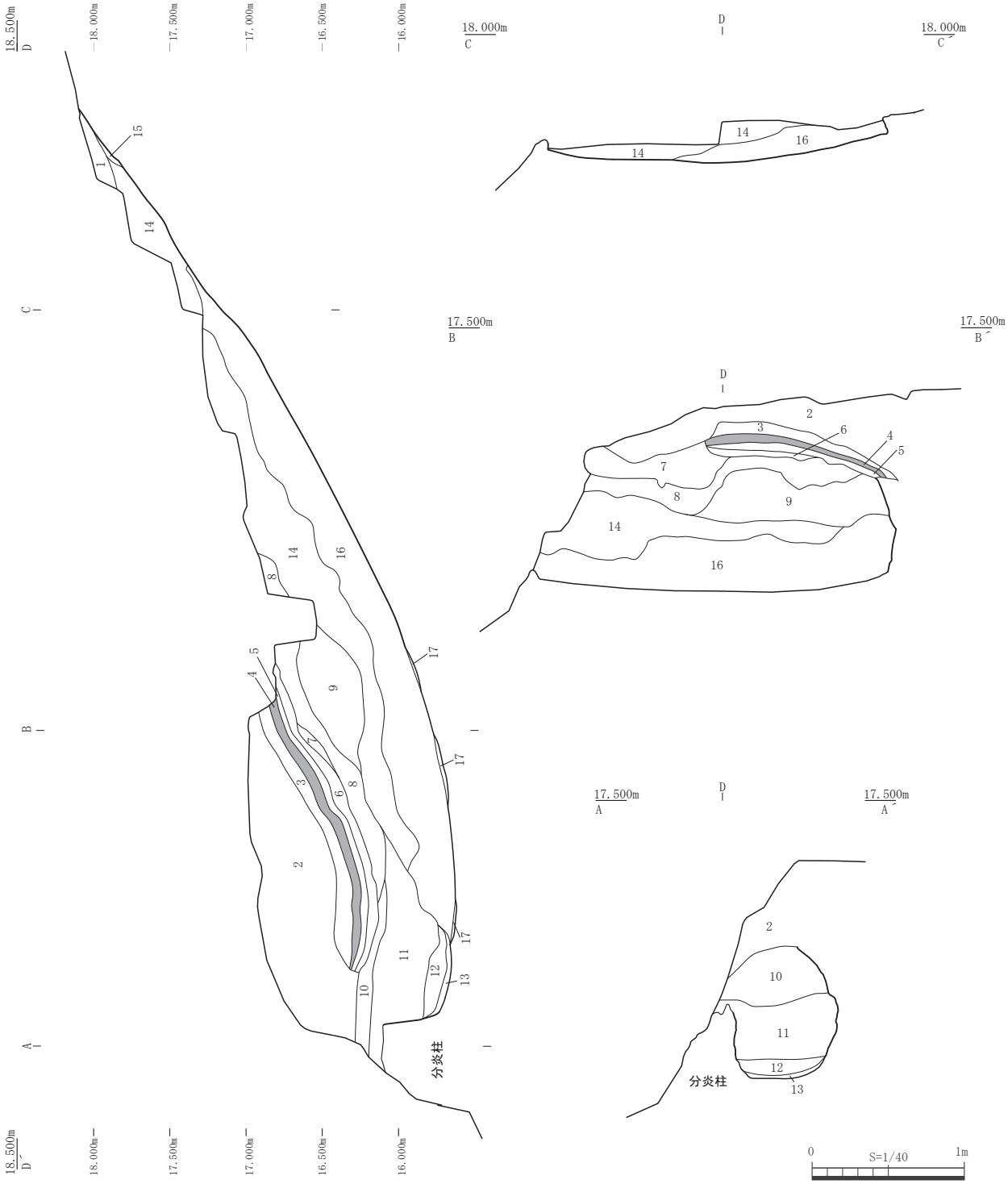


図 21　SY 03（1）

ＳＹ03　図21～23　巻頭図版４－１・３、６－１～３　図版１－３、５－１、９、10－１～３、16

Ｅ７・Ｅ８・Ｆ７グリッドに位置する。窯体は、焼成室と分炎柱・床面の一部が遺存し、煙道部・燃焼室・焚口・前庭部は、造成により削平され消失している。本窯は、主軸Ｎ－39°－Ｅ、南西で斜面に開口し、残存長は6.6ｍ、最大幅は2.4ｍを測る。標高は、窯本体の最上位で18.3ｍ、最下位で15.6ｍ、比高差は2.6ｍである。天井はほとんどが崩落し、また床面については、分炎柱より上方へ4.46ｍより上は遺存していたが、床面の焼き締まりは悪い。床面直上に遺物・焼台、その痕跡は残存していなかった。床面下の伏せ碗や、窯体に伴う排水施設なども見つからなかった。

遺物は、碗（61・62）・小皿（63）が出土した。

焼成室　残存長6.33ｍ、平面は、中心軸に対して左右にほぼ対称である。焼成室と燃焼室の境で幅0.94ｍ以上、そこから緩やかに広がり分炎柱から上方2.20ｍ地点で、最大幅2.41ｍを測る。さらに上方でもその幅は、ほぼ変わらず、煙道部側で残存している幅は2.22ｍを測る。床面のほとんどは流失し、残った床面も状態が悪く、明瞭な焼台痕も確認できなかった。底面の傾斜角は、分炎柱から上方2.4ｍ地点の最大幅まで26°で上昇、分炎柱より4.88ｍ地点から30°で急上昇し、35°で煙道部付近に到達する。両側壁には、窯体掘削時のものと考えられる掘削痕が認められた。

分炎孔から燃焼室下方にかけて、深さ0.04ｍの掘り込みを確認した。また、焼成室から分炎孔にかけて、底面から約20㎝壁面で、焼成時の床面と考えられる痕跡を確認した（図22、巻頭図版６－２）。焼成時、炎をしぼる必要がある分炎孔付近のため、製品を取り出す際には、この部分の床を掘削している可能性がある。埋土は、大部分が流入土と天井崩落土である。

断ち割り後は、被熱により赤褐色に変色した地山を確認した。床面下の伏せ碗や、窯体に伴う排水施設などは見つからなかった。

分炎柱・分炎孔　分炎柱は、基底部で長径0.45ｍ以上、短径0.33ｍ以上、残存している上端で長径0.31ｍ以上、短径0.28ｍ以上を測る。平面は、隅丸方形と推定する。断ち割りの結果、分炎柱は、地山を掘り残した構造で、スサ入り粘土の貼り付等の改修痕跡はなかった。窯壁には、窯を掘削する際にできる工具痕跡が見つかった。分炎孔は、造成による削平で消失しており、残存部分での計測で、北西側最大幅0.68ｍ、高さは推定で0.91ｍを測る。

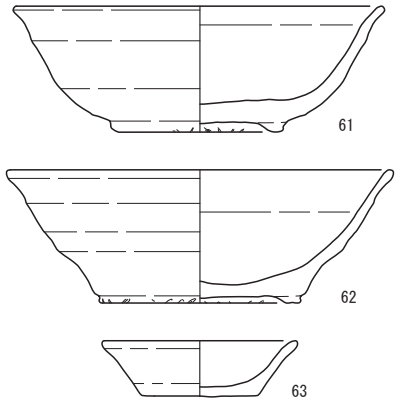
ＳＫ06　図24　図版10－４～５、16

Ｅ６グリッドに位置し、ＳＹ01灰原直下で検出した。北東部を攪乱に切られているが、残存部から平面は方形と推定した。長径は1.03ｍ、短径は0.74ｍ以上を測り、断面は北東側に段を持つ有段形で、検出面からの深さは最深で0.84ｍを測る。

埋土は、１・２層が中粒砂から細粒砂主体で、比較的粒径が粗く、ブロック土をほとんど含まない。これに対し、３～５層は細粒砂から極細粒砂と粒径が細く、ブロック土も多く含む。特に５層は、土質土色が地山に近似しており、築窯排土と考える。以上から、１・２層は流入による自然堆積、３～５層は、人為的な堆積と判断した。本土坑は、灰原２の除去後にＳＹ02の西側で検出されていることから、ＳＹ02に関連する土坑で、ＳＹ01構築時にその排土によって埋められた可能性がある。遺物は、常滑陶器と推定する甕の体部（64）が出土した。内面で、指圧痕が認められた。細片のため詳細な時期は不明である。

ＳＹ03 Ａ～Ｄ

１．5YR5/6　明赤褐色中粒砂含む極細粒砂　細礫を含み、浅橙色細粒砂ブロック・焼土を少量含む。しまり強。
２．5YR4/8　赤褐色シルト少量含む細粒砂
明褐色極細粒砂小～大ブロックを含み、橙色細粒砂小ブロックを含む。しまり強。
３．2.5YR5/8　明赤褐色（被熱により地山変色）
４．5YR6/8　橙色（被熱により地山変色）しまり強。
５．10YR8/3　浅黄橙色（被熱により地山変色）
６．7.5YR4/1　褐灰色(ガラス化)
７．2.5YR5/8　明赤褐色シルト少量含む細粒砂　天井崩落土。
８．7.5YR4/ 6 褐色中粒砂少量含む細粒砂
明褐色・明赤褐色細粒砂小ブロックを非常に多く含み、炭化物を少量含む。しまり弱。
９．7.5YR5/6　明褐色中粒砂少量含む細粒砂
明赤褐色極細粒砂大ブロック・褐色細粒砂ブロックを含み、細礫を少量含む。しまり弱。
10．7.5YR4/6　褐色シルト含む細粒砂
明褐色・にぶい黄褐色細粒砂小ブロックを含み、細礫を少量含む。空洞あり。しまり弱。
11．7.5YR5/8　明褐色シルト少量含む細粒砂
細礫を含む。ラミナあり。しまり弱。
12．8.75YR4/6 褐色中粒砂多く含む細粒砂
細礫・炭化物を少量含む。ラミナあり。しまり弱。
13．10YR4/3　灰黄褐色中粒砂含む細粒砂
明褐色細粒砂小ブロック・炭化物・焼土・焼台片を含む。
14．7.5YR5/6　明褐色シルト少量含む細粒砂
明赤褐色極細粒砂大ブロックを多く含み、細礫を少量含む。しまり弱。
15．5YR5/8　明赤褐色シルト含む中粒砂～細粒砂
明黄褐色シルト小ブロック・細礫・中礫・焼土・天井ブロックを含む。しまり弱。
16．5YR4/8　赤褐色シルト少量含む細粒砂
明褐色極細粒砂小～大ブロックを含み、橙色細粒砂小ブロックを含む。窯体天井ブロックを含む。しまりやや強。
17．8.75YR4/3 灰黄褐色中粒砂含む細粒砂
明褐色細粒砂小ブロック・炭化物を少量含む。



ＳＹ03 出土遺物

0　S=1/3　10cm

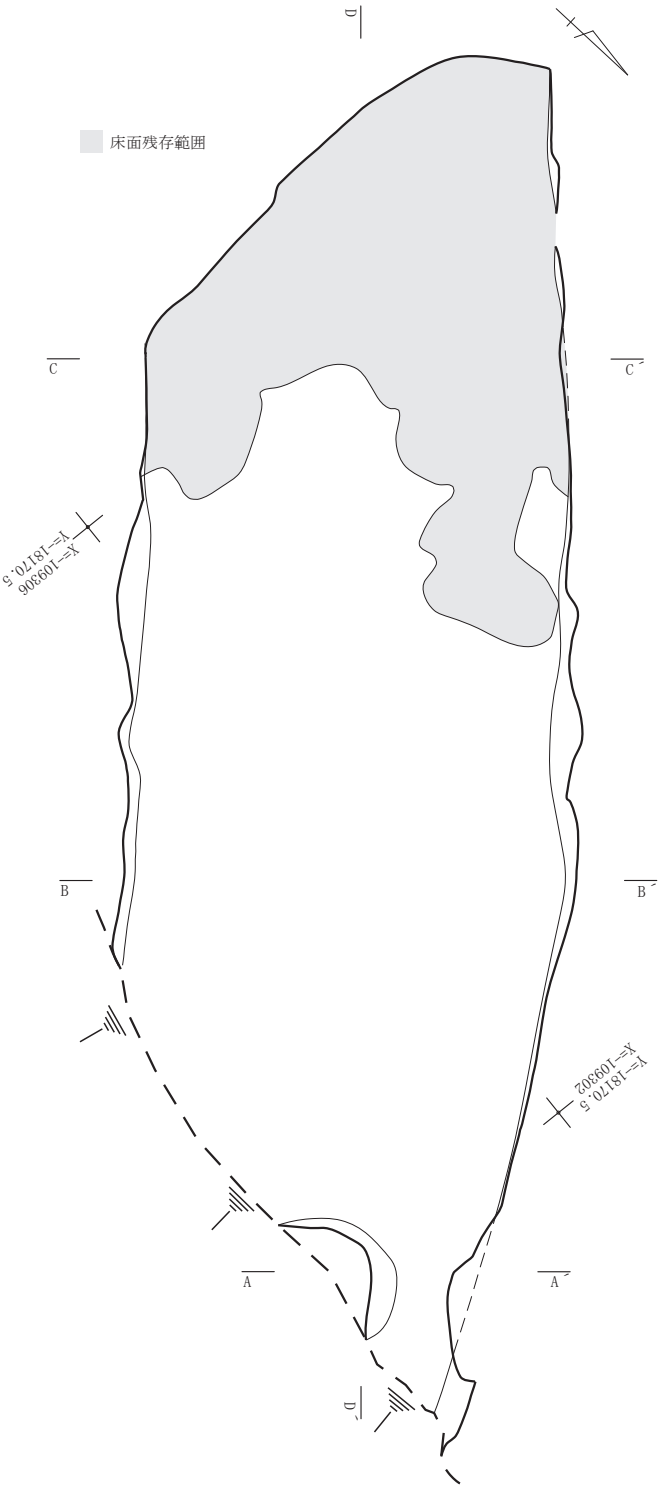
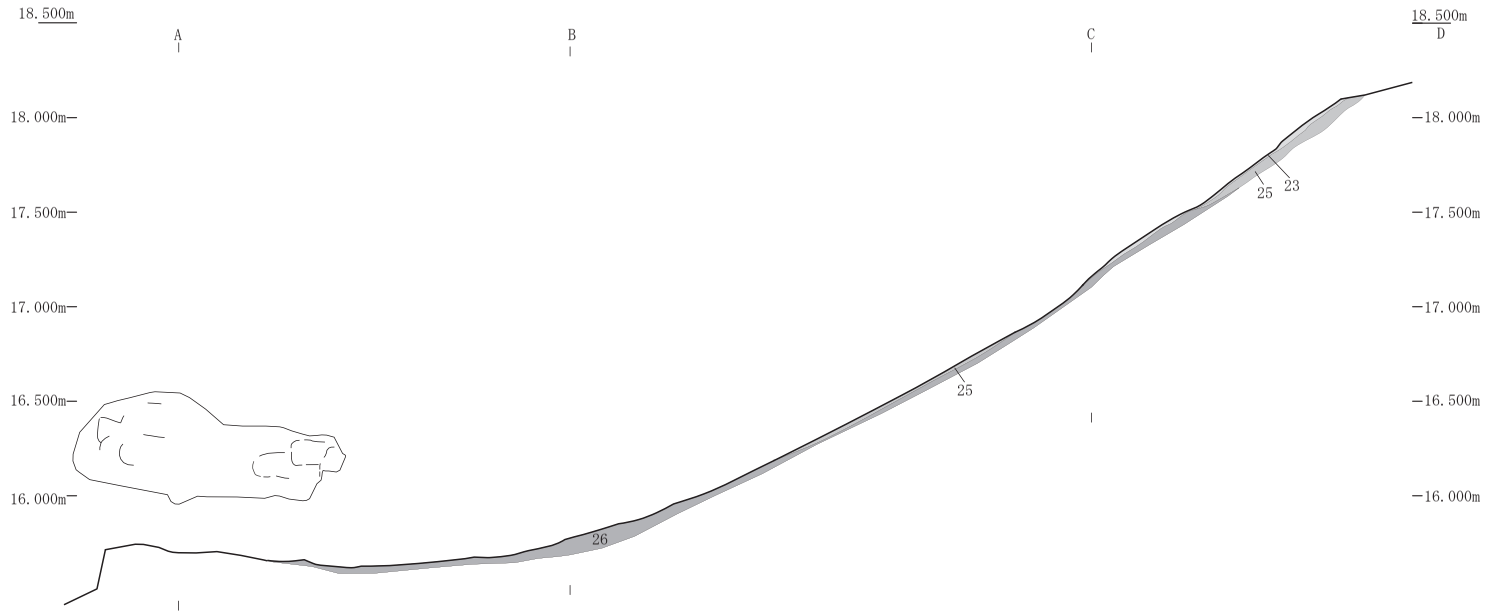
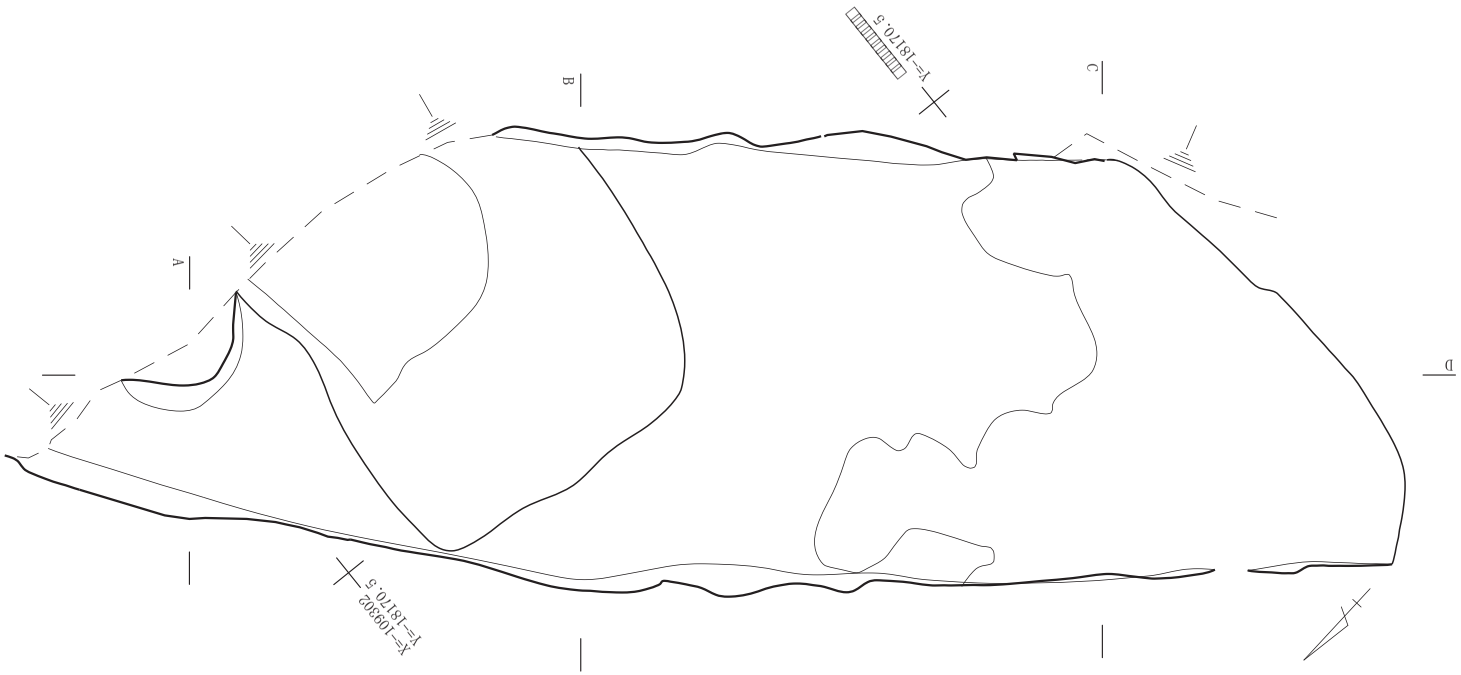
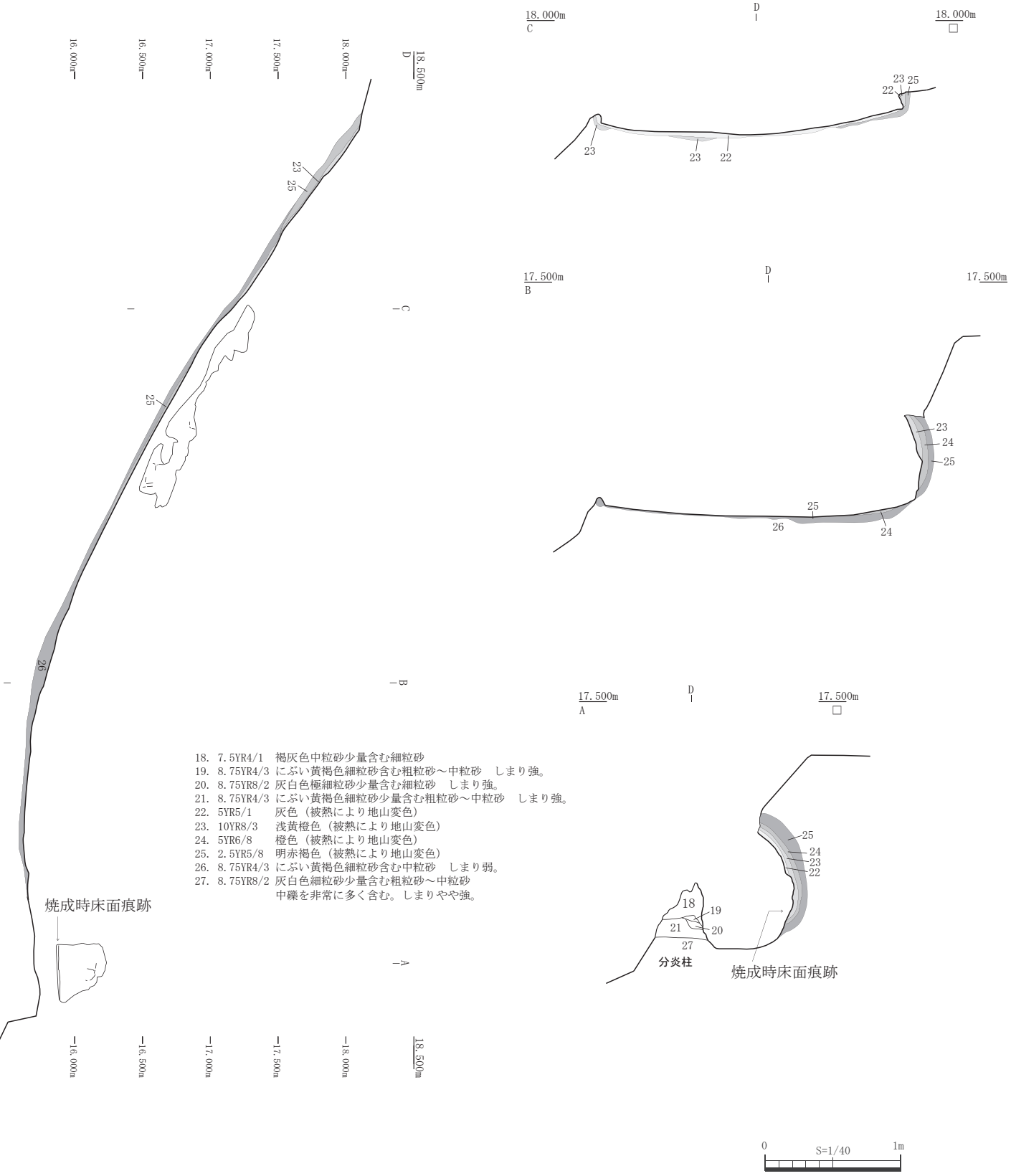


図 22　SY 03（2）


18.500m
A
B
C
D
18.000m
17.500m
17.000m
16.500m
16.000m
26
25
25
23


A
B
C
D
Y=-18170.5
X=-109302
Y=-18170.5



18. 7.5YR4/1　褐灰色中粒砂少量含む細粒砂
19. 8.75YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂含む粗粒砂～中粒砂　しまり強。
20. 8.75YR8/2 灰白色極細粒砂少量含む細粒砂　しまり強。
21. 8.75YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂少量含む粗粒砂～中粒砂　しまり強。
22. 5YR5/1　灰色（被熱により地山変色）
23. 10YR8/3　浅黄橙色（被熱により地山変色）
24. 5YR6/8　橙色（被熱により地山変色）
25. 2.5YR5/8　明赤褐色（被熱により地山変色）
26. 8.75YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂含む中粒砂　しまり弱。
27. 8.75YR8/2 灰白色細粒砂少量含む粗粒砂～中粒砂
中礫を非常に多く含む。しまりやや強。

図 23　SY 03（3）

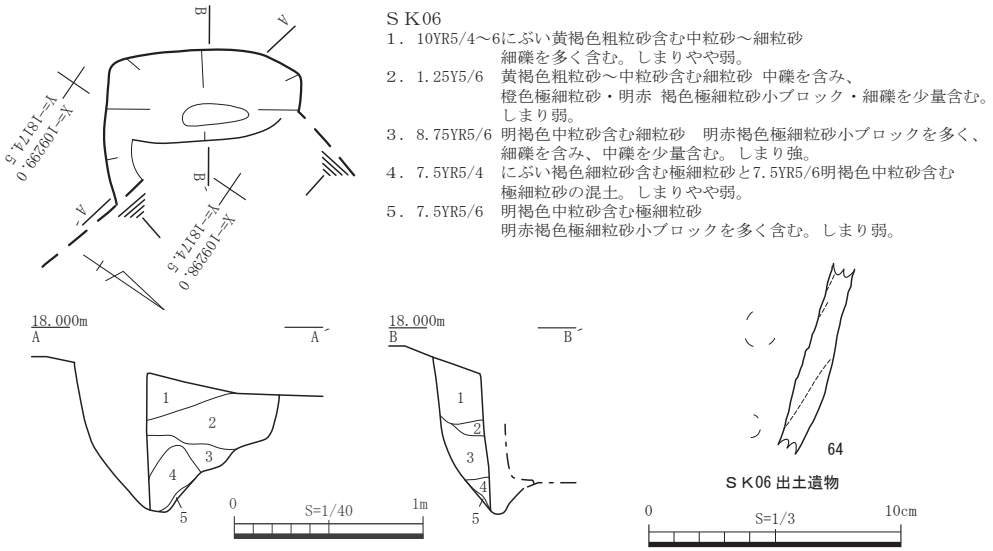


図 24　SK 06

３．灰原

図 25 ～ 30　巻頭図版６－４　図版１－２、11,12－１～５、16 ～ 19

灰原は、調査区の北半に堆積する。底面の傾斜角はＳＹ 01 前庭部から傾斜角 11°を測り、比較的緩やかに北東へ広がっている。土質・土色・含有物（遺物・炭化物・焼土・焼台）の量によって５層に分層し、層位順に上位から灰原１～５とした（表３）。遺物は、山茶碗の碗、小皿、片口鉢が出土している。

灰原１　Ｄ６グリッドに位置する。堆積する層の厚さは、0.13 ～ 0.23 ｍを測る。埋土は、明褐色極細粒砂が主体で、遺物・礫が多く含まれる。遺物は、碗（65 ～ 67）、小皿（68・69）、片口鉢の細片が出土している。

灰原２　Ｅ４・５、Ｆ４、Ｄ６に位置する。堆積する層の厚さは、0.05 ～ 0.16 ｍを測る。埋土は、褐色極細粒砂が主体で含有物が少ない。遺物は、碗（70 ～ 72）、小皿（73・74）が出土している。

灰原３　Ｆ４グリッドに位置する。層の厚さは、0.12 ～ 0.22 ｍを測る。埋土は、黒褐色細粒砂が主体で、焼台が多く含まれていた。遺物は、碗（75・76）が出土した。

灰原４　Ｅ４･Ｆ４･Ｅ５に位置する。層の厚さは､0.26 ～ 0.36 ｍを測る。ＳＹ 01 の中心軸より北側に広がり、Ｅ４・Ｆ４で特に厚く堆積している。埋土は、褐色細粒砂主体で、遺物・ブロック土・焼土・焼台片が含まれていた。遺物は、碗（77 ～ 99）、小皿（100 ～ 108）、焼台（109･110）が出土をしている。焼台には、融着を防ぐための、籾殻痕跡が明瞭に残っていた。

灰原５　Ｅ５･６､Ｄ６に堆積する。層の厚さは 0.05 ～ 0.16 ｍを測る。褐色細粒砂が主体で､礫が多く含み、遺物も多く出土した。遺物は、碗（111 ～ 115）、小皿（116 ～ 121）が出土している。

今回の調査で、窯体３基と灰原１つが見つかっているが、近・現代から続く宅地造成等のため消失している部分も多く、決して良好な状態で遺存していなかった。しかし、残存している灰原の範囲がＳＹ 01 前庭部から下方に広がっていること、ＳＹ 02・03 と灰原の位置関係やＳＹ 01 の北側に窯体が確認されていないことから、ＳＹ 01 に伴うものと判断した。また、灰原１～４と灰原５の間には、地山に近似した堆積が認められる（図 26　C-C´　２・７層、D-D´　４層）。これらは、遺物や炭化物等の操業中に排出され

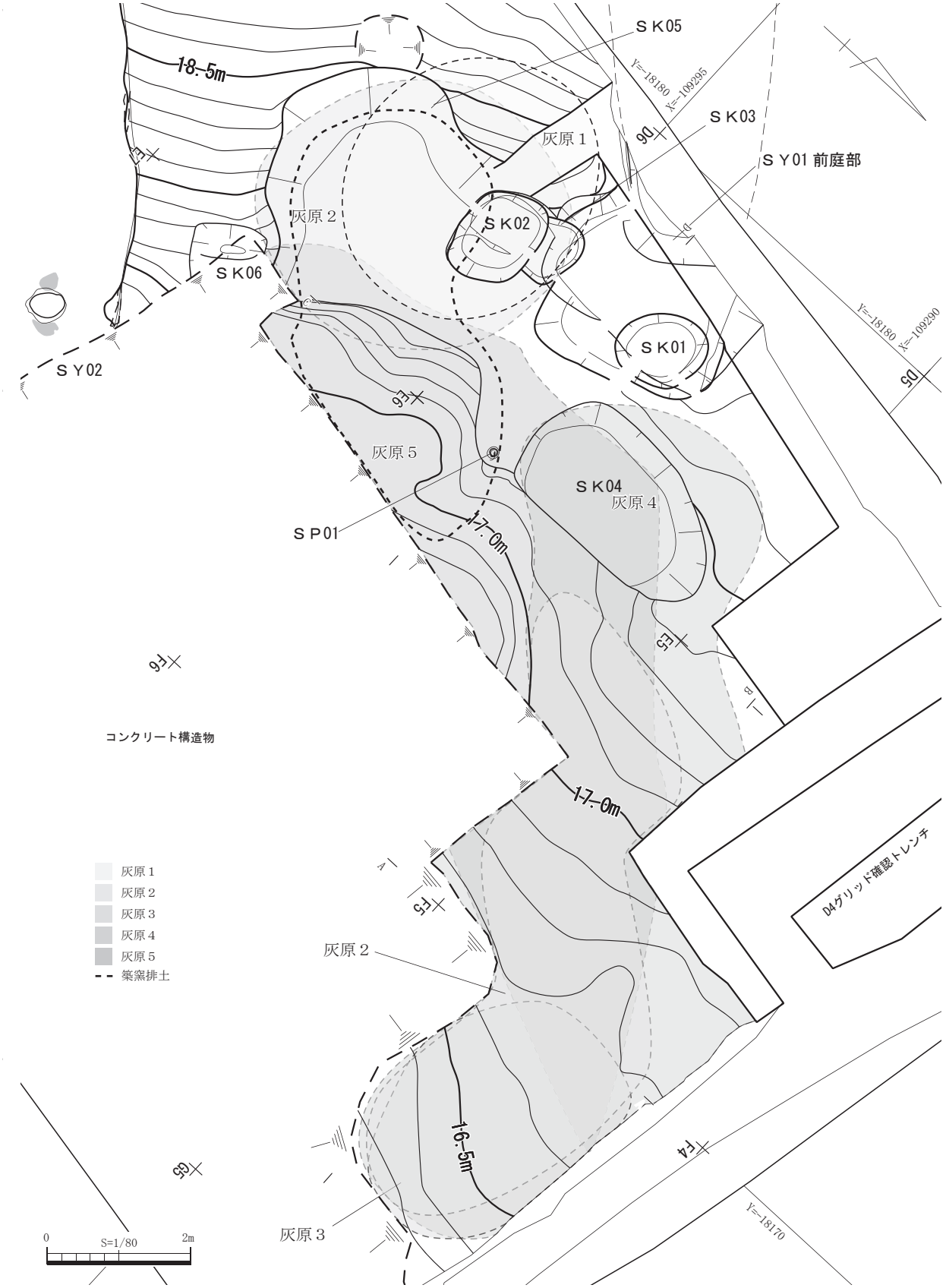
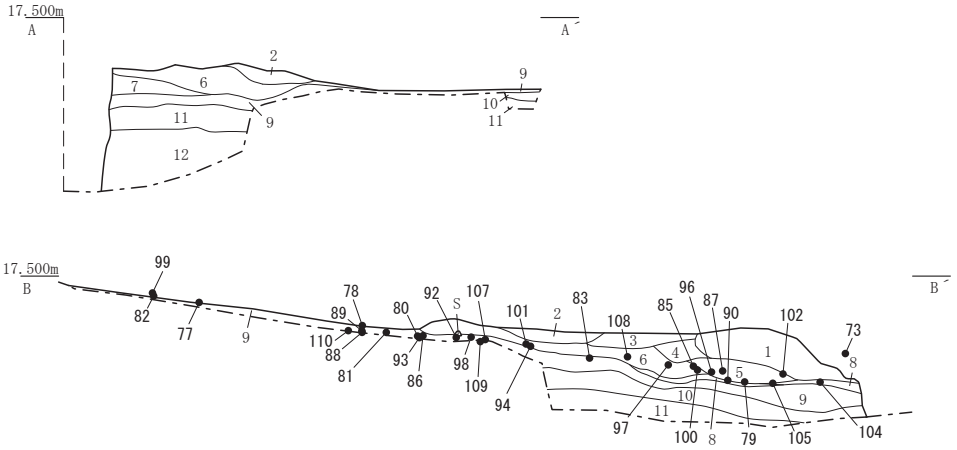
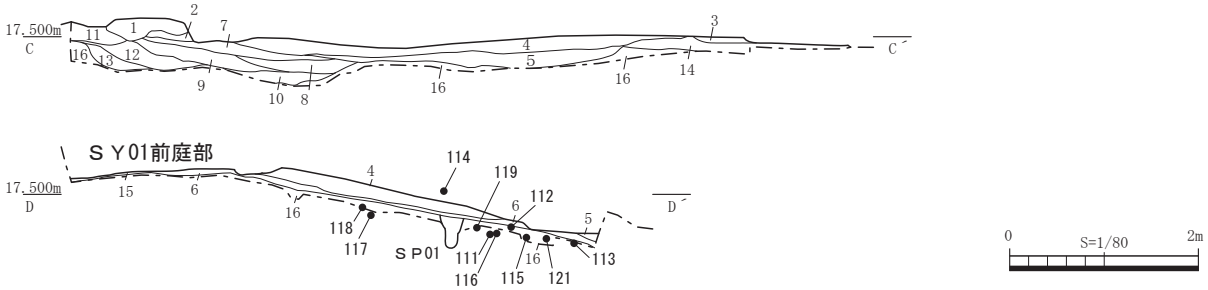

ＳＫ05
18.5m
Y=18180
X=109295
ＳＫ03
ＳＹ01 前庭部
灰原１
灰原２
ＳＫ02
ＳＫ06
Y=18180
X=109290
ＳＫ01
ＳＹ02
灰原５
ＳＫ04
灰原４
ＳＰ01
17.0m
コンクリート構造物
17.0m
D4グリッド確認トレンチ
灰原１
灰原２
灰原３
灰原４
灰原５
築窯排土
灰原２
16.5m
灰原３
Y=18170
0
S=1/80
2m

図 25　灰原（1）



灰原 A・B
1．7.5YR4/3～4にぶい黄褐色細粒砂含む中粒砂　明褐色細粒砂小ブロックを多く、明褐色細粒砂大ブロック・細礫・炭化物・遺物を含み、焼土を少量含む。しまり弱。
2．8.75YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂　細礫を多く、黄褐色細粒砂小ブロックを含み、炭化物・遺物・焼台片を少量含む。しまり弱。
3．7.5YR4/4　褐色粗粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　明褐色細粒砂ブロック・細礫・中礫・炭化物・焼土・焼台片・遺物を少量含む。しまり弱。
4．7.5YR4/4　褐色中粒砂含む細粒砂　焼台片を多く含み、明褐色細粒砂ブロック・細礫・中礫・焼土・遺物・炭化物を少量含む。しまり弱。
5．7.5YR2/1　黒色中粒砂多く含む細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・炭化物・焼土・遺物・焼台片を少量含む。しまりやや弱。
6．7.5YR4/4　褐色中粒砂含む細粒砂　明褐色細粒砂ブロック・中礫・焼土塊・遺物・焼台片を含み、細礫・炭化物を少量含む。しまり弱。
7．7.5YR4/3　褐色中粒砂含む細粒砂　中礫を多く含み、遺物・細礫・焼土・焼台片を少量含む。しまり弱。
8．5YR5～6/6　明赤褐色極細粒砂少量含む細粒砂　細礫を含む。築窯排土ｶ。
9．7.5YR5/6　明褐色細砂含む中礫層　しまりやや強。旧表土。
10．8.75YR5/6　褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　細礫含む。しまり強。地山。
11．7.5YR5/6　明褐色中粒砂少量含む細粒砂　細礫を含む。しまり強。地山。
12．5YR5/6　明赤褐色細粒砂～極細粒砂含むシルト　細礫中礫を含む。しまり強。地山。



灰原 C・D
1．7.5YR5/6　明褐色中粒砂～細粒砂多く含む極細粒砂　細礫を多く、遺物を含み、明赤褐色極細粒砂ブロック・灰黄褐色細粒砂ブロック・中礫・炭化物を少量含む。しまりやや強。
2．7.5YR5/6　明褐色細粒砂含む極細粒砂　明赤褐色極細粒砂小ブロック・灰白色細粒砂小ブロックを含み、細礫を少量含む。しまり強。
3．10YR4/3　灰黄褐色細粒砂多く含む中粒砂　細礫を多く含み、明褐色細粒砂小ブロック・黒色中粒砂ブロック・中礫を少量含む。しまり弱。
4．7.5YR6/6　橙色細粒砂多く含む粗粒砂～中粒砂　細礫を多く含み、明赤褐色細粒砂ブロック・中礫を含む。しまり強。
5．7.5YR5/6　明褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　橙色極細粒砂小ブロック・細礫を含む。しまり強。
6．10YR4/4　褐色中粒砂多く含む細粒砂～極細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫・炭化物・焼土を含み、中礫を少量含む。しまりやや弱。
7．7.5YR6/6　橙色細粒砂含む極細粒砂　明褐色細粒砂小ブロック・細礫・を含み、中礫・炭化物を少量含む。しまりやや強。
8．7.5YR5/6　明褐色中粒砂多く含む細粒砂　細礫を多く、灰黄褐色細粒砂ブロックを含み、炭化物・焼土・焼台片・遺物を少量含む。しまりやや弱。
9．8.75YR5/6　明褐色中粒砂多く含む細粒砂と5YR5/6明赤褐色中粒砂多く含む細粒砂の混土層　細礫を含み、黒褐色細粒砂ブロックを少量含む。しまりやや強。
10．7.5YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂　明黄褐色細粒砂ブロック・細礫を含み、明赤褐色中粒砂小ブロック・中礫・炭化物を少量含む。しまり弱。
11．7.5YR5/6　明褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂　細礫を含み、明赤褐色極細粒砂小ブロック・黒褐色細粒砂小ブロック・中礫を少量含む。
12．10YR6/6　明黄褐色細粒砂～極細粒砂含む中粒砂　明赤褐色極細粒砂小ブロック・細礫、黒褐色細粒砂ブロック・中礫を少量含む。しまりやや弱。
13．7.5YR5～6/6　明褐色細粒砂～極細粒砂含む中粒砂と5YR5/6明赤褐色細粒砂含む極細粒砂の混土層　細礫・炭化物を少量含む。
14．7.5YR5/6　明褐色細砂含む中礫層　しまりやや強。旧表土。
15．7.5YR5/6　明褐色中粒砂含む細粒砂　明赤褐色極細粒砂ブロックを含み、細礫を少量含む。しまり強。
16．8.75YR5/6　褐色中粒砂少量含む細粒砂～極細粒砂　細礫含む。しまり強。地山。

図 26　灰原（2）

表３　土層観察表

	SP名	層番	土色	土質（主体）	含有物						層厚（m）
					ブロック土	遺物	炭化物	焼土天井片	焼台片	礫	
灰原１	C-C´	1	明褐色	細粒砂～極細粒砂	少量	並	少量	－	－	多量	0.13～0.23m
灰原２	A-A´ B-B´	１～３	褐色	細粒砂～極細粒砂	少量	少量	少量	少量	少量	少量	0.05～0.16m
灰原３	B-B´	４・５	褐色～黒褐色	細粒砂	少量	少量	少量	少量	多量	少量	0.12～0.22m
灰原４	A-A´ B-B´	6	褐色	細粒砂	並	並	少量	並	並	並	0.26～0.36m
灰原５	A-A´ B-B´	8	褐色	細粒砂	少量	少量	－	少量	少量	多量	0.05～0.16m
	C-C´	8	明褐色	細粒砂	並	少量	少量	少量	少量	多量	0.05～0.14m
	D-D´	6	褐色	細粒砂～極細粒砂	並	－	並	並	－	少量	0.05～0.07m

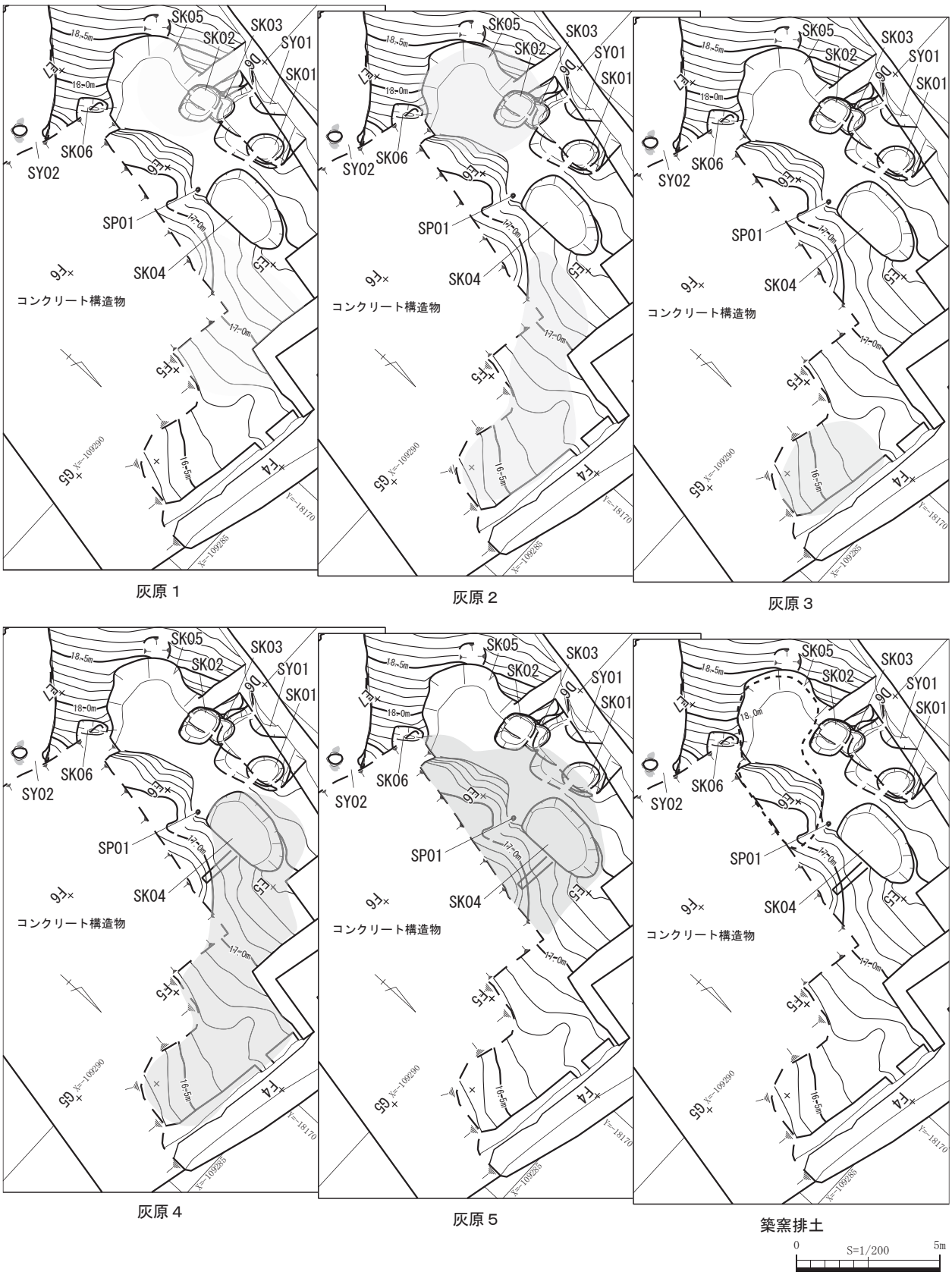


図 27　灰原・築窯排土範囲

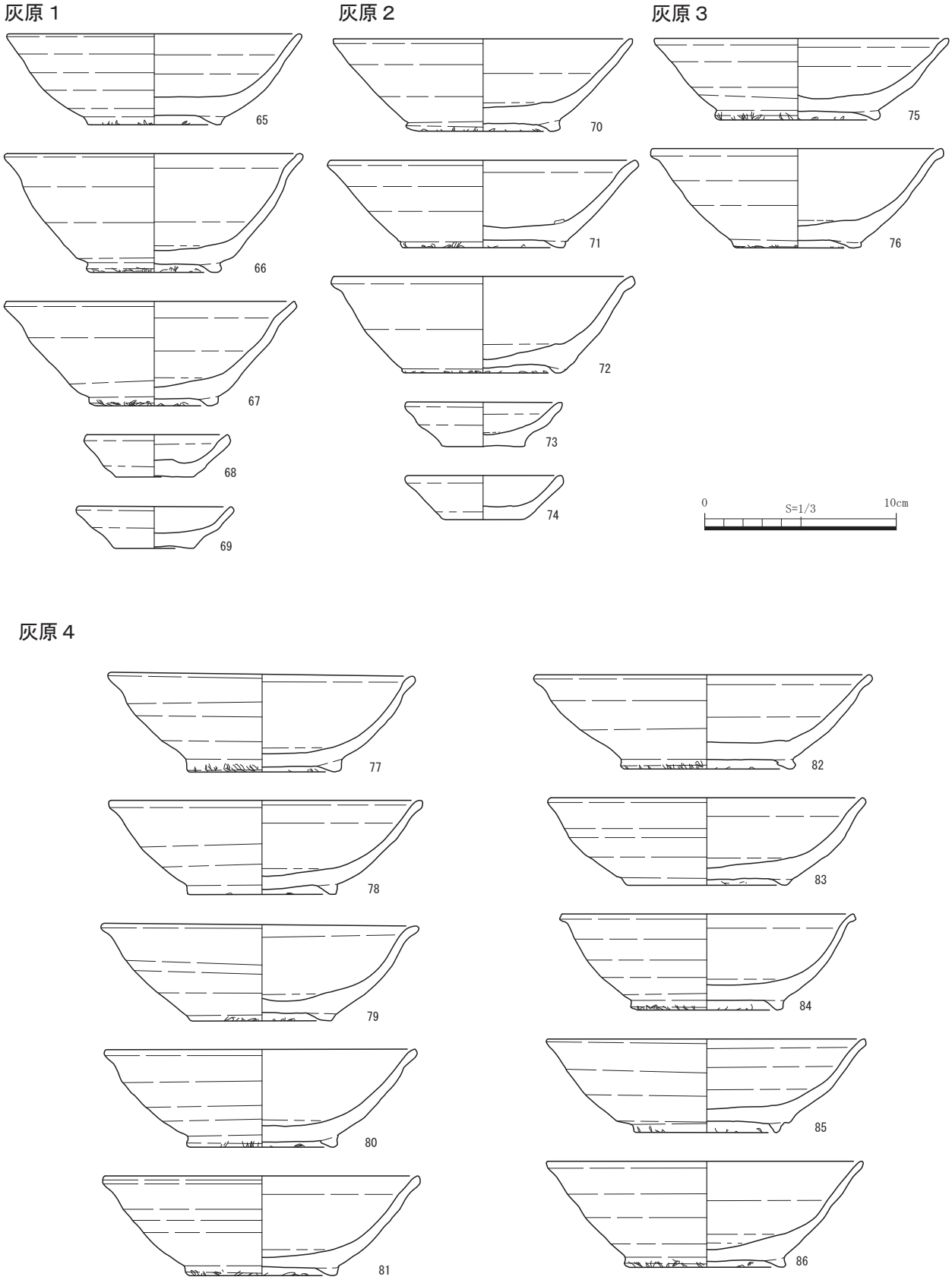

灰原１
65
66
67
68
69
灰原２
70
71
72
73
74
灰原３
75
76
0
S=1/3
10cm
灰原４
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86

図 28　灰原出土遺物（1）

灰原４

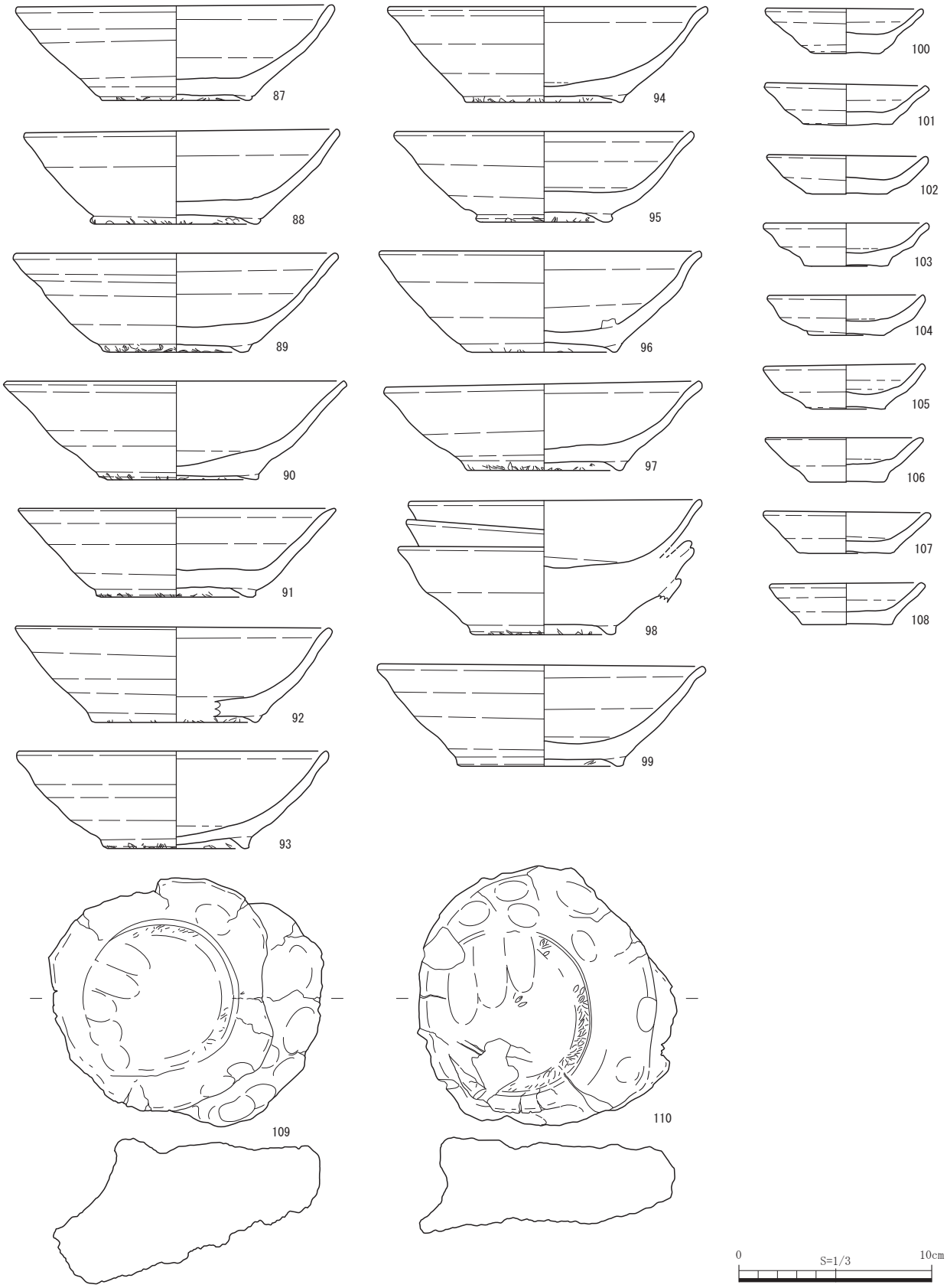


図 29　灰原出土遺物（2）

灰原５

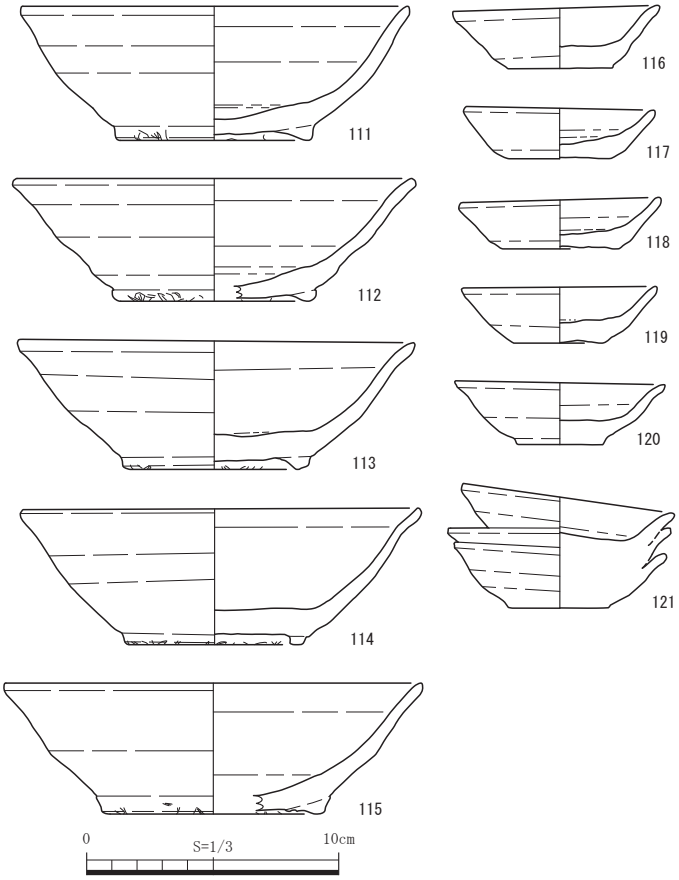


図 30　灰原出土遺物（3）

る物質を含まず、上下を灰層に挟まれることから、窯の改築や修理に伴う排土の可能性がある。よって、ＳＹ 01 は最低でも２回の操業が考えられる。

４．遺構外出土遺物

図 31　図版 19

調査区では、遺構外の遺物も多く見つかっている。122 は、表土からの遺物で、無台の片口鉢である。底部の内面と外面には、板目状圧痕・籾殻痕が明瞭に残っていた。ＳＫ 05 出土の片口鉢同様、無台で平底の器種と考える。123 ～ 125 は、排土からの遺物で、123・124 は、山茶碗の小皿。125 は、大正以降瀬戸美濃陶器の徳利で、体部には鉄釉で「大府」「舎吉野□（屋ヵ）」「一四十四」と描かれている。

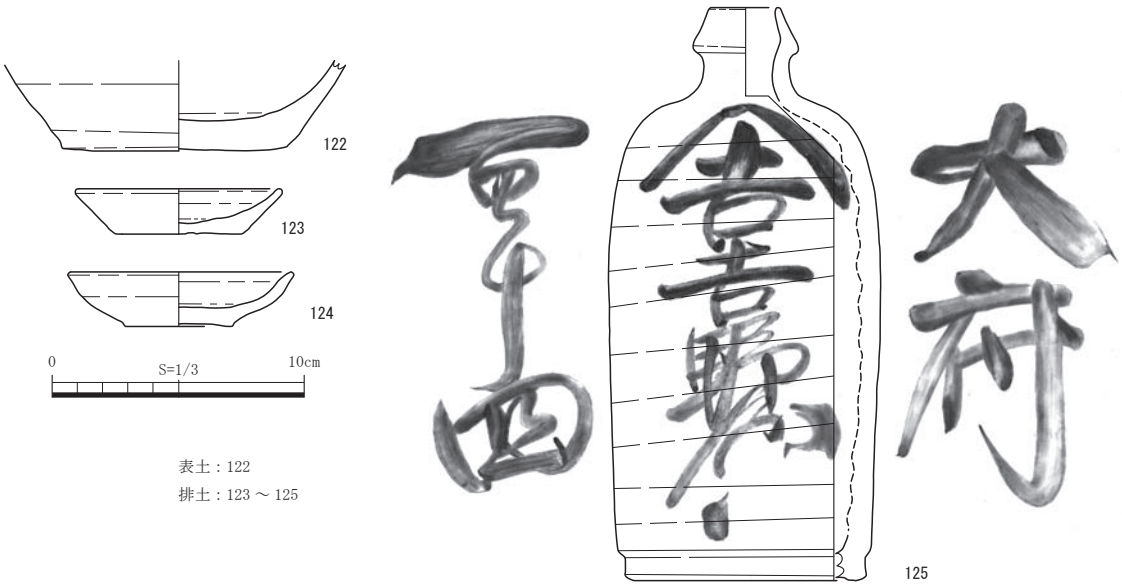


図 31　遺構外出土遺物

第４章　川池西古窯出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

愛知県大府市の川池西古窯から出土した炭化材の樹種同定を行った。

２．試料と方法

試料は、12 世紀後葉から 13 世紀初頭と考えられる山茶碗の窯跡ＳＹ 01 焚口上層から３点、焚口下層から２点、灰原から１点、焚口上層に対応するＳＫ 02 から２点、焚口下層に対応するＳＫ 03 から２点、ほぼ同時期と考えられる山茶碗の窯跡であるＳＹ 02 から２点の、計 12 点の出土炭化材である。

残存率の良いものについて、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行った。復元直径は、１cm 刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行った。

３．結果

同定の結果、針葉樹であるマツ属複維管束亜属、広葉樹であるコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、単子葉であるタケ亜科の、計３分類群がみられた。マツ属複維管束亜属が最も多く８点で、クヌギ節が３点、タケ亜科は１点であった。

炭化材の復元直径等の計測では、No.0014 のクヌギ節は残存半径 1.1 cm、残存年輪数４年、復元直径 2.0 cm、No.0015 のクヌギ節は残存半径 1.0 cm、残存年輪数５年、復元直径 3.0 cm、No.0019 のマツ属複維管束亜属は残存半径 0.8 cm、残存年輪数３年、復元直径 4.0 cmであった。樹種同定結果を表４に、一覧を表５に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　図 32　1a-1c(No.0020)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状

表４　川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果（1）

時期	12世紀後葉～13世紀初頭						合計
遺構	ＳＹ01			ＳＫ02	ＳＫ03	ＳＹ02	
樹種　層位	焚口上層	焚口下層	灰原	焚口上層	焚口下層	焼成室床	
マツ属複維管束亜属		2	1	2	2	1	8
コナラ属クヌギ節	3						3
タケ亜科						1	1
同定不可							0
合計	3	2	1	2	2	2	12

表５ 川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果（2）

No.	出土遺構	層位	種類	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	復元直径(cm)	時期
0014	SY01焚口	上層	燃料材	コナラ属クヌギ節	1.1	4	2.0	12世紀後葉～13世紀初頭
0015	SY01焚口	上層	燃料材	コナラ属クヌギ節	1.0	5	3.0	12世紀後葉～13世紀初頭
0016	SY01焚口	上層	燃料材	コナラ属クヌギ節	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
0017	SY01焚口	下層	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
0018	SY01焚口	下層	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
0019	SK02	（上層対応）	燃料材	マツ属複維管束亜属	0.8	3	4.0	12世紀後葉～13世紀初頭
0020	SK02	（上層対応）	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
0021	SK03	（下層対応）	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
0022	SK03	（下層対応）	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
0023	SY01灰原	灰層４	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
1157	SY02	－	燃料材	マツ属複維管束亜属	－	－	－	12世紀後葉～13世紀初頭
1198	SY02	－	燃料材	タケ亜科	0.05	－	0.1	12世紀後葉～13世紀初頭

となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(2) コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図 32　2a-2c(No.0015)、3a(No.0016)

年輪のはじめに大型の道管が　１～３　列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(3) タケ亜科　Subfam. Bambusoideae　図 32　4a(No.1198)

向軸側の原生木部、その左右の２個の後生木部、背軸側の篩部の３つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間で、日本には 12 属ある。

4．考察

12 世紀後葉から 13 世紀初頭に操業されていたと考えられるＳＹ 01 では、焚口上層でクヌギ節が、焚口上層に相当するＳＫ 02 でマツ属複維管束亜属がみられた。また、焚口下層および焚口下層に相当するＳＫ 03、灰原では、マツ属複維管束亜属のみがみられた。ほぼ同じ時期に操業されていたと考えられるＳＹ 02 では、マツ属複維管束亜属とタケ亜科が産出した。タケ亜科は直径 1 ㎜程度の小径で、燃料材の焚き付けなどに利用されていた可能性がある。

これらの樹種を燃料材としてみると、マツ属複維管束亜属は油分が多くて高火力で燃焼するという材質を持ち、クヌギ節は高火力で燃焼はしないが、長時間燃焼し続けるという材質を持つ（伊東ほか 2011）。共に燃料材に適した樹種であり、材質を考慮した選択利用がなされていたと考えられる。

大府市域では、12 ～ 13 世紀代の山茶碗窯跡の燃料材の樹種同定が多く行われている。全般的にはマツ属複維管束亜属やクリ、クヌギ節、コナラ節が主体であるが、深廻間Ａ古窯跡群やガンジ山Ａ古窯跡群ではクヌギ節やコナラ節が多く、羽根山古窯跡群や砂原古窯跡、森岡第１号窯跡群、深廻間Ｂ古窯跡群ではマツ属複維管束亜属が多い（黒沼 2014）。今回のＳＹ 01 の燃料材も、周辺の山茶碗窯跡と同様の傾向を示している。

大府市からはやや離れるが、瀬戸市の上品野蟹川遺跡の　中世（鎌倉・室町期）の層に対して行われた花粉分析では、周辺に針葉樹のマツ属複維管束亜属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、広葉樹のクヌギ節とコナラ節を含めたコナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属を主体とした森林が広がっていたと推測されている（新山・鈴木 1998）。大府市域でも中世には同様の植生が広がっていた可能性があり、燃料材は窯跡周辺の植生から燃料材に適した樹種が選択的に伐採されていた可能性がある。

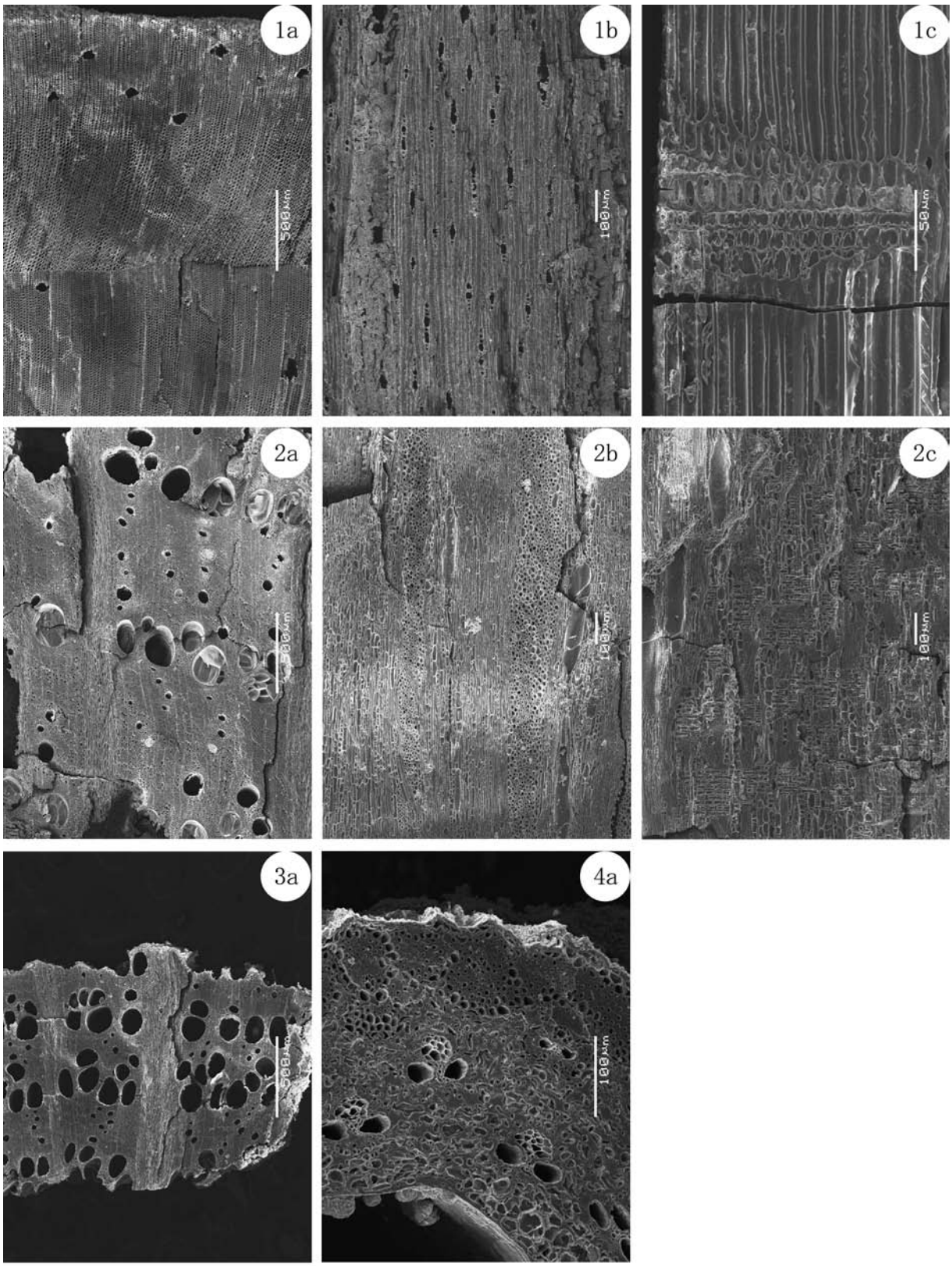
なおＳＹ 01 では、前半の操業時の堆積層である焚口下層ではマツ属複維管束亜属のみがみられ、後半の操業時の堆積層である焚口上層ではクヌギ節とマツ属複維管束亜属がみられた。対象試料数が少ないため確実ではないが、操業当初にはマツ属複維管束亜属が選択伐採され、操業後半には窯跡周辺のマツ属複維管束亜属が枯渇してきて、代替としてクヌギ節が利用され始めた可能性がある。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』238p，海青社

黒沼保子 2014「市内および周辺地域の古窯の燃料材に関する考察」『瀬戸Ｃ古窯群・久分古窯群』134-137 p，大府市教育委員会

新山雅広・鈴木 茂 1998「上品野蟹川遺跡の自然科学分析」『上品野蟹川遺跡』82-98 p，瀬戸市埋蔵文化財センター



1a-1c. マツ属複維管束亜属(No. 0020)、2a-2c. コナラ属クヌギ節(No. 0015)、3a. コナラ属クヌギ節(No. 0016)、4a. タケ亜科(No. 1198)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

図 32 川池西古窯出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第５章　総括

第１節 遺物分類

１．概要

今回の調査で出土した遺物は、遺構内・灰原 77 箱、遺構外 79 箱で、総コンテナ数 156 箱を数える。器種は、山茶碗の碗・小皿・片口鉢がその大半を占める。碗を蓋に転用して使用した可能性があるものについては、根拠性に乏しいため、碗とした。その他は、ＳＫ 06 から出土の常滑陶器甕と、排土から出土した近代の瀬戸美濃陶器徳利が見つかっている。

これら出土遺物中、山茶碗類の集計方法については、底部 6/12 以上を１個体とする基準を設定し、個体数の算出を行った。融着遺物は、最下部の遺物をカウントし、片口鉢は、接合後の個体数である。その他の遺物については、残存率に関係なく、器種・種別が判断できるものは１個体としてカウントをした。

その結果、碗 1,144 点、小皿 162 点、片口鉢６点、常滑陶器１点、瀬戸美濃陶器１点、総数は 1,314 点で、山茶碗類は、全体の 99.5%を占める（表６）。

表6　遺構別遺物集計表

出土地点	山茶碗	小皿	片口鉢	常滑陶器	瀬戸美濃陶器	遺構別合計
ＳＹ01前庭部	12	4	0	0	0	16
ＳＹ02	165	12	0	0	0	177
ＳＹ03	21	0	0	0	0	21
ＳＫ01	2	1	0	0	0	3
ＳＫ02	3	4	0	0	0	7
ＳＫ03	1	0	0	0	0	1
ＳＫ04	91	3	0	0	0	94
ＳＫ05	354	67	5	0	0	426
ＳＫ06	0	1	0	1	0	1
灰原１	56	8	0	0	0	65
灰原２	24	6	0	0	0	30
灰原３	60	3	0	0	0	63
灰原４	307	43	0	0	0	350
灰原５	18	8	0	0	0	26
遺構外	30	2	1	0	1	34
器種別合計	1,144	162	6	1	1	1,314

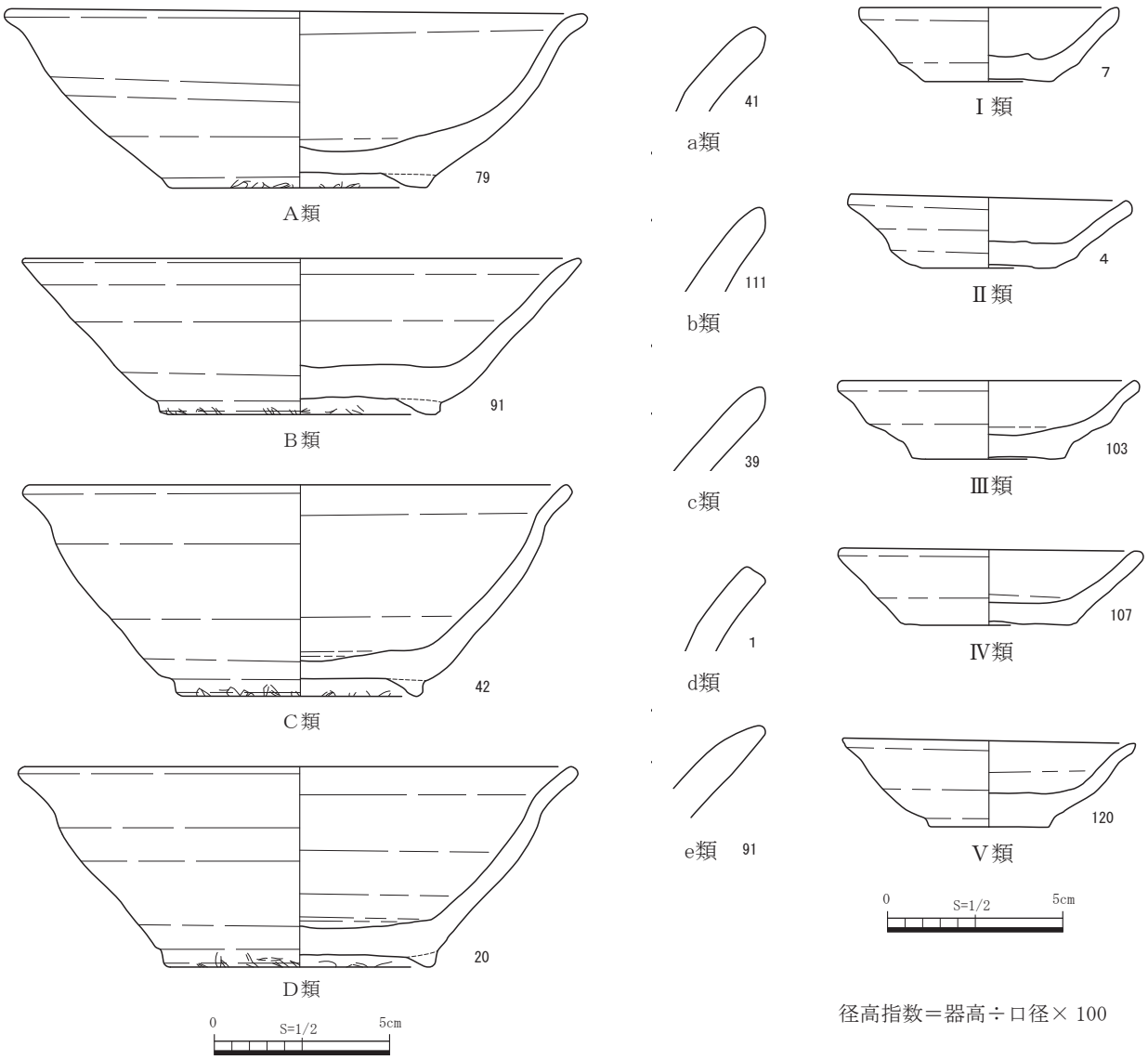
２．分類

出土した山茶碗類の分類は、底部が 6/12 以上残存し、かつ口縁部が 1/12 以上残存しているものを抽出し、口縁端部から体部の断面形状を主とし、整形技法や調整を参考に分類を行った。法量・径高指数（器高÷口径× 100）は、平均値を算出した。

口縁端部　口縁端部は、碗・小皿共通ｄ～ｅとし分類を行った。ａ類は、先端が丸みを帯びているもの、ｂ類は、端部内面と外面の交点が 90 度以下で、外面にやや面をもつ。ｃ類は、端部内面と外面の交点が 90 度以下で、外面にやや膨らみをもつ。ｄ類は、端部内面と外面の交点がほぼ 90 度で、形状が方形状になっている。ｅ類は、先端が細くやや尖る。

碗　碗は、Ａ～Ｄ類に分類した。

Ａ類は、平均で口径 16.9 ㎝、器高 5.0 ㎝、底径 7.4 ㎝前後、径高指数 31.3 である。体部は丸みをもって立ち上がり、器壁は比較的薄い。口縁部と端部に施されるナデによってＳ字状に外反し、内面底部と体



径高指数＝器高÷口径× 100

図 33 分類（1）

表7 分類別平均法量と形状（碗・小皿）

器種	法量（cm）			形状
	口径	器高	底径	
椀A	16.9	5.0	7.4	丸みをもって立ち上がる 体部口縁の境に強いナデ S字状に外反
椀B	15.8	4.9	7.5	直線的に立ち上がる 逆ハの字状に開く
椀C	15.5	5.4	7.1	直線的に立ち上がる 体部口縁の境に強いナデ 口縁逆ハの字状に開く
椀D	15.5	5.5	7.4	括れ・直線的に立ち上がる 体部と口縁の境にナデ 口縁逆ハの字状に開く

器種	法量（cm）			形状
	口径	器高	底径	
小皿Ⅰ	7.4	2.1	3.9	下部にナデ 体部直線的 逆ハの字状に開く
小皿Ⅱ	7.7	2.1	3.8	下部に丸み 上部は緩やかに外反
小皿Ⅲ	8.0	2.2	3.9	下部にナデ強 上部にややナデ強
小皿Ⅳ	7.8	2.2	3.7	直線的に立ち上がる 逆ハの字状に開く
小皿Ⅴ	8.3	2.6	4.0	下部丸み 緩やかなS字状で外反

※法量は、平均値（復元値含む）

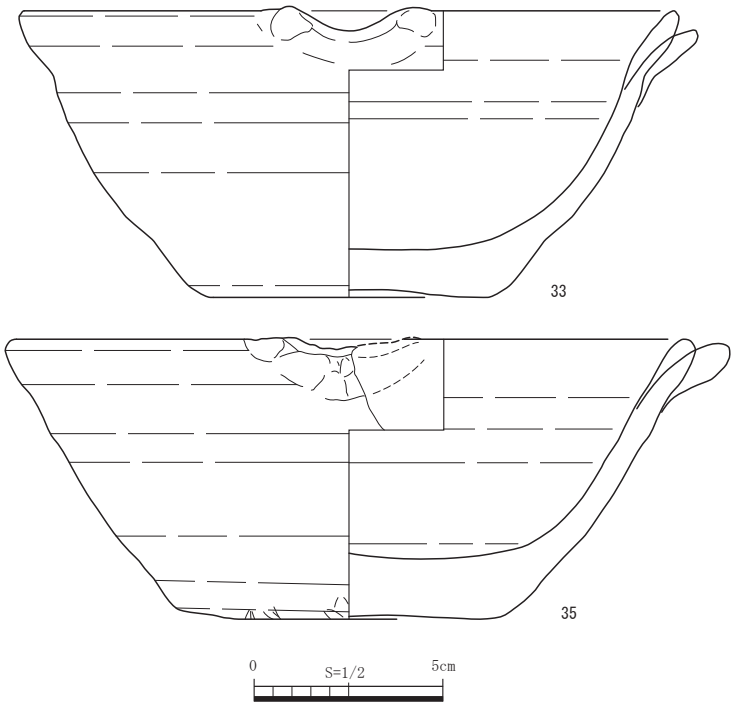


図 34　分類（2）

表8　分類別平均法量と形状（片口鉢）

器種	法量（cm）			形状
	口径	器高	底径	
片口鉢1	16.9	5.0	7.4	丸みをもって立ち上がる 体部口縁の境に強いナデ 高台なし
片口鉢2	15.8	4.9	7.5	直線的に立ち上がる 体部口縁の境に弱いいナデ 高台なし

※法量は、平均値（復元値含む）

部の境は緩やかな曲線で整形されている。口縁端部は丸い場合が多く、ａ・ｅ類で約６割を占める。高台は潰れた逆三角形で、畳付きの籾殻痕は明瞭である。底部外面に、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

Ｂ類は、平均で口径 15.8 ㎝、器高 4.9 ㎝、底径 7.5 ㎝前後、径高指数は、29.9 である。体部から口縁にかけて直線的に立ち上がり、器壁は比較的薄く、逆ハの字状に開く。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端がやや尖る傾向にある。内面底部と体部の境は、若干角張る。高台は潰れた逆三角形で、畳付きの籾殻痕は、明瞭である。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

Ｃ類は、平均で口径 15.5 ㎝、器高 5.4 ㎝、底径 7.1 ㎝前後、径高指数は、34.6 である。体部は直線的に立ち上がり、器壁は比較的薄く、口縁部と口縁端部の間にナデが入る。それにより、体部と口縁部との境が凹み、そこから口縁端部までは直線的でかつ逆ハの字状に広がる。口縁端部は、端部内面と外面の交点がほぼ 90 度で、先端の形状がやや方形状の場合が多く、ｃ・ｄ類で約７割を占める。内面底部と体部の境はナデによりわずかに凹み、中央は浅く窪む。高台は、潰れた逆三角形で、畳付きの籾殻痕は明瞭である。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

Ｄ類は、平均で口径 15.4 ㎝、器高 5.5 ㎝、底径 7.4 ㎝前後で、径高指数は、36.6 である。体部の下方は括れ、体部途中に丸みをもつ。器壁は比較的薄く、口縁部から端部にはナデが施され、直線的でかつ逆ハの字状に広がる。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、内面と外面の交点が 90 度以下で、外側にやや膨らみをもっている場合が多い傾向にあり、ｄ・ｅ類で約５割を占める。内面底部と体部の境はナデによりわずかに凹み、中央は浅く窪む。高台は潰れた逆三角形で、畳付きの籾殻痕は明瞭である。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

小皿　小皿は、Ⅰ～Ⅴ類に分類をした。

Ⅰ類は、平均で口径 7.4 ㎝、器高 2.1 ㎝、底径 3.9 ㎝前後で、径高指数 28.4 である。下部にナデが施され、直線的に逆ハの字に開いている。内面底部と体部の境は、ナデによって凹み、口縁端部は、内面と外面の

交点が 90 度以下で、外面にやや面をもっている場合が多く、ｂ・ｃ類で約８割を占める。。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に指圧痕が残る。

Ⅱ類は、平均で口径 7.7 ㎝、器高 2.1 ㎝、底径 3.8 ㎝前後で、径高指数は、27.0 である。下方に丸みがあり、上方は緩やかに外反する。内面底部と体部の境は、ナデによってわずかに凹む。口縁端部は、内面と外面の交点が 90 度以下の場合が多く、b・c 類で約８割を占める。先端は、やや丸みを帯びている。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に指圧痕が残る。

Ⅲ類は、平均で口径 8.0 ㎝、器高 2.2 ㎝、底径 3.9 ㎝前後、径高指数は、27.0 である。底部が下方向に突出している。また、体部外面の上方と下方には、やや強めのナデが施され、その部分が凹む。内面底部と体部の境は、緩やかな曲線で形成され、内面底部はやや窪む。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端がやや丸みを帯びる傾向にある。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に弱い指圧痕が残る。

Ⅳ類は、平均で口径 7.8 ㎝、器高 2.2 ㎝、底径 3.7 ㎝前後、径高指数は、28.3 である。直線的に立ち上がり、逆ハの字状に開く。内面底部と体部の境は角張り、内面底部は平坦である。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端が丸みを帯びる傾向にある。底部外面には糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央には指圧痕が残る。

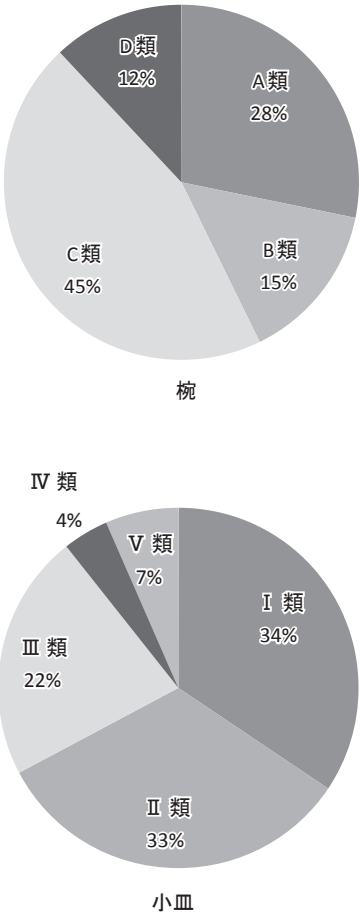


図 35 分類別比率

Ⅴ類は、平均で口径 8.0 ㎝、器高 2.6 ㎝、底径 4.0 ㎝前後で、径高指数は、27.6 である。底部が下方向に突出している。体部下方に丸みをもち、緩やかなＳ字状で外反する。内面底部と体部の境は、緩やかな曲線で形成され、内面底部はやや窪む。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端がやや先に向かい細くなる傾向にある。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に指圧痕が残る。

片口鉢　片口鉢は、極少量しか出土していないが、１・２類に分類した。

１類は、体部下方にナデが入り、丸みを帯ながら、口縁にやや強めのナデが入る。器壁・底部は、２類と比べて若干薄い。外面底部には、回転糸切り痕・板目状圧痕、内外面底部に明瞭に籾殻痕跡が残り、無台で平底状である。

２類は体部が直線的に立上がり、口縁部には弱いナデが入る。器壁･底部は、１類と比べて肥厚である。外面底部には、回転糸切り痕・板目状圧痕、内外面底部に明瞭に籾殻痕跡が残り、無台で平底状である。

今回出土した無台片口鉢は、類例が少なく、猿投窯のＮＮ 302 号窯跡から類似品が出土している。

３．遺構・層位別分類

出土した遺物を遺構別（灰原は１～５）で分類を行った。（図 42）

ＳＹ 01 の前庭部から出土した碗・小皿は、計８点である。分類別では、碗Ｃ類３点、Ｄ類１点、小皿

形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	29.6～33.3	31.3
碗Ｂ類	29.1～31.3	29.9
碗Ｃ類	28.0～40.5	34.6
碗Ｄ類	31.7～39.3	36.6

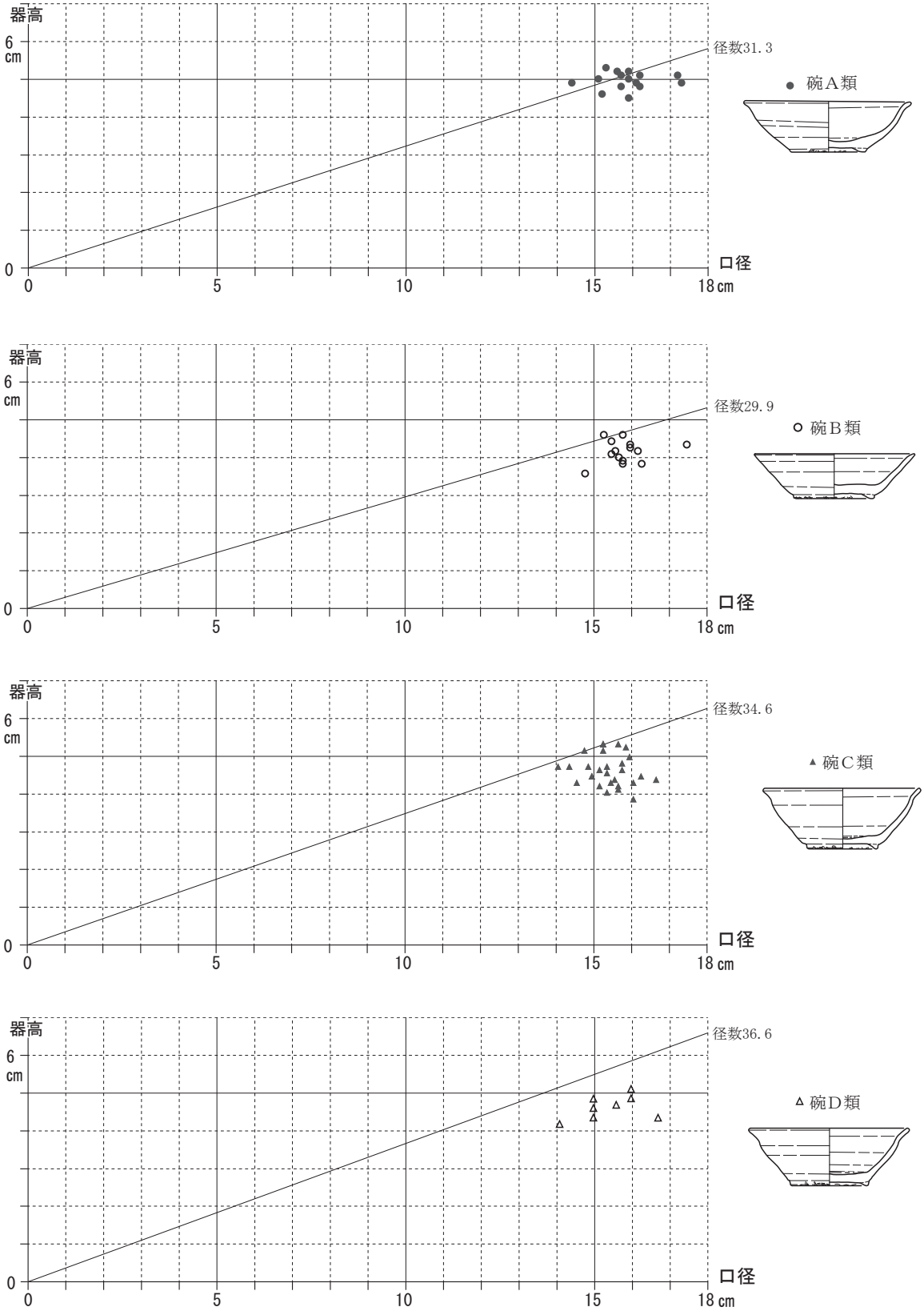


図 36　径高指数グラフ（1）

形態分類	径高指数	平均値
小皿Ⅰ類	24.1～32.4	28.4
小皿Ⅱ類	25.0～30.8	27.0
小皿Ⅲ類	22.7～29.9	27.0
小皿Ⅳ類	26.5～29.1	28.3
小皿Ⅴ類	24.4～29.8	27.6

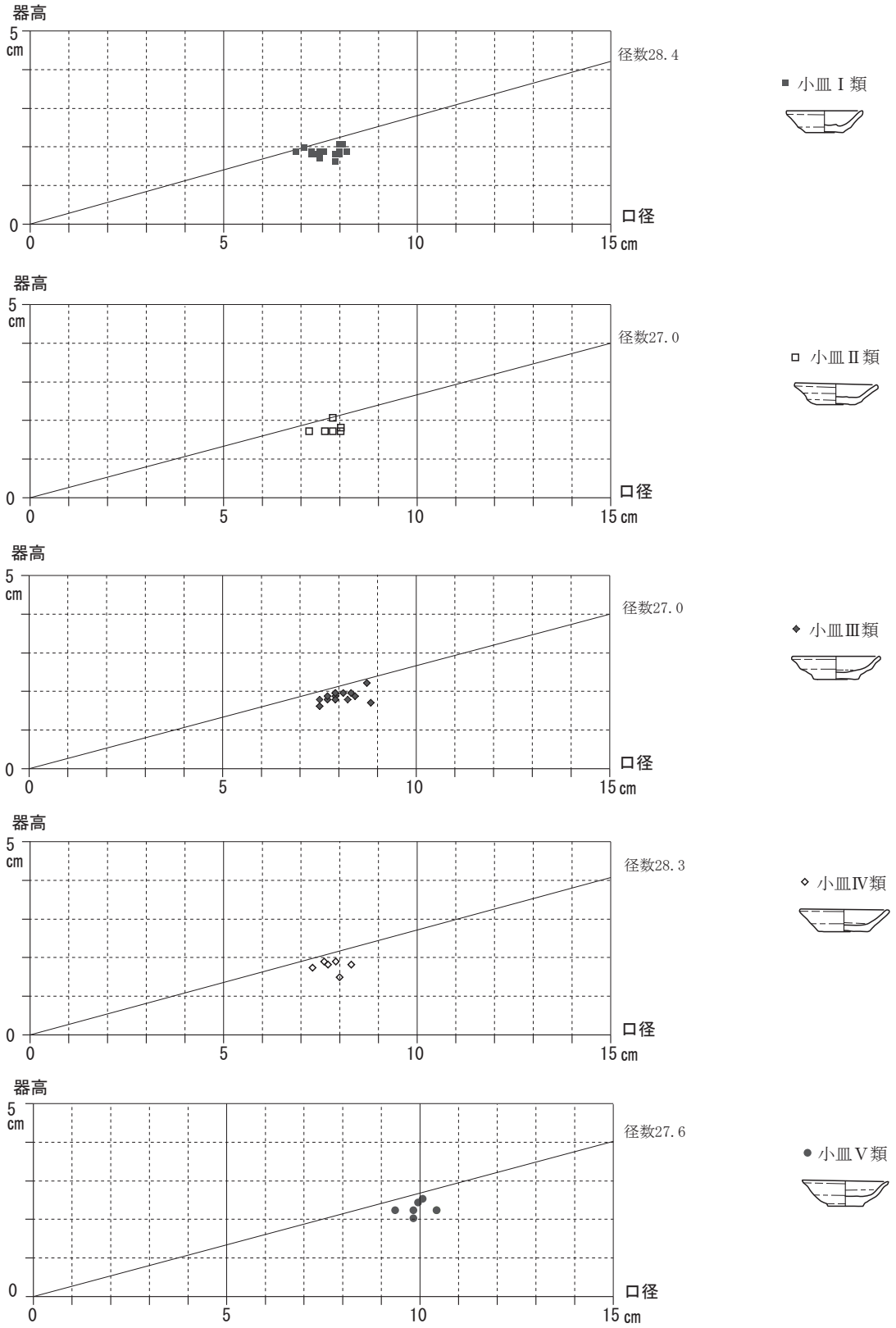
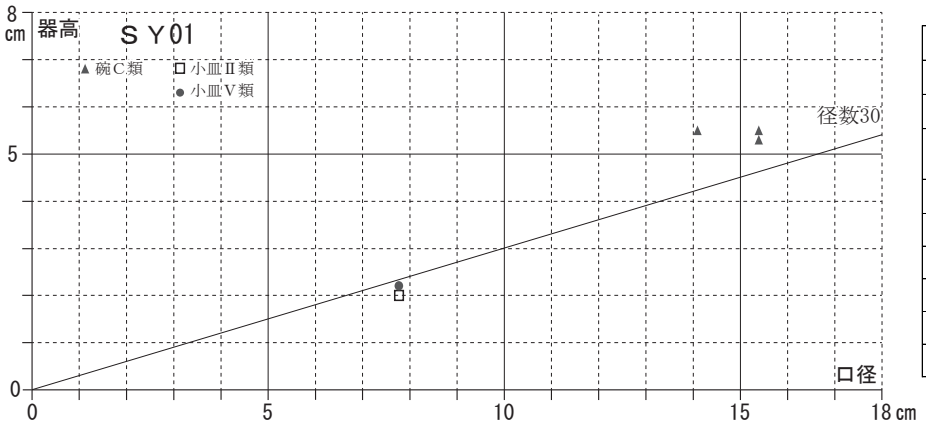
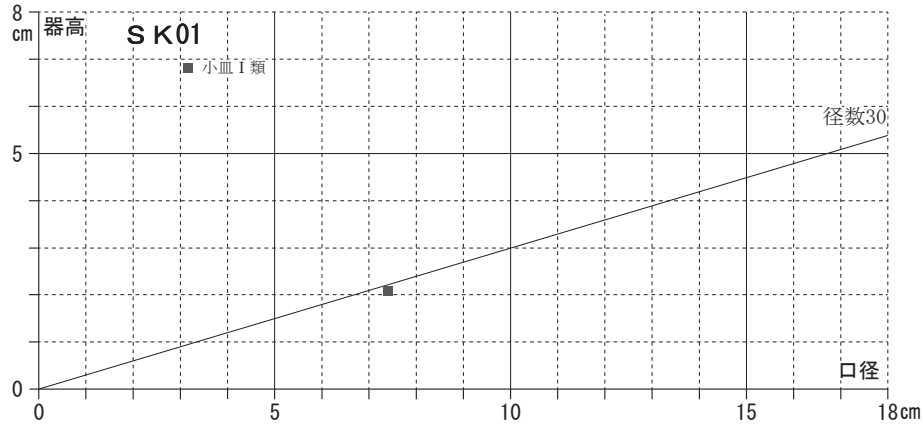


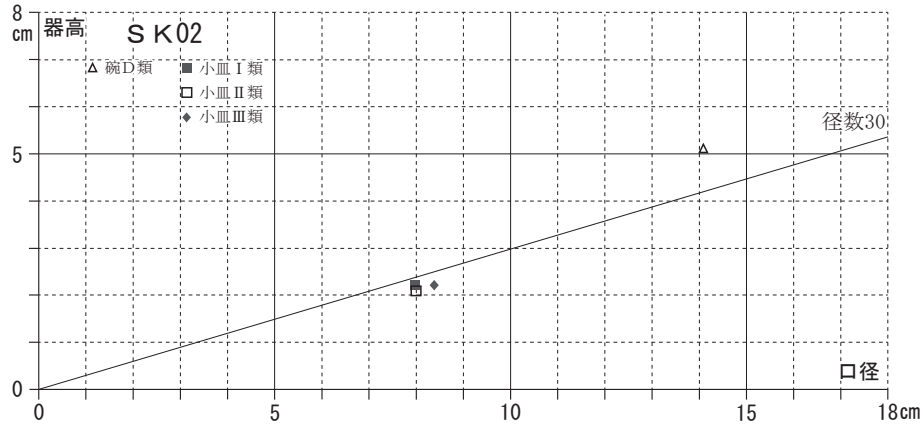
図 37 径高指数グラフ（2）



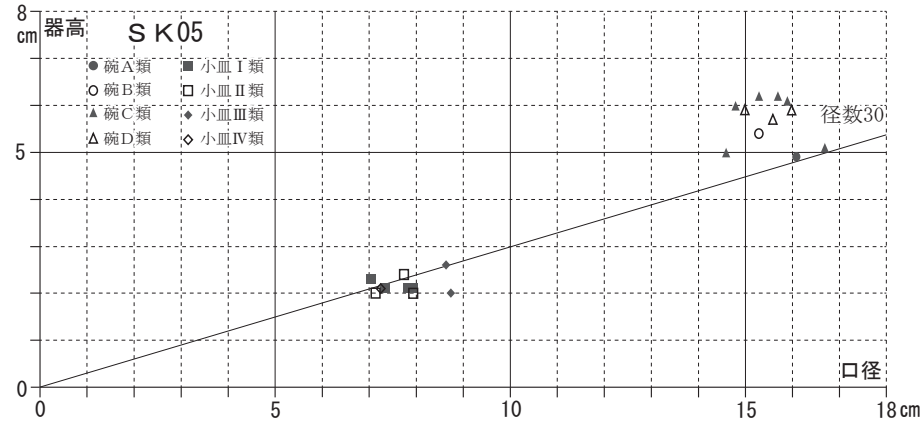
形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	－	－
碗Ｂ類	－	－
碗Ｃ類	34.4～39.0	36.4
碗Ｄ類	－	－
小皿Ⅰ類	－	－
小皿Ⅱ類	25.6	25.6
小皿Ⅲ類	－	－
小皿Ⅳ類	－	－
小皿Ⅴ類	28.2	28.2



形態分類	径高指数	平均値
小皿Ⅰ類	28.8	28.8
小皿Ⅱ類	－	－
小皿Ⅲ類	－	－
小皿Ⅳ類	－	－
小皿Ⅴ類	－	－

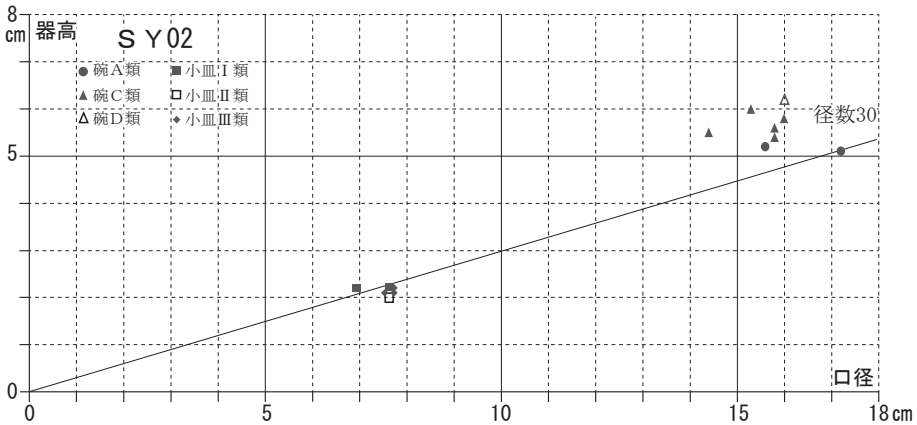


形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	－	－
碗Ｂ類	－	－
碗Ｃ類	－	－
碗Ｄ類	36.2	36.2
小皿Ⅰ類	27.5	27.5
小皿Ⅱ類	26.3	26.3
小皿Ⅲ類	26.2	26.2
小皿Ⅳ類	－	－
小皿Ⅴ類	－	－

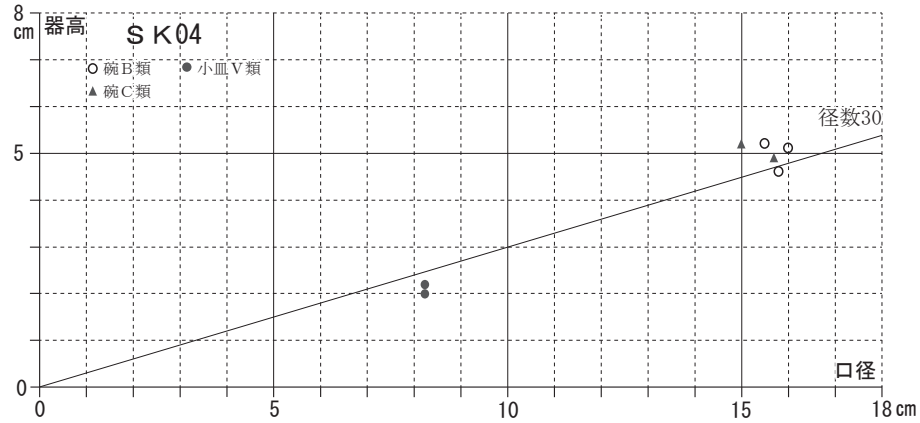


形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	30.4	30.4
碗Ｂ類	35.3	35.3
碗Ｃ類	30.5～40.5	37.3
碗Ｄ類	36.5～39.3	37.6
小皿Ⅰ類	26.3～32.4	28.4
小皿Ⅱ類	25.0～30.8	27.9
小皿Ⅲ類	22.7～29.9	26.3
小皿Ⅳ類	28.8	28.8
小皿Ⅴ類	－	－

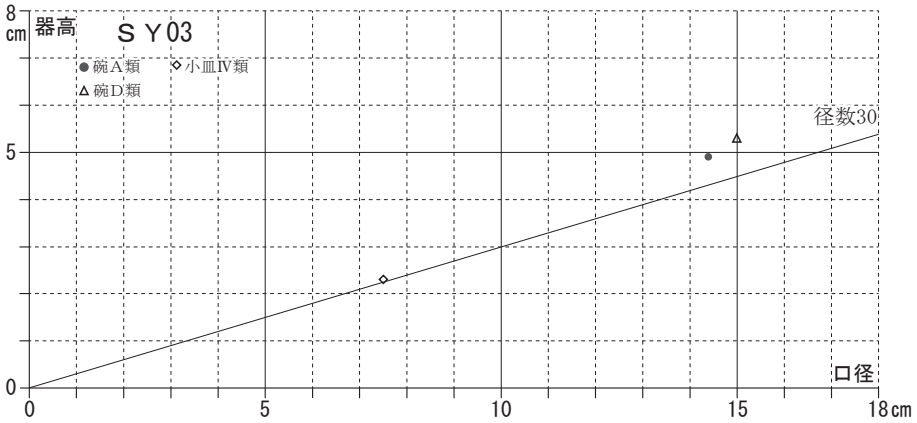
図 38　遺構別径高指数グラフ（1）



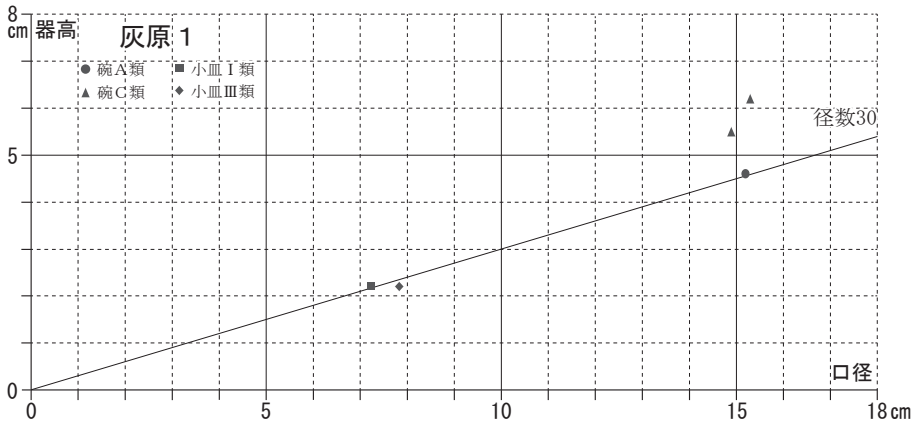
形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	29.7～33.3	31.5
碗Ｂ類	－	－
碗Ｃ類	34.2～39.2	36.7
碗Ｄ類	38.8	38.8
小皿Ⅰ類	28.9～31.9	30.4
小皿Ⅱ類	26.3	26.3
小皿Ⅲ類	27.3～28.6	28.0
小皿Ⅳ類	－	－
小皿Ⅴ類	－	－



形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	－	－
碗Ｂ類	29.1～33.5	31.5
碗Ｃ類	31.2～34.7	33.0
碗Ｄ類	－	－
小皿Ⅰ類	－	－
小皿Ⅱ類	－	－
小皿Ⅲ類	－	－
小皿Ⅳ類	－	－
小皿Ⅴ類	24.4～26.8	25.6

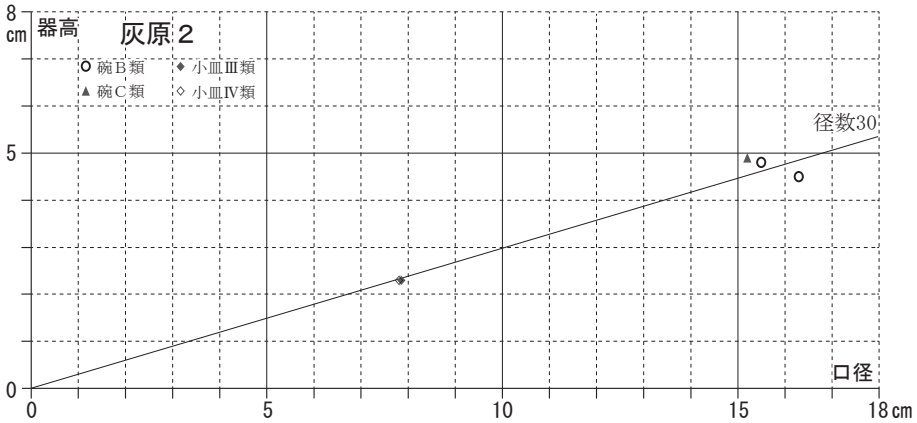


形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	34.0	34.0
碗Ｂ類	－	－
碗Ｃ類	－	－
碗Ｄ類	35.3	35.3
小皿Ⅰ類	－	－
小皿Ⅱ類	－	－
小皿Ⅲ類	－	－
小皿Ⅳ類	30.3	30.3
小皿Ⅴ類	－	－

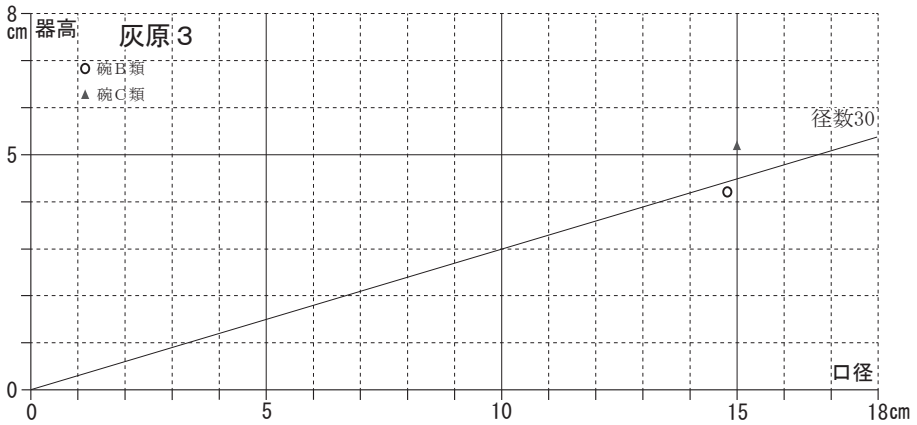


形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	30.3	30.3
碗Ｂ類	－	－
碗Ｃ類	36.9～40.5	38.7
碗Ｄ類	－	－
小皿Ⅰ類	30.1	30.1
小皿Ⅱ類	－	－
小皿Ⅲ類	27.8	27.8
小皿Ⅳ類	－	－
小皿Ⅴ類	－	－

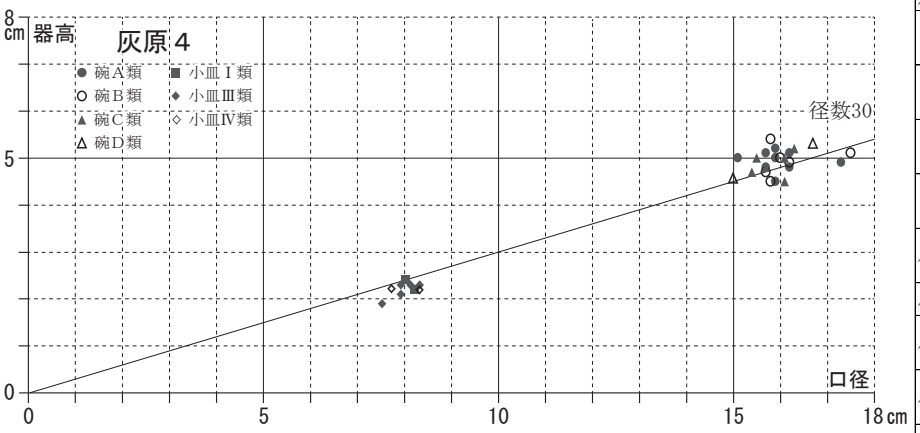
図 39 遺構別径高指数グラフ（2）



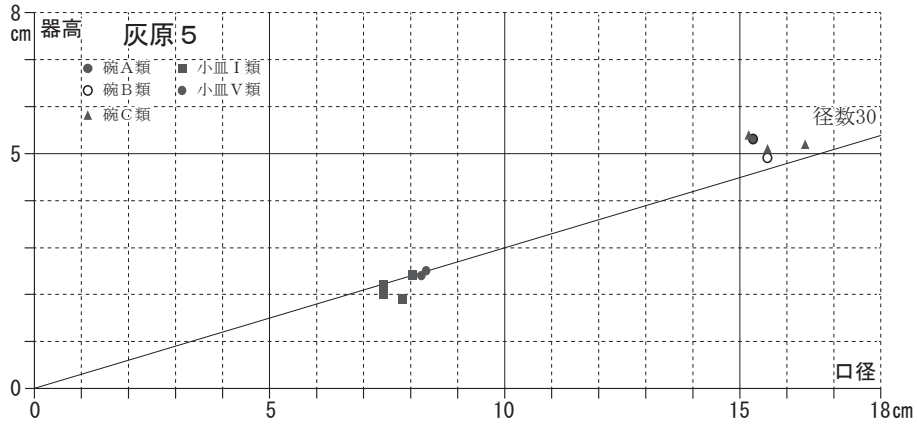
形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	－	－
碗Ｂ類	27.6～31.0	29.3
碗Ｃ類	32.2	32.2
碗Ｄ類	－	－
小皿Ⅰ類	－	－
小皿Ⅱ類	－	－
小皿Ⅲ類	29.1	29.1
小皿Ⅳ類	29.1	29.1
小皿Ⅴ類	－	－



形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	－	－
碗Ｂ類	28.4	28.4
碗Ｃ類	34.7	34.7
碗Ｄ類	－	－



形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	28.3～33.1	30.9
碗Ｂ類	28.5～34.2	30.5
碗Ｃ類	28.0～32.3	30.7
碗Ｄ類	31.7～46.7	39.2
小皿Ⅰ類	26.8～30.0	28.4
小皿Ⅱ類	－	－
小皿Ⅲ類	25.3～29.1	26.8
小皿Ⅳ類	26.5～28.6	27.4
小皿Ⅴ類	－	－



形態分類	径高指数	平均値
碗Ａ類	34.6	34.6
碗Ｂ類	31.4	31.4
碗Ｃ類	31.7～35.5	33.3
碗Ｄ類		
小皿Ⅰ類	24.1～29.6	27.4
小皿Ⅱ類		
小皿Ⅲ類		
小皿Ⅳ類		
小皿Ⅴ類	28.9～29.8	29.4

図 40　遺構別径高指数グラフ（3）

Ⅰ類２点、Ⅱ類１点、Ⅴ類１点に分けられる。

ＳＫ 01 から出土した遺物は、小皿Ⅰ類の１点である。

ＳＫ 02 から出土した碗・小皿は、計４点である。分類別では、碗Ｄ類１点、小皿Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類が各１点に分けられる。

ＳＫ 03 から碗・小皿は出土しなかった。

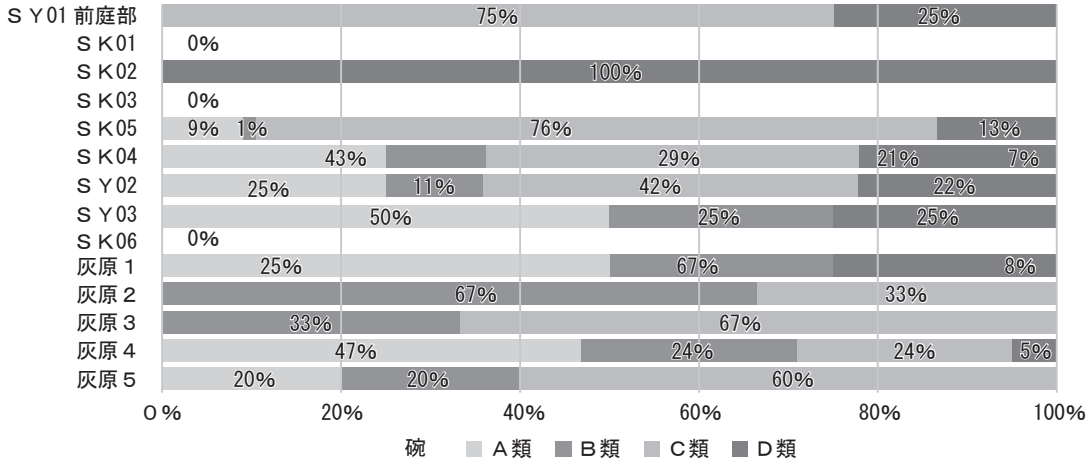
ＳＫ 05 から出土した碗･小皿･片口鉢は､計 118 点である。分類別では､碗Ａ類６点､Ｂ類３点､Ｃ類 51 点、Ｄ類９点、小皿Ⅰ類 17 点、Ⅱ類 26 点、Ⅲ類３点、Ⅳ類１点、片口鉢１類２点、２類２点となる。

ＳＫ 04 から出土した碗・小皿は、計 17 点である。分類別では、碗Ａ類６点、Ｂ類４点、Ｃ類３点、Ｄ類１点、小皿Ⅰ類１点、Ⅴ類２点に分けられる。

ＳＹ 02 から出土した碗・小皿は、計 46 点である。分類では、碗Ａ類９点、Ｂ類４点、Ｃ類５点、Ｄ類８点、小皿Ⅰ類４点、Ⅱ類３点、Ⅲ類３点に分けられる。

ＳＹ 03 から出土した碗・小皿は、計５点である。分類では、碗Ａ類２点、Ｂ類１点、Ｄ類１点、小皿Ⅳ類１点に分けられる。

ＳＫ 06 から出土した遺物は、小皿Ⅱ類１点である。



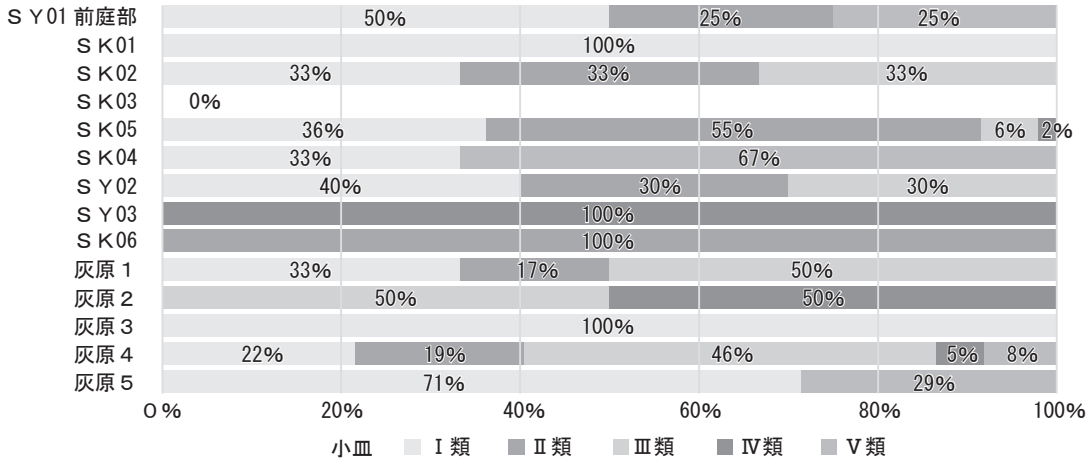


図 41 遺構別器形分類

灰原１から出土した碗・小皿は、計 17 点である。分類別では、碗Ａ類３点、Ｃ類８点、Ｄ類１点、小皿Ⅰ類２点、Ⅱ類１点、Ⅲ類２点に分けられる。

灰原２から出土した碗・小皿は、計５点である。分類別は、碗Ｂ類２点、Ｃ類１点、小皿がⅢ類１点、Ⅳ類１点に分けられる。

灰原３から出土した碗・小皿は、計４点である。分類別では、Ｂ類１点、Ｃ類２点、小皿Ⅰ類１点に分けられる。

灰原４から出土した碗・小皿は、計 120 点である。分類別では、碗Ａ類 39 点、Ｂ類 20 点、Ｃ類 20 点、Ｄ類 4 点、小皿がⅠ類８点、Ⅱ類７点、Ⅲ類 17 点、Ⅳ類２点、Ⅴ類３点に分けられる。

灰原５から出土した碗･小皿は､計 14 点である。分類別では､碗Ａ類１点､Ｂ類１点､Ｃ類３点､Ｄ類２点、小皿Ⅰ類５点、Ⅴ類２点に分けられる。

第２節　編年的位置付け

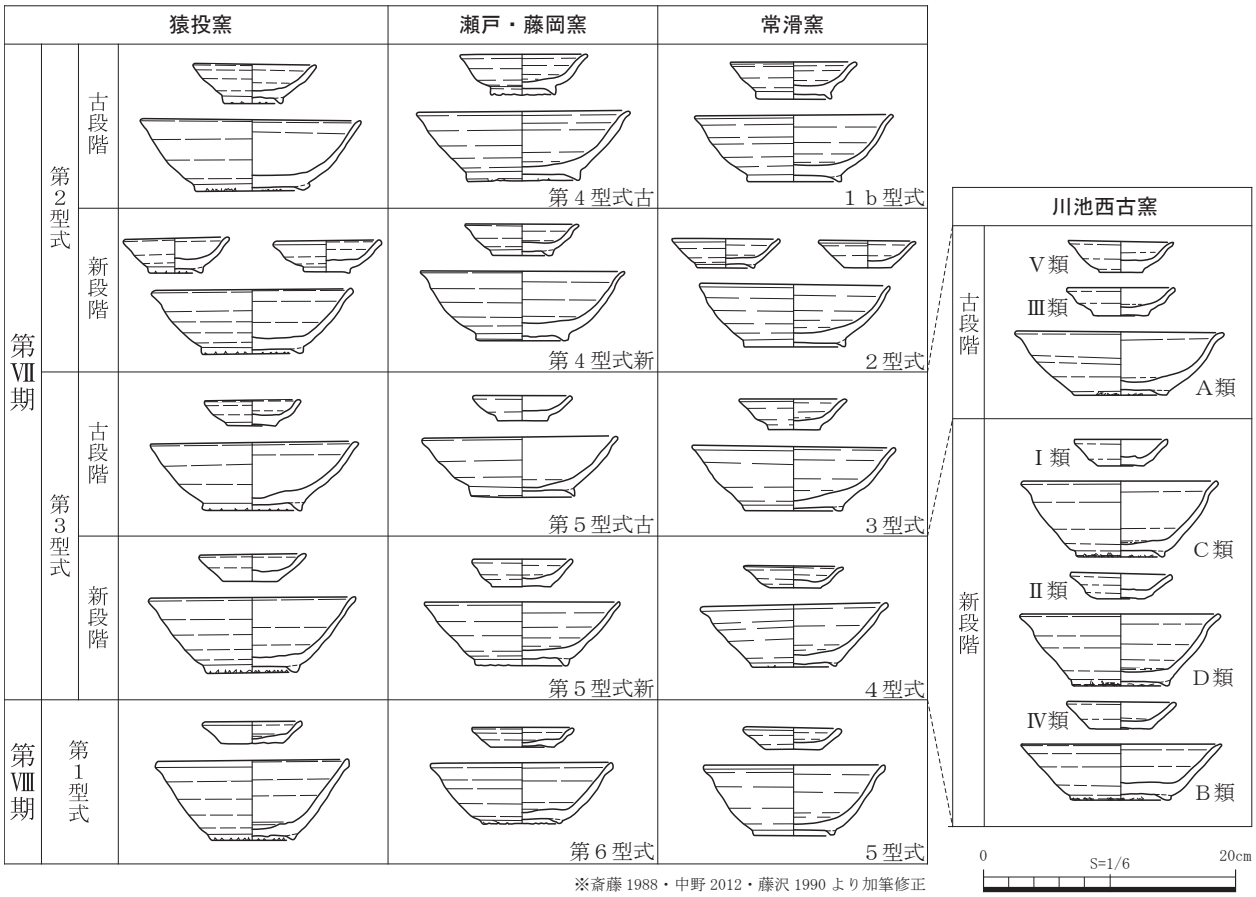
今回の調査で､出土した山茶碗（碗･小皿･片口鉢）の分類結果とともに､斉藤編年（猿投窯）を中心に、藤澤編年（瀬戸・藤岡窯）・中野編年（常滑窯）と対応させながら、川池西古窯の山茶碗を照合し、本窯の操業時期を考えてみたい。

小皿　まず、小皿について検討すると、川池西古窯から出土した小皿の特徴は、底部に突出がある小皿Ⅲ・Ⅴ類と、突出がないⅠ・Ⅱ・Ⅳ類に分けられることである。Ⅲ・Ⅴ類に特徴的な底部の突出器形を、各編年で照合してみると、斉藤編年では第Ⅶ期第２型式新段階から第Ⅷ期第３型式古段階、藤澤編年では第５型式古段階、中野編年では２・３型式に相当する。しかし、今回の調査では出土した山茶碗の中に小碗は含まれていないことから、小皿は斉藤編年第Ⅶ期第２型式新段階、中野編年２型式以前には相当しない。

したがって、川池西古窯から出土した小皿における時期幅の上限は、斉藤編年第Ⅷ期第３型式古段階、藤澤編年第５型式古段階、中野編年３型式とした。

碗　次に碗について検討すると、川池西古窯から出土した碗の特徴は、体部下方に丸みをもつＡ類と体部が直線的なＢ・Ｃ・Ｄ類に分けられ、その両方が同一遺構、同一層位から出土することである。これは、器形が変化する移行期の現象と考えられる。このような現象が認められるのは、斉藤編年第Ⅶ期第３型式古段階～第Ⅷ期第１型式、藤澤編年第５型式古段階～第６型式、中野編年２～５型式に限られる。ただし、斉藤編年第Ⅷ期第１型式、藤澤編年第６型式、中野編年５型式になると、器形的な傾向としては口径が狭く、器高が高くなる。また、内面の底部と体部の境にナデによる明瞭な凹みや稜が認められるようになり、口縁端部は玉縁状となるものが増加する。しかし、今回の調査で出土した碗には、口縁が玉縁状になるものはなく、内面の底部と体部の境に凹みが認められた個体は数点にとどまる。したがって、川池西古窯から出土した碗における時期幅の下限は、斉藤編年第Ⅶ期第３型式新段階、藤澤編年第５型式新段階、中野編年４型式とした。

以上のことから、川池西古窯のおける出土した遺物からみる窯の操業時期は、確実なところで、斉藤編年第Ⅶ期第３型式古・新段階、藤澤編年第５型式古・新段階、中野編年３・４型式、12 世紀後葉から 13 世紀初頭（平安時代末～鎌倉時代初頭）と結論付けた。



※斎藤 1988・中野 2012・藤沢 1990 より加筆修正

図 42　編年対応図

古・新段階の設定　前述のとおり、今回出土した山茶碗の器形的な特徴として、小皿は底部突出（Ⅲ・Ⅴ類）、碗については体部下方の丸み（Ａ類）をあげた。小皿の底部突出は小碗高台部から型式的に連なり、椀体部下方の丸みは初期山茶碗に連なる器形であり、古い要素といえる。残りの類型が持つ特徴、小皿の底部突出無し（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類）と、碗の下方に丸みを持たない直線的な体部（Ｂ・Ｃ・Ｄ類）は、前述の川池西古窯の年代観以降に認められる新しい要素である。以上から、碗Ａ類と小皿Ⅲ・Ⅴ類を古段階、碗Ｂ・Ｃ・Ｄ類と小皿Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類を新段階と仮定する。

各遺構・層位毎に両段階の碗と小皿を比較すると、出土量の少ない遺構・層位を除き、新段階と古段階の比率は碗と小皿で近似する（図 43）。したがって、両段階の碗と小皿は、各々セットで製作されていた可能性が高い。

各遺構の内、ＳＫ 04 はＳＹ 01 直下に位置し、ＳＹ 01 機能時には作業場としての機能を失っていた可能性が高い。また、融着資料等の不良品が集中して堆積しており、その位置関係からＳＹ 01 の不良品を捨てる場として真っ先に利用されることが想定できる。さらに、この上にＳＹ 01 の灰原が直接堆積していること、ＳＹ 02 等他の窯体焚口から標高が高く離れた位置にあることからも、ＳＫ 04 の遺物は、ＳＹ 01 初回もしくはごく初期の操業時の物である可能性が高い。

これに対しＳＫ 05 はＳＹ 01 の築窯排土で整地され、ＳＹ 01 前庭部と底面・平面的が連なることから、ＳＹ 01 前庭部の一部として機能していた可能性が高い。ＳＫ 05 にも、融着資料等の不良品が集中して堆

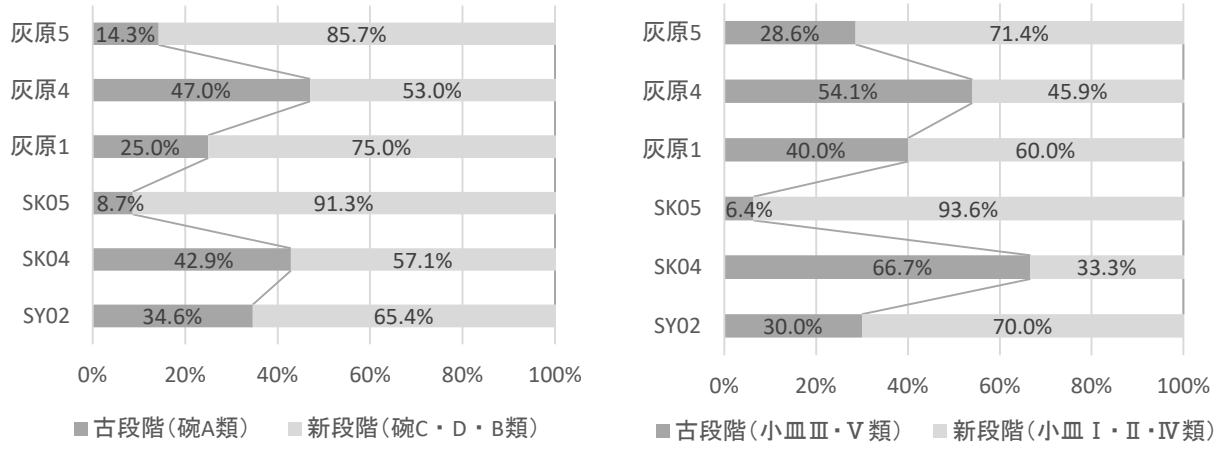


図 43　遺構別古段階・新段階比率

積しており、その上には、厚い流入土が直接堆積していた。不良品がうず高く積まれれば、作業場やヤードとしての機能は果たし得ない。したがってこれらの遺物は、前庭部としての機能が喪失する最終操業時の物である可能性が高い。

この２遺構の遺物を比較すると、古段階の碗・小皿ともにＳＫ 04 では約半数を占めるのに対し、ＳＫ 05 では６～８％と少ない。したがって、先に形式学的な方法により仮定した古・新段階の先後関係が、層位学的にも証明できる可能性は高い。以上から、碗Ａ類と小皿Ⅲ・Ⅴ類を川池西古窯古段階（斉藤編年第Ⅶ期第３型式古段階、藤澤編年第５型式古段階、中野編年３型式併行）、碗Ｂ・Ｃ・Ｄ類と小皿Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類を川池西古窯新段階（斉藤編年第Ⅶ期第３型式新段階、藤澤編年第５型式新段階、中野編年４型式併行）として設定する。

第３節　遺構

本調査区では、窯体が３基（ＳＹ 01 ～ 03）、作業場（ＳＫ 04）、ロクロピット（ＳＰ 01）、灰原１を検出した。過去の類例や遺構の位置関係などから当時の状況を復元したい。

工房と窯体　ロクロピットとは、ロクロを設置するための施設であり、本調査区で検出されたＳＰ 01 は、ロクロ軸痕跡が中央に認められ、掘り方下半には、ロクロ軸固定のためと考える粘土ブロックが充填されていた（図 44）。このことから、「ロクロピット」と判断した。また、このロクロピット（ＳＰ 01）と接しているＳＫ 04 が存在する。斜面を掘削して平坦面が形成されていた。その形状とＳＰ 01 と接することから、作業場と考えられる。両遺構が立地する斜面地の土地利用方法としては、山茶碗を生産する窯業関連に限られる。したがって、ＳＰ 01 とＳＫ 04 は同時期に一体のものとして機能していた山茶碗製作工房と判断した。

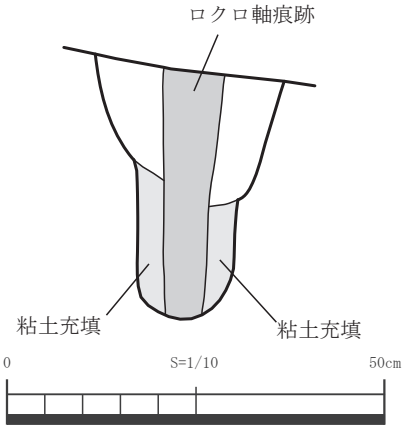


図 44　ロクロピット模式図

東海地方の山茶碗窯では、窯１基につき一時期に稼働していたロクロピットは１基と考えられている（藤澤 2008）。

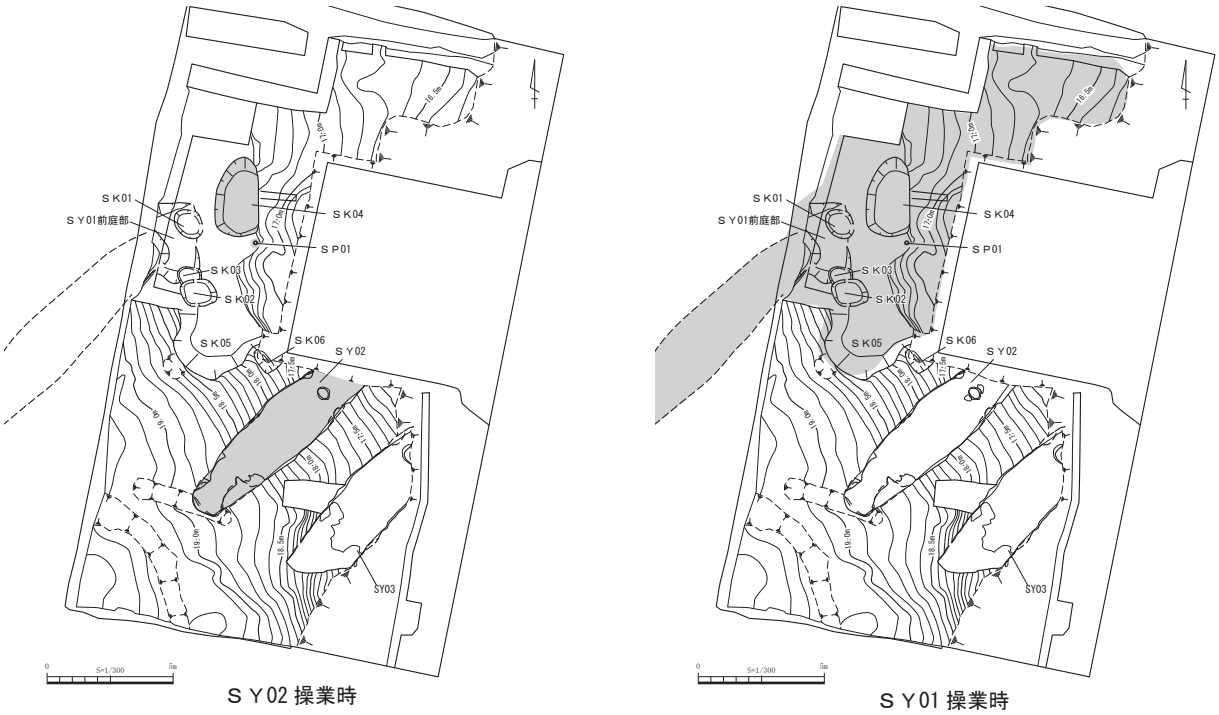


図 45　時期別遺構変遷

では、上記工房に付属するロクロピット（ＳＰ 01）は、いずれの窯体で焼成する製品を製作するための施設であろうか。工房の上にはＳＹ 01 由来の灰原が堆積しているため、同時に機能していたとは考えにくい。また、東海地方の山茶碗窯では、標高の低い位置から高い位置へと順に構築されてゆく傾向が指摘されており（藤澤 2008）、ＳＹ 01 の隣、ＳＹ 02 とは反対の北西側に未知の窯があった可能性がある。しかし、ＳＹ 01 の上には、直接厚い流入土（図７）が堆積し、灰原が土壌化・表土化した様子も観察できなかった。このような堆積と、操業後半には燃料材が枯渇した可能性を指摘する自然科学分析（第４章）の結果から、ＳＹ 01 操業開始時、周囲に森林が広がっており、燃料材を伐採・使用していたと考えられるが、操業終了時には、その森林からは樹木がなくなり、保水力を失った山肌から土砂が流入した可能性が高い。よって、燃料材となる森林が回復するまで、この地では窯業生産は困難だったと考えられる。したがって、ＳＹ 01 以降の未知の窯の存在、またそれに付帯する工房である可能性も低い。残るＳＹ 02 と 03 では、工房との距離はＳＹ 02 の方がより近い。以上から、工房（ＳＰ 01・ＳＫ 04）が付帯する窯体は、ＳＹ 02 の可能性が比較的高いと推定した（図 45）。

構築順　これまでの検討をもとに、当時の状況を時系列順に復元したい。上述したようにＳＹ 01 よりも工房、また工房が付帯するＳＹ 02 もＳＹ 01 より古い。さらに出土遺物から見ても、ＳＹ 02 出土の碗と小皿は川池西古窯古段階のものが 30 ～ 34％と約３割を占め、ＳＹ 01 最終操業時のＳＫ 05 よりは、初期操業時のＳＫ 04 の比率に近い（図 43）。先に指摘したようにＳＹ 02 出土遺物には、天井崩落後に流入した新しい遺物が含まれることを考慮すれば、ＳＹ 02 の比率はＳＫ 04 により近かったと想定できる。

ＳＹ 03 に関しては、出土遺物量が少なく、その多くが流れ込みと判断している。したがって、遺物からは時期を類推することが困難である。ただし、窯体の規模・形状・主軸方向等がＳＹ 02 と酷似しており、同じ工人により連続して構築された可能性が極めて高い。同じ時期の窯が隣接して構築される場合、標高

表9　工房と窯体類例

№.	窯跡名	時期（出土遺物）	窯体の数	主な検出遺構	工房跡検出場所	類型	備考
a	広久手12号	山茶碗第３型式	1	工房跡（ロクロピット１）・土坑・ピット	窯体の左側尾根付近	A	窯体の位置は推定。
b	広久手13・14号	山茶碗第６・７型式 古瀬戸前Ⅱ期	2	工房跡？（平坦面・粘土溜り）	13号窯の前庭部左（14号との間）	A	
c	紺屋田Ａ	山茶碗第5・6・8型式 古瀬戸前Ⅱ期	5				
d	太子Ａ	山茶碗第７型式	1	工房跡（ロクロピット１・溝・粘土溜り）	窯体の右側	A	
e	塩草Ｂ	山茶碗第７・８型式	2	工房跡（ロクロピット１・溝・粘土溜り）・ピット群	１号窯焚口左側約5mの地点・尾根上	A	尾根上のピット群は工房跡かどうか不明
f	広久手７・17号	山茶碗第７・８型式	2	工房跡（ロクロピット１、建物跡）・土坑	17号窯の東側尾根上約20mの地点	A	
g	凧山C	山茶碗第７・８型式	2	工房跡？（ロクロピット？）・土坑・溝・ピット	SY01前庭部・SY01焚口～焼成室の左側	A	
h	小田妻４・５・７・８号	山茶碗第６～８型式 古瀬戸前Ⅰｂ期	4	工房跡（ロクロピット３・粘土溜り・炭化物）	５・７・８号窯の右側	A	
i	半ノ木E	山茶碗第７・８型式	2	工房跡？（平坦面）	１・２号窯前庭部左側	A	２号窯の平坦面には焼土面がみられる。なんらかの工房跡か。
j	下半田C	山茶碗第７・８型式	2	工房跡（ロクロピット２・建物跡・土坑・溝）	１・２号窯前庭部	A	
k	仏供田	山茶碗第７・８型式 古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期	1	工房跡（ロクロピット２・柱穴・焼土面）・土坑	窯体左上の尾根上	A	煙道部上方に焼台群。別の窯体が存在する可能性あり。
l	中洞	山茶碗第８型式 古瀬戸中Ⅰ期	1	工房跡？（ロクロピット２？）・土坑	窯体の左右	A	別の窯体が存在する可能性あり。
m	五葉	山茶碗第８型式 古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期	3	工房跡（ロクロピット２・建物跡・粘土溜り・焼土面）・改造窯（粘土溜り・焼土面・炭化物）・炭溜り土坑	１号窯の左側	B	
n	西山路Ⅰ	山茶碗第８・９型式 古瀬戸中Ⅱ期	3	窯体改造施設		B	
o	暁３～５号	山茶碗第８・９型式 古瀬戸中Ⅳ期	3	工房跡（ロクロピット１）・乾燥場遺構（焼土面・炭化物・溝）・ピット・土坑・改造窯（焼土面）	３号窯前庭部の左	B	
p	巡間E	山茶碗第９型式 古瀬戸後Ⅰ期	2	工房跡（ロクロピット１）・乾燥場遺構（焼土面・炭化物・溝）・土坑	ＳＹ01前庭部左	C	ロクロピットは２号窯に伴う。
q	小長曽	古瀬戸後Ⅱ期	1	工房跡（ロクロピット３・焼土面・粘土溜り・溝）・乾燥場遺構３（焼土面・粘土溜り・炭化物）	窯体の左右	C	煙道部上方に焼台群。
r	鶯	古瀬戸中Ⅳ期～後Ⅲ期	1	工房跡（ロクロピット1？）・乾燥場遺構（粘土溜り・焼土面・炭化物）・作業場（粘土溜り・焼土面・炭化物）	窯体の左側斜面	C	

の低い位置から高い位置へと順に構築される例が多いことから、ＳＹ 03 はＳＹ 02 よりも古い可能性が高い。以上から､今回見つかった３基の窯体の構築順をＳＹ 03 →ＳＹ 02（工房付帯）→ＳＹ 01 と推定する。

工房と窯体類例　山茶碗ロクロピットを持つ工房の例は、本遺跡を内包する猿投窯（中野 2012）では類例に乏しい。類例の豊富な瀬戸窯と比較すると（表９)、窯体・前庭部・灰原のほかに工房のみが付属するＡ類型（河合 2012）と一致する。このＡ類型の時期は、藤澤編年第７・８型式までとされており、今回の調査で出土した遺物の年代観（藤澤編年第５型式）とも齟齬はない。これまで、山茶碗工人は藤岡・瀬戸・猿投といった窯業地の枠を超えて活動していたことが指摘されており（藤澤 2008)、今回の調査で見つかった工房と窯体からも、同様の指摘ができる。

本調査では、中世猿投窯では初のロクロピットを伴う工房を確認できた。瀬戸窯との共通性から、猿

投窯･瀬戸窯における山茶碗工人の活動の一端を指摘できた。尾張丘陵に位置し、燃料の材料となる樹木、製品の胎土となる粘土の確保が可能であり、当時最大の物資運搬手段であったであろう河川による水運が容易にできる立地であるため、大府市域の丘陵地帯で、平安時代から鎌倉時代にかけて数多くの窯が構築されてきた。今回の川池西古窯の調査は、他の窯跡とともに窯業生産が活発だった時代に生き、窯業地の枠を超えて活躍した窯工人が、この地においても活躍したことを示す結果となった。

参考文献

河合君近 2008　「中世瀬戸窯の遺跡構造」『瀬戸窯　瀬戸市重要遺跡試掘調査報告』
財団法人瀬戸市文化振興財団

河合君近 2012　「瀬戸窯における工房の事例と検討」『考古学フォーラム 21』

斉藤孝正 1988　「中世猿投窯の研究－編年に関する一考察－」『研究論集ＣＩ史学 34』 名古屋大学文学部

中野晴久 2012　「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業３ 中世・近世 常滑系　愛知県史編さん委員会

中野晴久 2016　「知多半島北部の山茶碗窯」『鴨池東古窯　宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
ナカシャクリエイテブ株式会社

藤澤良祐 1990　「山茶碗と中世集落」『尾呂』 瀬戸市教育委員会

藤澤良祐 2007　「総論」『愛知県史』別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系愛知県史編さん委員会

藤澤良祐 2008　「山茶碗の生産体制」『中世瀬戸窯の研究』高志書院

表 10 遺物観察表（1）

掲載番号	グリッド	遺構	窯体内出土地区	層位	器種	分類	口縁端部	法量(cm) 口径	器高	底径	高台径	成形・調整・釉等 残存率	外面	内面	胎土(色調)	備考
1	D5・6	SY01		焼台集積層	椀	C	d	(14.1)	5.5	6.5	6.9	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕
2	D5	SY01		焼台集積層	椀	C	d	(15.4)	5.3	6.8	7.5	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0119　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
3	D5	SY01		焼台集積層	椀	C	d	(15.4)	5.5	6.5	6.9	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕
4	D5	SY01		焼台集積層	小皿	Ⅱ	b	7.8	2.0	3.8	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	dot.0079　降灰 板目状圧痕
5	D5	SY01		焼台集積層	小皿	Ⅴ	b	7.8	2.2	3.2	－	口:11/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0078　降灰 輪積痕
6	D5	SY01		焼台集積層	焼台	－	－	最大長 12.1	最大幅 12.0	最大厚 5.6	－	－	指圧痕	－	－	dot.0004 上面に籾殻痕顕著
7	D5	SK01			小皿	Ⅰ	b	7.3	2.1	3.6	－	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	降灰　板目状圧痕
8	D6	SK02			椀	D	d	14.1	5.1	6.6	6.8	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰
9	D5	SK02			小皿	Ⅰ	a	8.0	2.2	4.2	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	降灰　板目状圧痕
10	D6	SK02			小皿	Ⅱ	b	8.0	2.1	3.6	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0070　板目状圧痕
11	D6	SK02			小皿	Ⅲ	c	8.4	2.2	4.0	－	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	dot.0071　降灰 板目状圧痕
12	D6	SK05			椀	A	c	(16.1)	4.9	7.0	7.6	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0120　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
13	D6	SK05			椀	B	b	(15.3)	5.4	6.8	7.4	口:4/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰
14	D6	SK05			椀	C	c	14.6	5.0	6.7	7.3	口:6/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0126　貼付高台 籾殻痕　降灰
15	D6	SK05			椀	C	d	15.9	6.1	7.0	7.6	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0134　貼付高台 籾殻痕
16	D6	SK05			椀	C	d	16.7	5.1	7.2	7.3	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/2	dot.0122　貼付高台 籾殻痕　降灰
17	D6	調査区南壁トレンチ(SK05)			椀	C	d	(14.8)	6.0	(6.6)	7.2	口:3/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　板目状圧痕
18	D6	SK05			椀	C	e	15.7	6.2	6.8	7.1	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0139　貼付高台 籾殻痕
19	D6	SK05			椀	C	e	15.3	6.2	7.7	8.0	口:4/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0151　貼付高台 籾殻痕　降灰
20	D6	SK05			椀	D	a	(15.6)	5.7	7.3	7.9	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰
21	D6	SK05			椀	D	c	16.0	5.9	6.8	7.2	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 7.5YR8/1	dot.0123　貼付高台 籾殻痕　降灰
22	D6	SK05			椀	D	c	15.0	5.9	7.8	7.8	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0129　貼付高台 籾殻痕
23	D6	SK05			小皿	Ⅰ	b	7.1	2.3	3.5	－	口:11/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0128　降灰 板目状圧痕
24	D6	SK05			小皿	Ⅰ	c	8.0	2.1	4.2	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	dot.0127　降灰 板目状圧痕
25	D6	SK05			小皿	Ⅰ	c	7.4	2.1	4.1	－	口:9/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0141　降灰 板目状圧痕
26	D6	SK05			小皿	Ⅰ	c	7.9	2.1	4.1	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0150　降灰 板目状圧痕
27	D6	SK05			小皿	Ⅱ	b	8.0	2.0	4.5	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0132　降灰 板目状圧痕
28	D6	SK05			小皿	Ⅱ	c	7.2	2.0	3.8	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0131　降灰 板目状圧痕
29	D6	SK05			小皿	Ⅱ	c	7.8	2.4	4.4	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0149　降灰 内面輪積痕
30	D6	SK05			小皿	Ⅲ	a	8.7	2.6	3.4	－	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0140　降灰 板目状圧痕
31	D6	SK05			小皿	Ⅲ	c	8.8	2.0	4.2	－	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0130　降灰 板目状圧痕
32	D6	SK05			小皿	Ⅳ	a	7.3	2.1	4.2	－	口:9/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0124　降灰 板目状圧痕
33	D6	SK05			無台片口鉢	1		(17.2)	7.6	7.6	－	口:6/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	降灰　籾殻痕
34	D6	SK05			無台片口鉢	2		17.3	7.6	7.8	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	降灰　籾殻痕
35	D6	SK05			無台片口鉢			(17.7)	7.4	6.7	－	口:2/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り 指圧痕	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	降灰　内外面籾殻痕 板目状圧痕
36	D6	SK05			無台片口鉢			(16.2)	6.9	8.4	－	口:5/12 底:5/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	降灰　板目状圧痕 籾殻痕
37	D6	SK05			無台片口鉢			－	4.7	8.0	－	底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0125　貼付高台 籾殻痕　降灰
38	E6	SY02	Ⅶ	床下1	椀	A	a	17.2	5.1	7.6	9.5	口:4/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0199　貼付高台 籾殻痕　板目状圧痕
39	D7	SY02	Ⅲ		椀	A	c	15.6	5.2	6.9	7.4	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	dot.0155　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
40	E6	SY02	Ⅷ		椀	C	a	15.8	5.4	7.4	7.6	口:6/12 底:9/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0195　融着 貼付高台　籾殻痕　降灰
41	E6	SY02	Ⅷ		椀	C	a	(15.8)	5.6	(7.8)	8.0	口:6/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0194　貼付高台 籾殻痕　降灰
42	E6	SY02	Ⅷ		椀	C	c	15.3	6.0	6.7	7.3	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	融着　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
43	E6・7	SY02	Ⅶ		椀	C	d	(16.0)	5.8	7.2	7.7	口:3/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　板目状圧痕
44	E6	SY02	Ⅷ		椀	C	d	(14.4)	5.5	(6.6)	(7.0)	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0156　貼付高台 籾殻痕　降灰
45	E6	SY02	Ⅷ		椀	D	d	16.0	6.2	7.3	7.8	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0193　融着 貼付高台　籾殻痕　降灰
46	E6	SY02	Ⅷ		椀	－	－	－	(1.9)	6.1	－	底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	底部外面にﾍﾗ記号「十」 板目状圧痕
47	E6	SY02	Ⅶ		小皿	Ⅰ	b	7.6	2.2	3.5	－	口:9/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	dot.0164　降灰 板目状圧痕

表 11 遺物観察表（2）

掲載番号	グリッド	遺構	窯体内出土地区	層位	器種	分類	口縁端部	法量(cm)				成形・調整・釉等			胎土(色調)	備考
								口径	器高	底径	高台径	残存率	外面	内面		
48	E6	SY02	Ⅶ		小皿	Ⅰ	d	6.9	2.2	3.3	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/2	dot.0178　降灰
49	E6	SY02	Ⅷ		小皿	Ⅱ	b	7.6	2.0	2.6	－	口:9/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	降灰　内面輪積痕
50	E6・7	SY02	Ⅶ		小皿	Ⅲ	a	7.7	2.1	4.0	－	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	降灰　重ね焼き痕 板目状圧痕
51	E6	SY02	Ⅶ		小皿	Ⅲ	a	(7.5)	2.1	3.6	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0171　降灰 板目状圧痕
52	E6	SY02	Ⅶ		小皿	Ⅲ	d	(7.7)	2.2	3.9	－	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0169　降灰 内面輪積痕
53	E6・7	SY02	Ⅶ		焼台	－	－	残存長 (11.2)	最大幅 12.0	最大厚 6.0	－	－	指圧痕	－	－	籾殻痕
54	D5	SK04			椀	B	b	(16.0)	5.1	7.4	7.6	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0123　貼付高台 籾殻痕　板目状圧痕 体部底部の境に凹みあり
55	D5	SK04			椀	B	c	15.8	4.6	6.6	7.2	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/2	貼付高台　籾殻痕 降灰　板目状圧痕
56	D5	SK04			椀	B	c	(15.5)	5.2	7.4	7.5	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色 10YR7/2	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕
57	D5	SK04			椀	C	a	(15.0)	5.2	7.4	7.5	口:2/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/2	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕
58	D5	SK04			椀	C	b	(15.7)	4.9	(7.2)	(7.5)	口:3/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	にぶい橙色 10YR7/4	貼付高台　籾殻痕 降灰
59	D5	SK04			小皿	Ⅴ	f	8.2	2.2	4.4	－	口:11/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0117　降灰 板目状圧痕
60	D5	SK04			小皿	Ⅴ	f	8.2	2.0	4.6	－	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	降灰　板目状圧痕
61	E7	SY03	Ⅳ		椀	A	a	(14.4)	4.9	6.4	6.9	口:2/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	にぶい 浅黄橙色 10YR8/4	貼付高台　籾殻痕 降灰
62	F7	SY03	Ⅴ		椀	D	a	(15.0)	5.3	(8.0)	(8.0)	口:1/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　板目状圧痕
63	F7	SY03	Ⅷ		小皿	Ⅳ	c	(7.6)	2.3	(4.8)	－	口:5/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	にぶい黄橙色 10YR7/4	降灰　口縁部に付着痕
64	E6	SK06			常滑甕			－	(7.6)	－	－	細片	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 指圧痕	黒褐色 10YR3/1	降灰　常滑陶器
65	F4			灰原１	椀	A	d	(15.2)	4.6	6.8	7.4	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕　板目状圧痕
66	D6			灰原１	椀	C	a	(15.3)	6.2	(6.5)	6.9	口:4/12 底:4/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕
67	D6			灰原１	椀	C	d	(14.9)	5.5	6.0	6.7	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕
68	D6			灰原１	小皿	Ⅰ	b	(7.3)	2.2	4.1	－	口:7/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	降灰
69	F4			灰原１	小皿	Ⅲ	d	7.9	2.2	4.2	－	口:9/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	降灰
70	F4			灰原２	椀	B	a	(15.5)	4.8	6.8	7.8	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 板目状圧痕
71	E5			灰原２	椀	B	d	(16.3)	4.5	(8.4)	(8.6)	口:2/12 底:5/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕
72	E4			灰原２	椀	C	c	(15.2)	4.9	8.0	8.3	口:3/12 底:9/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰
73	F4			灰原２	小皿	Ⅲ	c	7.9	2.3	4.0	－	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0003　降灰 重ね焼き痕
74	D6			灰原２	小皿	Ⅳ	b	7.9	2.3	3.8	－	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	降灰　板目状圧痕
75	F4			灰原３	椀	B	a	(14.8)	4.2	7.9	8.4	口:1/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 5Y7/1	貼付高台　籾殻痕 降灰　内面体部に輪積痕
76	F4			灰原３	椀	C	c	(15.0)	5.2	6.4	6.8	口:2/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/2	貼付高台　籾殻痕 降灰
77	E4			灰原４	椀	A	a	15.7	5.1	7.6	8.1	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0012　貼付高台 籾殻痕　降灰
78	E4			灰原４	椀	A	a	(15.7)	4.8	7.4	7.6	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0053　融着　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕
79	F4			灰原４	椀	A	a	16.2	5.1	7.2	7.8	口:9/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 10YR8/1	dot.0090　貼付高台 籾殻痕　降灰 重ね焼き痕
80	E5			灰原４	椀	A	b	15.9	5.0	7.4	7.8	口:6/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0051　貼付高台 籾殻痕　降灰
81	E5			灰原４	椀	A	b	(15.9)	5.2	7.4	8.0	口:6/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0052　貼付高台 籾殻痕　降灰
82	E5			灰原４	椀	A	b	(17.3)	4.9	8.8	9.0	口:5/12 底:7/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0010　貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕　板目状圧痕
83	F4			灰原４	椀	A	c	(15.9)	4.5	(8.2)	8.7	口:10/12 底:1/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/2	dot.0110　貼付高台 籾殻痕　降灰
84	F4			灰原４	椀	A	d	(15.1)	5.0	7.3	8.0	口:1/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	にぶい黄橙色 10YR7/2	貼付高台　籾殻痕 降灰　板目状圧痕
85	F4			灰原４	椀	A	e	16.2	4.8	7.3	7.9	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0096　融着　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕 板目状圧痕
86	E5			灰原４	椀	B	a	(15.8)	5.4	7.8	8.0	口:4/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	にぶい橙色 7.5YR7/4	dot.0045　貼付高台 籾殻痕　重ね焼き痕
87	F4			灰原４	椀	B	a	16.2	4.9	7.5	7.9	口:6/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0062　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
88	E4			灰原４	椀	B	b	15.7	4.7	8.3	8.4	口:6/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0057　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕
89	E4			灰原４	椀	B	d	16.0	5.0	6.8	7.8	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0056　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕
90	F4			灰原４	椀	B	d	17.5	5.1	7.8	8.5	口:6/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色 10YR7/2	dot.0091　貼付高台 籾殻痕　降灰
91	E4			灰原４	椀	B	f	(15.8)	4.5	7.6	8.1	口:5/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0036　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
92	E5			灰原４	椀	C	b	16.1	5.0	8.3	9.1	口:7/12 底:8/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0039　貼付高台 籾殻痕　降灰
93	E4			灰原４	椀	C	c	(15.5)	5.0	7.0	7.7	口:7/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0042　貼付高台 籾殻痕　降灰
94	E4			灰原４	椀	C	c	(15.7)	4.8	7.8	8.2	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0109　貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕　板目状圧痕

表 12 遺物観察表（3）

掲載番号	グリッド	遺構	窯体内出土地区	層位	器種	分類	口縁端部	法量(cm) 口径	器高	底径	高台径	成形・調整・釉等 残存率	外面	内面	胎土(色調)	備考
95	E4			灰原４	椀	C	c	(15.4)	4.7	6.6	7.0	口:3/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	貼付高台　籾殻痕 降灰
96	F4			灰原４	椀	C	c	16.3	5.2	7.3	8.4	口:11/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0093　貼付高台　籾殻痕 降灰　重ね焼き痕　板目状圧痕
97	F4			灰原４	椀	C	c	16.1	4.5	8.0	8.7	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0099　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕
98	E4			灰原４	椀	D	b	(15.0)	7.0	7.0	7.8	口:4/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 5Y8/1	dot.0035　融着 貼付高台　籾殻痕　降灰
99	E4			灰原４	椀	D	c	16.7	5.3	8.2	8.8	口:11/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0011　貼付高台 籾殻痕
100	F4			灰原４	小皿	Ⅰ	a	8.0	2.4	3.3	－	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 10YR8/1	dot.0094　降灰
101	E4			灰原４	小皿	Ⅰ	d	8.2	2.2	4.5	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0106 内面に輪積痕
102	F4			灰原４	小皿	Ⅲ	a	7.5	1.9	3.6	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/2	dot.0069　降灰
103	F4			灰原４	小皿	Ⅲ	a	(8.3)	2.3	(4.0)	－	口:4/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	降灰　重ね焼き痕
104	F4			灰原４	小皿	Ⅲ	b	7.9	2.1	3.7	－	口:11/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0086　降灰 重ね焼き痕
105	F4			灰原４	小皿	Ⅲ	b	8.1	2.3	3.7	－	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/2	dot.0088　降灰 重ね焼き痕　内面に輪積痕
106	F4			灰原４	小皿	Ⅲ	f	(7.9)	2.3	3.8	－	口:2/12 底:11/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	降灰　板目状圧痕
107	F4			灰原４	小皿	Ⅳ	a	8.3	2.2	4.6	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0031　降灰 板目状圧痕
108	F4			灰原４	小皿	Ⅳ	d	7.7	2.2	4.7	－	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0060　降灰 板目状圧痕
109	E4			灰原４	焼台	－	－	最大長 13.3	最大幅 12.0	最大厚 7.0	－	－	指圧痕	－	－	上面に籾殻痕
110	E5			灰原４	焼台	－	－	最大長 13.2	最大幅 13.3	最大厚 4.3	－	－	指圧痕	－	－	dot.0058
111	E5			灰原５	椀	A	b	(15.3)	5.3	(7.6)	(8.0)	口:7/12 底:3/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0080　貼付高台 籾殻痕　降灰
112	E5			灰原５	椀	B	d	(15.6)	4.9	(7.6)	(8.0)	口:7/12 底:4/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0083　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕
113	E5			灰原５	椀	C	b	15.6	5.1	6.6	7.4	口:9/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0026　貼付高台 籾殻痕　降灰　板目状圧痕
114	D6			灰原５	椀	C	c	(15.2)	5.4	6.8	7.3	口:12/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0114　貼付高台 籾殻痕
115	E5			灰原５	椀	C	c	(16.4)	5.2	(8.4)	(9.2)	口:3/12 底:4/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0025　貼付高台 籾殻痕　降灰　重ね焼き痕
116	E5			灰原５	小皿	Ⅰ	b	8.1	2.4	4.2	－	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0082 板目状圧痕
117	D5			灰原５	小皿	Ⅰ	c	7.5	2.0	4.2	－	口:10/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0111　降灰
118	D5			灰原５	小皿	Ⅰ	c	7.9	1.9	4.6	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0112　降灰
119	E5			灰原５	小皿	Ⅰ	c	7.5	2.2	3.6	－	口:12/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	dot.0081　降灰 板目状圧痕
120	D6			灰原５	小皿	Ⅴ	c	8.4	2.5	3.4	－	口:8/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 指圧痕	灰白色 2.5Y8/1	降灰　板目状圧痕
121	E5			灰原５	小皿	Ⅴ	f	8.3	4.4	4.0	－	口:11/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	dot.0024　融着 降灰
122	E7	表土 掘削			無台 片口鉢	－	－	－	(3.6)	6.3	－	底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	内外面に籾殻痕 降灰　板目状圧痕
123		排土			小皿	Ⅳ	e	(8.0)	1.8	(5.0)	－	口:3/12 底:6/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白色 2.5Y8/1	－
124		排土			小皿	Ⅴ	f	(8.7)	2.2	4.2	－	口:4/12 底:12/12	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 回転糸切り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黄灰色 2.5Y6/1	降灰
125		排土			徳利			2.6	22.7	(9.6)	－	口:12/12 底:1/12以下	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 長石釉 鉄釉	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	浅黄橙色 10YR8/3	瀬戸美濃陶器 鉄釉により文字「大府」 「舎吉野□」「一四十四」

表 13 遺構観察表

遺構名	グリッド	窯体全体 全長	最大幅	主軸方位	標高上	標高下	焚口 幅	燃焼室 長さ	幅	床面傾斜角	分炎柱 長さ	幅	焼成室 長さ	幅	床面傾斜角	煙道 長さ	幅	床面傾斜角
ＳＹ01	D5	－	－	－	17.8	17.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ＳＹ02	E6・ E7・ D7	(7.6)	2.4	N-47-E	18.7	15.9	－	(0.8)	1.8	0.0			6.8	2.4	29.0	－	－	－
ＳＹ03	E7・ E8・ F7	(6.6)	2.4	N-39-E	18.3	15.6	－	(0.3)	(0.8)	計測不能			6.3	2.4	30.0	－	－	－

遺構名	グリッド	形状 平面	断面	切り合い に切られる	を切る	法量(m) 長径	短径	深さ	備考
ＳＫ01	D5	楕円形	皿形	－	－	1.293	1.046	0.168	
ＳＫ02	D6	楕円形	皿形	－	SK03	1.511	1.127	0.236	
ＳＫ03	D6	（楕円形）	皿形	SK02	－	0.972	-0.734	0.171	
ＳＫ04	D5・E5	不定形	楕円形	－	－	3.158	-1.729	0.391	工房内作業場
ＳＫ05	D6	不定形	皿形	－	－	3.307	2.62	0.291	ＳＹ01前庭部
ＳＫ06	E6	方形	逆三角形	－	－	1.026	-0.744	0.836	
ＳＰ01	D5	円形	段を有するU字形	－	－	0.254	-0.212	0.351	ロクロピット

図版1 調査前・検出・調査区壁面

1.調査前 南西から

2.調査前灰原露出状況（F4） 東から

3.調査前SY03露出状況（F7・8） 北東から

4.調査区北半検出状況 南西から

5.調査区北壁 南東から

6.調査区西壁北半 南東から

7.調査区西壁南半 南東から

8.調査区南壁 北西から

図版2 遺構

1.調査区北半完掘 南西から

2.調査区南半完掘 西から

1.SY01前庭部完掘 東から

2.SY01前庭部断面 南東から

3.SY01焚口完掘 東から

4.SK01完掘 北東から

5.SK01断面 北東から

図版4 遺構

1.SK02完掘 北東から

2.SK02断面 東から

3.SK03断面 東から

4.SK05断面 北東から

5.SK05遺物出土状況 北東から

1.SY02（左）・SY03（右）完掘 南西から

2.SY02完掘 南西から

3.SY02（窯体グリッドⅠ）天井検出 北から

4.SY02（窯体グリッドⅡ）天井検出 北東から

図版6 遺構

1.SY02分炎柱周辺遺物出土状況 東から

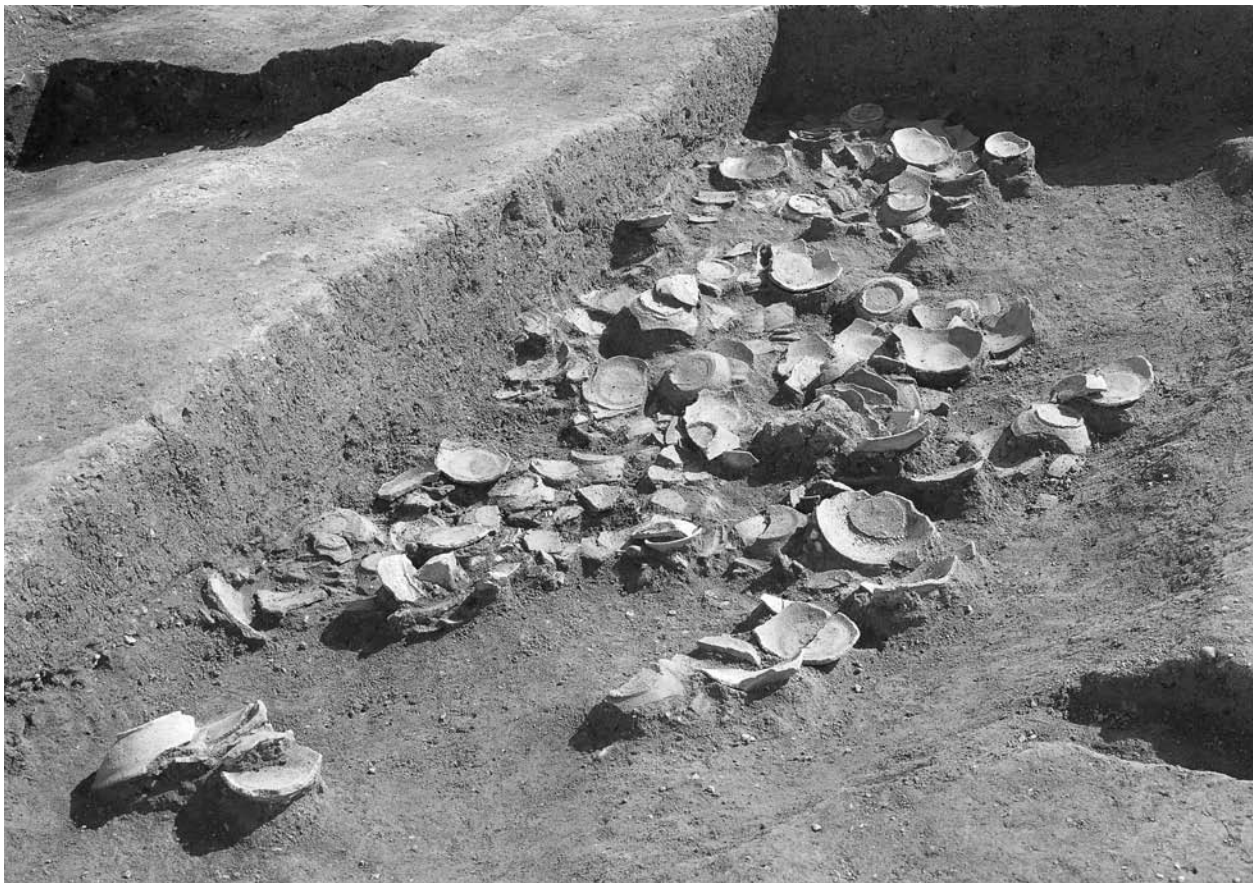
2.SY02（Aライン東半・Eライン）断面 南から

3.SY02（Aライン西半）断面 北東から

4.SY02分炎柱出土状況 南から

5.SY02掘削痕検出 北西から

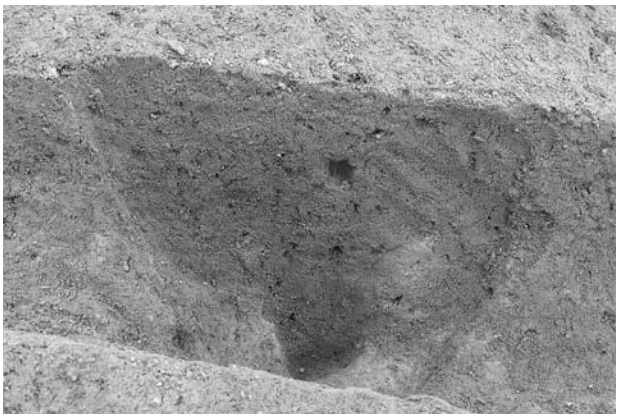
1.SK04・SP01完掘 南東から



2.SK04遺物出土状況 北西から

図版8 遺構

1.SP01完掘 南西から



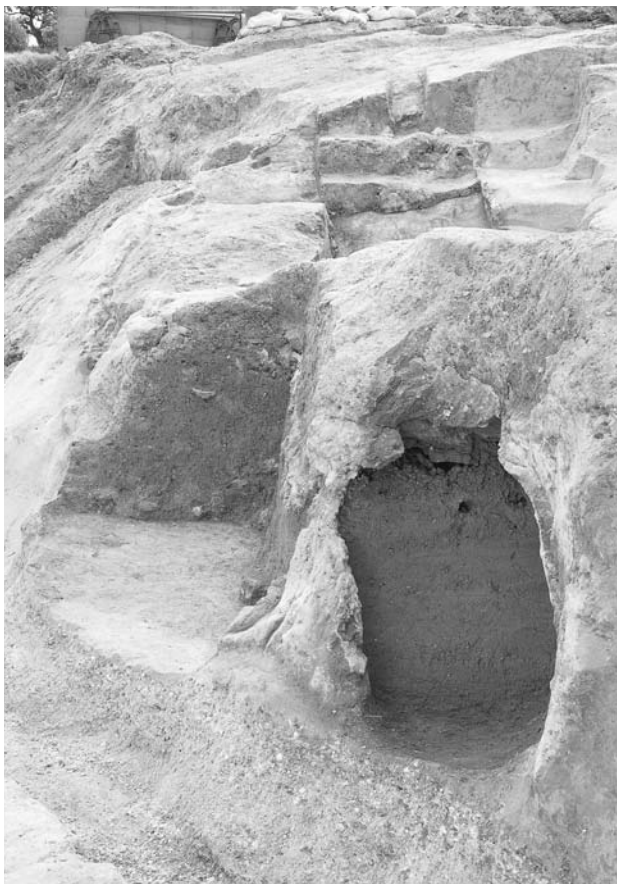
2.SP01断面 南から

3.SP01段下げ状況 南西から

4.SP01粘土出土状況 南西から

5.SP01断ち割り断面 南から

1.SY03完掘 南西から



2.SY03（Aライン西半・Bライン東半）断面 北東から

3.SY03（Bライン西半）断面 南から

4.SY03（Cライン西半・Dライン）断面 北から

5.SY03（窯体グリッドⅢ・Ⅴ）壁検出 北から

6.SY03（窯体グリッドⅡ・Ⅳ）壁検出 東から

図版10 遺構

1.SY03分炎柱出土状況 南西から

2.SY03断ち割り断面 東から

3.SY03（Cライン東半）断ち割り断面 北から

4.SK06完掘 北から

5.SK06断面 北から

1.灰原（C・Dライン）断面 南東から

2.灰原(Aライン北半)断面 北東から

3.灰原(Aライン南半)断面 東から

4.灰原(Bライン西半)断面 南西から

5.灰原(Bライン東半)断面 南東から

図版12 遺構

1.灰原(Cライン北半)断面 北東から

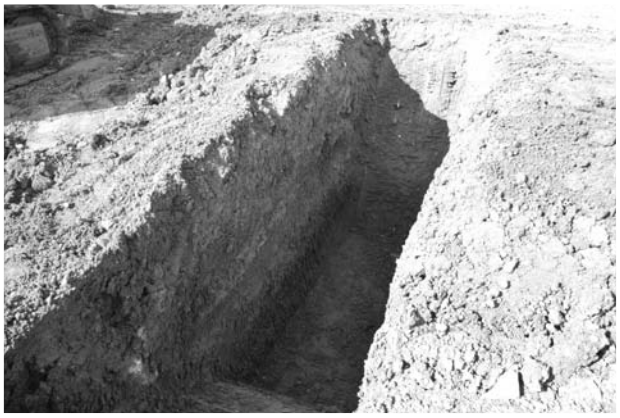
2.灰原(Cライン南半)断面 北東から

3.灰原(Dライン東半)断面 南から

4.灰原4遺物出土状況 南東から

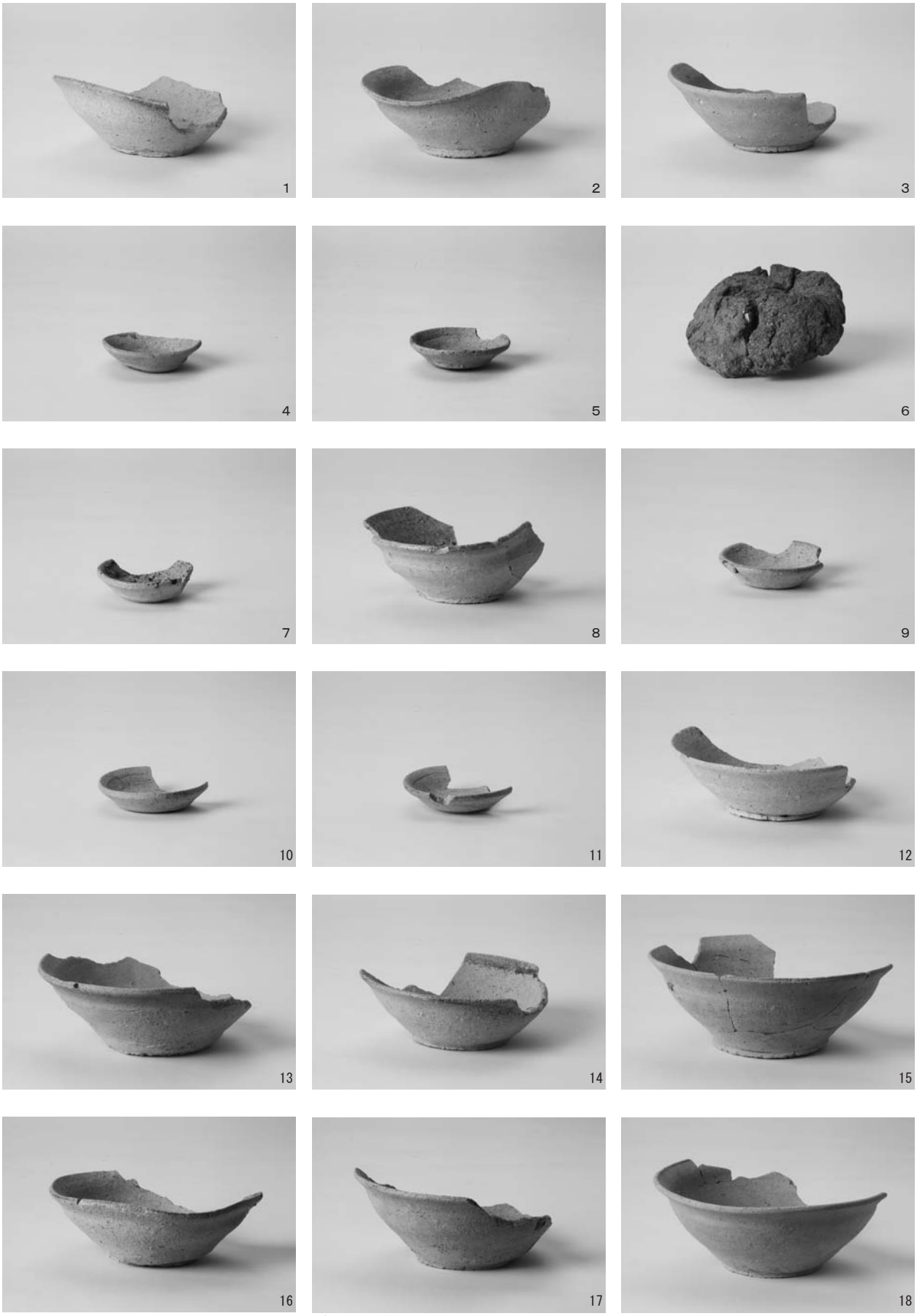
5.灰原4遺物出土状況 西から

6.灰原4遺物出土状況 南東から



7.コンクリート基礎試掘断面 北東から

図版13 遺物 SY01前庭部、SK01・02・05



ＳＹ01前庭部：１～６、ＳＫ01：７、ＳＫ02：８～11、ＳＫ05：12～18

図版14 遺物 SK05

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

ＳＫ05：19～36

図版15 遺物 SK05、SY02

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

ＳＫ05：37、ＳＹ02：38～53

図版16 遺物 SK04、SY03、SK06、灰原1・2

54

55

56

57

58

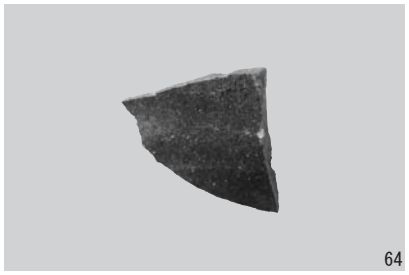
59

60

61

62

63


64

65

66

67

68

69

70

71

ＳＫ04：54～60、ＳＹ03：61～63、ＳＫ06：64、灰原１：65～69、灰原２：70・71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

灰原２：72～74、灰原３：75・76、灰原４：77～89

図版18 遺物 灰原4

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

灰原４：90～107

図版19 遺物 灰原4・5、遺構外

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

灰原４：108～110、灰原５：111～121、遺構外：122～125

報告書抄録

ふりがな	かわいけにしこよう
書名	川池西古窯
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋理恵（編）・杉山敬亮・湯川善一・小林克也・田中城久
編集機関	株式会社二友組
所在地	愛知県名古屋市名東区亀の井３丁目 177 番地
発行年月日	平成 29 年 12 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かわいけにし 川池西 こよう 古窯	おおぶし 大府市 ももやまちょう 桃山町 よんちょうめちない 四丁目地内	232238	4400075	35° 00′ 53″	136° 58′ 03″	20170213 ～ 20170421	333 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川池西 古窯	窯跡	平安時代末 ～ 鎌倉時代初頭	窯体３基 土坑６基 ピット１基 灰原１	山茶碗の碗 山茶碗の小皿 山茶碗の片口鉢	窯体３基の検出 大府市域で初めての ロクロピットを伴う 工房を検出

要約
12 世紀後葉～ 13 世紀初頭に操業していた窯体３基、それに伴う前庭部、作業場、灰原を検出した。猿投窯で類例が少なく、大府市域では初めてのロクロピットを伴う工房を確認。出土遺物の割合は、山茶碗・小皿が大半を占め、片口鉢が少量であった。

平成 29 年 12 月 25 日発行

川　池　西　古　窯

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

編集・発行　株式会社二友組
愛知県名古屋市名東区亀の井３丁目 177 番地

監修　大府市教育委員会
愛知県大府市中央町五丁目 70 番地

印刷　竹田印刷株式会社
愛知県名古屋市昭和区白金１丁目 11 番 10 号